ンフィニット・ストラトス　黒き聖騎士の物語(ブラック・パラディンズ・ストーリー)

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　インフィニット・ストラトス　　黒き聖騎士の物語（ブラック・パラディンズ・ストーリー）

【Ｎコード】
Ｎ３５３１Ｙ

【作者名】
暁

【あらすじ】
★２０１７年５月２４日。二体の騎士――――インフィニット・ストラトスが、この世界に降臨した。

時は流れ、２０２５年。
インフィニット・ストラトス――ＩＳが、この世の一般常識になった。

そんな中、偶然ＩＳを駆る事となった少年、織斑一夏と、ＩＳ学

園のとある教師、金寺龍輔。
ＩＳ学園にて二人が出会ったとき、彼らを取り巻く世界が動き始める。

その先にあるのは、光か、闇か、それとも混沌か――――

※この二次創作は、原作の設定・世界観・ＩＳ・人物を中軸にしながらも、もう一人オリジナルの主人公を追加して、設定等を作者が自分なりに細かくしたりしています。用は、「作者が考えたオリジナルＩＳ」です。
また、作者は「機動戦士ガンダムＯＯ」の影響を多大に受けていますので、そちらの要素が出てくる場合もありますので、ご了承ください。

※１１／２４、名前とあらすじ変更しました。

※初の二次創作なのでいささか稚拙な部分もありますが、読んでいただけると嬉しいです。宜しくお願いします！

0．騎士の覚醒（アウェイニング）（前書き）

始めまして。暁です。
自身初投稿です。

まだなれない部分も多いですが、書き続けて行きたいと思います。

まず序章。
物語の動き始めた時。

0．騎士の覚醒（アウェイニング）

◆

世界というのは、常に止まらず動き続けているものである。

そして人の運命も、絶えず動き続けている。

そしてそれは、時に遅く、時に急激である。

◆

数年前、全世界の弾道ミサイル発射装置がハッキングされ、制御不能となったそれらが日本へ向かっていた。

その数、およそ２０００。――――と思われていた。

後に判明した事――――各国政府の元で厳重に隠蔽された――――だが、実際に日本へ向かったミサイルは、そのうちの約６８パーセントだった。

そして残りの３２パーセントは、あろうことか、ＥＵ圏内の複数の市町村へ向かっていた。

◆

都市部に近いヨーロッパのとある田舎町。

その日、まだ幼い少女は逃げていた。

少女だけではない。その華奢な腕を掴んでいる母親も、その町の全員も逃げていた。

何故か？

――――生き延びるためだ。

…最も、少女は母親のされるがままになっているだけなのだが。

町ではひっきりなしにサイレンが響き、後にくるであろう危機を知らせている。

少女は、母親に華奢な腕を掴まれつつ、分けもわからないまま同じように全力で逃げていた。

「――――ミサイルだ！！」

不意に誰かが叫んだ声に、その場に居合わせた全員が空を見上げる。

――――みさいる？
――――なんだろう、それ？

少女にはわからなかった。
自分の目に映っている空に見える無数の黒い点が、人々の命を奪い、人々が作り上げてきたものをいとも簡単に壊す兵器である事を。

「――――――――――！！」

自分の名を母親が叫ぶ。
阿鼻叫喚。
人々はパニックに陥り、そこは地獄絵図ともいえる光景となる。

やがて、その黒い点が徐々に近づいてくる。
それを思わずぼけっと眺めてしまう少女。
母親が、自分の娘である少女を抱きしめる。

そして、その黒い点は炸裂した。

――――――彼女等のはるか上空で。

――――――それも、突如飛来した光線によって。

「…え？」

ミサイルが自分たちの近くで炸裂すると思い、自分の娘をきつく抱きしめていた母親は、思わず間抜けな声を出してしまった。

彼女だけではない。

自分たちへの脅威が一時消え去った事に驚きを隠せず、町の住民からは困惑の声が出る。

上空では、どこからか飛来する薄いピンク色の光線が、的確にミサイルを打ち抜いていた。

それはミサイルだけでなく、そのミサイルを投下した戦闘機も的確に打ち抜き、爆炎と煙に変える。

一分もしない間に、町の住民に迫っていた脅威は全て消え去る。

そして、それは現れた。

一見すると、それはヒトガタに見える。
だが、確かにそうだ。そのシルエットは紛れも無く人間。まるで、人が何かのパワードスーツを着ているようだった。
そして、その背中から両肩に配置されている、特徴的な翼状のスラスターのようなもの。
そこから放出されている淡い白銀の光子が、少女にとって印象に残った。

「きれい…」

思わずそんな声が出る。
それは町の住民たちも同じようで、次々と感嘆の声を漏らしていた。
暫くしないうちにその場に停滞していたヒトガタは飛び去り、都市部の方へと向かっていった。

「き…救世主だ…」

誰かが、そんな声を出す。

「あれは…あの聖騎士（パラディン）は…我々の救世主だ！！」

そして、大歓声。

届かないであろう事は承知している。だがそれでも、住民たちは自分たちを救った「救世主」という名の聖騎士（パラディン）に対する賞賛だった。

その中で、少女は呟く。

「わたしもああなりたいなぁ…」

誰かのために戦う救世主。

このとき少女は、先ほど現れた聖騎士（パラディン）に対して微かな憧れを抱いた。

「そうね…」

自分の娘を後ろから軽く抱きしめ、母親は言う。

「もし…あなたが人の…誰かのために行動したいと思えば…きっと…」

少女の視線は、いつまでも聖騎士（パラディン）が飛び去った方向へ向いていた。

２０１７年５月２４日。

後に「白騎士事件」と呼ばれるようになる日本近海での一件。

第二次北欧戦争終戦。

二体の騎士は、世界の運命を加速させる事となる。

0．騎士の覚醒（アウェイニング）（後書き）

明確な年月、月日を設定してしまいました。
不評ならば少し考えます。なにぶんこう言う細かい設定にこだわってしまう性質なので…

希望があれば、オリジナル主人公の設定及びこの二次創作内での世界観などの設定を出したいと思います。
既に設定等が自分の中で出来上がっているので。
まあ、出したほうがいいんだと思いますけど。

指摘、感想お願いします。

★人物設定・世界観設定・用語集★（前書き）

ここでは、世界観等の設定および、一夏と並ぶもう一人の主人公の紹介をしたいと思います。

書き忘れましたが、本作品はダブル主人公制度でいきます。

★人物設定・世界観設定・用語集★

☆オリジナル主要人物

★金寺龍輔（Ｒｙｕｓｕｋｅ　Ｋａｎａｄｅｒａ）
○本作の主人公の一人。表向きは日本出身。本編開始時２４歳。

・一年一組副担任。ＩＳの基礎理論、世界史、整備技術を担当する。

・身長１８０センチメートル。若干はねた黒髪で、髪型はあまり気にしていない。

・右の眼が赤色のオッドアイ。生まれつきではなく、ある事件が影響している。

・普段は紺色のＹシャツの上に黒いスーツを着用している（全身真っ黒）。明るい色の服を着る事は絶対にない。

・性格はクールで無愛想。己の感情はほとんど出さない。やや屁理屈が多い現実主義者。

・出生から２１歳までの経歴が全世界のデータベースから削除されている。金寺の全ての経歴を知るのは束、千冬、更識楯無のみ。

・本編開始の二ヶ月前にＩＳ学園の教師に就任する。一ヵ月半の教員研修を受け、２０２５年度四月から一年一組の副担任となった。

☆世界観設定

・西暦２０２５年。

・再生可能エネルギー、電気自動車などが完全に普及、量子コンピュータ、ゴッタルドベーストンネル、リニアモーターカーの完全実現、宇宙旅行が本格的に始まるなど、科学技術の発展が著しい。

・地球温暖化、森林破壊などの環境問題深刻化を食い止めるため、全世界が一丸となってその問題に取り組んでいる。

・時を同じくして世界各国で軍事開発が目覚ましい発展を遂げており、それ故第二次冷戦状態になりつつある。
　ちなみに、核兵器及び原子力エネルギーは全て封印されている。

・ＩＳが登場して以降、軍隊の重役にはＩＳを操縦できるという事で女性が優遇される傾向となり、それに乗じて女性優位を掲げる政党が増えている。
　一部では女尊男卑を唱える者もおり、それらに関する男女差別が社会問題となっている。

・ＩＳは表面上、スポーツ用のパワードスーツ及び宇宙服となっているが、現存するＩＳの六割が軍事転用されている。
　女性優位の風潮は、軍内では当たり前で、一部の社会にも浸透しかけている。

☆インフィニット・ストラトス

・宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。
開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」に加えて北欧戦争

を強引に終了させた事もあり、従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡り、宇宙進出を兼ねて飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がＩＳに移っていった。

・開発者は宇宙進出を第一にして造ったのだが、それは一向に進まず開発者が第一に危惧していた軍事転用が主になってしまうという、皮肉な事態となっている。

・ＩＳは核となるコア（正式名称インフィニティ・コア。金寺曰く「無限炉」。）と、特殊カーボンによって形成される腕や脚などの部分的な装甲であるＩＳアーマーから形成されている。

・コアが最終的に埋め込まれる場所は機体によって違う。場所によってコアエネルギーの伝達力が変わる事は特別な細工を施さない限り無い。

・コアによって各装甲に伝達されたエネルギーによって、絶対防御とシールドバリアが構成される。

・初期設定と最適化処理を終えて、特定の人物の専用機となったＩＳのコアは、実質的にその人物の肉体と一体化する。金寺曰く「その人間の第二の心臓と脳みたいなものになる」。
故に、常に搭乗者とコアの間で意識・動作伝達が行われる。

・武装を素粒子レベルに分解して、収納する事が出来る（一般的には、量子化させて保存できる特殊なデータ領域がある、といわれている）。

・量子コンピュータの搭載に成功している。機体のＯＳなどのシステムは、この量子コンピュータによって構築される。

・搭乗者の戦闘経験蓄積や、精神の成長などの要素が絡む事で、それにコアが反応して形状や性能を大きく変える形態移行が行われる。

・現在、全世界に４６７のコアが存在し、ＩＳそのものは４６４機が存在（封印された白騎士を含めて）。

☆パッシブ・イナーシャル・キャンセラー

・通称ＰＩＣ。日本語表記は「受動的な慣性制御装置」。
　シールドバリアによって発生する空間干渉システム。これを量子コンピュータで制御する事で、浮遊・加減速などを行うことができる。

☆ハイパーセンサー

・ＩＳに搭載されている量子コンピュータによって構成される高性能センサー。

☆シールドバリア・絶対防御

・全てのＩＳに備わっている特殊防衛能力。
　コアから各装甲に伝達されたエネルギーを強固な膜として展開し、あらゆる衝撃などを緩和する特殊システム。

☆北欧戦争

・２０１７年5月２３日に開戦したイギリス・スペイン側陣営対ドイツ・フランス側陣営による大規模になると思われた戦争。

・きっかけは、イギリス、デンマークらと同盟を結んでいたスペインがフランスの国防基地に空襲を仕掛けたことから始まる。

・両陣営の戦力は拮抗状態であり、空襲などで多くの民間人に被害が出る、と思われた。

・しかし三日後に突如、全軍のミサイルがハッキングされ日本へ向かっていった（白騎士事件）と同時、ＩＳが両陣営の交戦領域に介入した途端自体は一転。ＩＳの圧倒的性能により二日半で両陣営が完全に沈黙。

双方は停戦協定を結び、軍事同盟も破棄する事になった。

・後にフランス国防基地への空襲を企てたスペイン軍の過激派は拘束され、極刑を宣告された。

・ちなみに、何故ＩＳが両陣営を圧倒できたかというと、開発者曰く「試作型だから想像以上に性能がぶっ飛んでしまった」との事。

これにより、以降に作られたＩＳは意図的に性能が抑えられている。

・その開発者を両陣営が見逃すわけが無く、様々な国家が強引に引き入れようとしたが、それに辟易した本人は祖国である日本を選んだ。

・この一件を境にＩＳが様々な方面で認められるようになり、軍事に、宇宙進出に役立つ事となる。

☆ＩＳ操縦者育成特殊国立高等学校

・アラスカ協定に基づいて日本に設置された通称、ＩＳ学園。２０１９年１０月１０日創立。

・所在地は、日本の神奈川県藤沢市沿岸部。ちなみに、江の島が意外と近くにある。

・学科は、普通科（一学年）、操縦科、整備科、宇宙専攻科（二、三年）がある。

・一学年は一クラス３０人で６クラス。学年全体１８０人、二学年は全体で１７９人、三学年は全体で１８５人。２０２５年４月６日現在、生徒総数５４４人。

通常の高等学校の平均と比べると、やや少ない。これは学園が所持しているＩＳの数（５０機の訓練機が存在）に関係している。

・生徒総数５４４人の内、５４３人が女子。男子は織斑一夏一人となっている。

当初は男女共学だったものの、元からＩＳに関わろうとする男子も少なく、初期に入学した男子も全員中退したため、実質的な女子高となっていた。ゆえに、洗面所などの施設の七割は女性用のものとなっている

・校舎以外の主な施設に、訓練・試合用のアリーナが第一から第六まであり、二人一部屋の学生寮、大食堂、大浴場、ウェイトルームなどがある。

・学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉許されないという国際規約が存在し、それ故新技術の稼動試験などに適している。

・制服は白を基調とした特殊なデザインになっている。個人のカスタムが自由で、上着のスタイルから下履きまで生徒の個が現れる。胸元のリボン（女子のみ）の色は学年ごとに違い、一年は青、二年は黄、三年は赤となっている。

・職員は、幾度にわたる面接や試験を経て決められる。ＩＳ学園の教師である以上、その選考は極めて厳重。

☆倉持技研

・山梨県甲府市の山間にある、日本最大手のＩＳ開発社。世界シェアは第一位。金寺が二年前に一時期在籍していた。

・【打鉄】、【白式】などがここで開発された。ＩＳ学園卒業生の最も多い就職先である。

・社名の由来は社長の苗字に由来する。

☆バッキンガム・ファクトリー

・イギリス国最大手のＩＳ開発社。

・一年前に国内の二強であったウェールズ・ファクトリーとリヴァプールが合併した企業。世界シェアは第四位。

・名の由来は、新しく作られたファクトリーがバッキンガム宮殿の近くであることから。

★人物設定・世界観設定・用語集★（後書き）

物語が進み次第、随時更新して行きたいと思います。

人物設定に関しては、今の所オリジナルの主要人物は金寺龍輔一人です。
彼が1年1組の副担任という事で、山田先生の出番がなくなったように見えますが、見せ場はしっかりと作ります。主に本業のほうで。

尚、既存の登場人物に関しても少々設定が違ったりしますが、それは後に書きたいと思います（設定が違う理由は、ほとんどが金寺が関わった事によるもの）。

世界観やＩＳの設定ですが、原作を軸に足りなかったり大雑把なところを更に付け足したりしてみた結果です。
色々めちゃくちゃに見えるかもしれませんが、自分なりに考えた結果です。

ちなみに、何故ＩＳ学園の所在地に神奈川県藤沢市を選んだかというと、沿岸部にあるというところ、首都・東京からのアクセスなどを考慮した結果です。

東京湾沿いにあるのはいくらなんでもおかしいですよね。

ずっと「ＩＳ学園ってどこにあるんだろう?」と思っていて、この二次創作を書く際に、

「どうせだから自分で決めちゃえ!」

はい単純ですね俺。
そんな自分が嫌になります。

でも、こういうところまでこだわりたくなる性分なんです。お許しを。

こういうのが嫌いな人、拒絶したい人には、まことに申し訳ございません。

既存のコアの数を踏まえると全世界に存在するＩＳの数がおかしいですが、それにはしっかり理由があります。

後に作中に出てくる単語で「これなんだ?」というのがありましたら感想を経て聞いてください。
確認次第載せていきます。

何か指摘があればお願いします。

★ＩＳデータベース★（前書き）

ここでは、本作品に登場する主なＩＳについて記述していきます。そのうち?が出てくるかも…

原作とほとんど変わらないものから一部変更されたものまで、色々です。

★ISデータベース★

★第一世代型

・その全てが試作型、所謂プロトタイプである。
　初期に作られた二機は性能が桁外れのものとなってしまっているため、現行の機体と基本性能を比較するのは邪道である。

☆【白騎士（しろきし）】

○日本製第一世代試作型。

☆【？？？？？】

・待機形態：？？？？？？？
・搭乗者：？？？？
・コア搭載位置：？？？？？？？？？

○日本製第一世代試作型。

☆【暮桜（くれざくら）】

・待機形態：不明
・搭乗者：織斑千冬
・コア搭載位置：右腕装甲内に一基

○日本製第一世代型。白兵戦のみを想定された超特化型である。
　前述したとおり近接格闘戦に特化しており、機動力も通常のものとは桁外れ。
　それゆえか、防御面はさほど優秀でなく、燃費も良くない。一撃必殺に特化した機体の先駆けである。

名前の由来は不明だが、「夕暮れに舞う桜の花びら」のように相手を美しく華麗に薙ぎ倒す千冬の姿から名付けられたものと思われる。

★単一使用能力（ワンオフ・アビリティー）：《零落白夜（れいらくびゃくや）》

・コアによるエネルギー性質のもの全てを無効化する【暮桜】の必殺技。通称「バリア無効化攻撃」。

無論シールドバリアも削り取れるため、この一撃だけでも相手のシールドエネルギーを大幅に削る事が出来る。

しかし、発動時には自身のシールドエネルギーを消費するため、諸刃の剣である。

第一回の世界大会で千冬は、瞬時加速で接近し零落白夜で瞬殺するというシンプルかつ強力な戦法で、見事に優勝して見せた。

「零落」とは草木の枯れ落ちること。「白夜」とは、高緯度地方で薄明が長時間続く現象のこと。

基本武装

・近接特化ブレード《雪片（ゆきひら）》

零落白夜用にカスタマイズされたオリジナルの近接特化ブレード。バリア無効化攻撃発動時には、刃が実体剣でなくビームブレード状に変わる。

ちなみに、「雪片」という字を「ゆきひら」ではなく「せっぺん」と読むと、雪の結晶体が互いにいくつか付着して、ある大きさになったもの、つまり雪のひとひらという意味となる。

恐らく、零落白夜発動時の《雪片》の刃が、雪のように美しい白色である事から命名されたと思われる。

この名前の刀は、後に【白式】に継がれることとなる。

★第二世代型
・各国で軍事転用が主となったのを受け、兵器として開発されたモデル。現在世界で一番出回っている。
後付武装（イコライザ）による戦闘用途の多様化に主眼が置かれている。

☆【打鉄（うちがね）】
・主な搭乗者：篠ノ之箒、その他ＩＳ学園生徒など
・コア搭載位置：左脚装甲内に一基

○日本製第二世代型。防御面を重視されており、初心者でも扱いやすいモデル。
ＩＳ学園でも生徒用訓練機として配備されている。黒色の外見は武者鎧のようになっており、お国柄が表れている。

機体名は、打撃の「打」と、日本刀の原料である「鉄」を合わせたものと思われる。

基本武装
・近接ブレード
本機の基本武装。日本刀のような形状をしている。

※その他、様々な武装を装備する事が出来る。
一例：五六口径アサルトライフル
：五九口径ロングライフル

：近接ショートブレード

☆【ラファール・リヴァイヴ】
・主な搭乗者：ＩＳ学園教師陣など
・コア搭載位置：右肩装甲内に一基

○フランスのデュノア社が製造したフランス製第二世代型。通称「Ｒ－Ｖ（アールブイ）」。
外見上の特徴は、シールドを兼ねたネイビーカラーをした四枚の多方向加速推進翼（マルチスラスター）。
【打鉄】と同じく、操縦しやすく汎用性が高い。後付武装（イコライザ）が豊富なため、武器の換装次第で全ての距離に対応出来る。
第二世代型としては比較的最期に開発されたモデルだが、性能自体は高く各国からの総合的な評価は高い。
現在、世界第三位のシェアを誇り、七カ国でライセンス生産され、１２カ国で制式採用されているなど、日本の【打鉄】と並ぶ、第二世代型屈指の名機である。
機体名のラファールはフランス語で「突風」の意。リヴァイヴはフランス語で「生き返る」の意。
すなわちフランス語で「突風（疾風）の再誕」という意味になる。

基本武装
・五一口径アサルトライフル《レッドバレット》
全ての【ラファール・リヴァイヴ】共通の基本武装。アメリカのクラウス会製の実弾兵装。実用性と信頼性が高く、多くの国で使われている。
「レッドバレット」を直訳すると、「赤い弾丸」という意味になる。

※その他、様々な武装を装備する事が出来る。

★第三世代型

・「操縦者の意思による操作装置」（イメージ・インターフェース）を用いた「第三世代型兵器」の搭載を目標としている。
　未だに試作型の域を出ておらず、一部を除いた機体は、燃費が悪く重要な課題となっている。

☆【ブルー・ティアーズ】

・待機形態：左耳の青いイヤーカフス
・搭乗者：セシリア・オルコット
・コア搭載位置：右脚装甲内に一基

○アイルランド製第三世代型。ビーム兵器の実働データのサンプリングを目的とした試作機。
　最大稼動時はビーム自体も自在に操るＢＴ偏向制御射撃（フレキシブル）が可能。

　「ブルー・ティアーズ」は、直訳すると「蒼い雫」という意味になる。

武装

・六七口径高エネルギーレーザーライフル《スターライトｍｋ？》【ブルー・ティアーズ】専用の長身スナイパーライフル。

・近接ショートブレード《インターセプター》
防御用の近接武装。未だにセシリアはこれを上手く活用できていな

いのが現状。

ちなみに「インターセプト」というのは、アメリカンフットボールなどの球技で相手のパスの隙を突きボールを奪うこと。よって名は「妨害するもの」という意になると思われる。

・第三世代型・無線式自立機動ライフルビット《ブルー・ティアーズ》×六
四基の射撃型特殊レーザービット＋二基の弾道型ミサイルビットから成り立つ。

☆【甲龍（シェンロン）】
・待機形態：マゼンタのブレスレット
・搭乗者：凰鈴音
・コア搭載位置：左腕装甲内に一基

○中国製第三世代型。近接格闘戦型で、燃費効率のよさと戦闘に置ける安定性を第一に設計された実戦モデル。
肩の　非固定浮遊部位（アンロックユニット）に特徴的な棘付き装甲（スパイク・アーマー）を持ち、スライドした中に衝撃砲二門を両肩に装備している。
「シェンロン（神龍）」とは、八世紀初めに唐で用いられた元号である。「甲」の字は、装甲の「甲」から取ったものと思われる。

武装
・青龍刀《双天牙月（そうてんかげつ）》×二
斬るのではなく重さで叩き割るための大型近接武装。片刃で湾曲し

た片手刀で、日本刀などに比べ刃の幅が非常に広い。
重量と遠心力をつけ斬りつけることにより威力を発揮する。連結することで投擲武器としても使用可能。

・第三世代型・空間圧作用兵器・衝撃砲《龍咆(りゅうほう)》×二
空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す。
砲身も砲弾も眼に見えないのが特徴。その上、砲身斜角がほぼ制限なしで撃てる。文字通り「死角が無い」。
装備を換装する事により、拡散衝撃砲や貫通衝撃砲などに切り替える事も可能。

★第四世代型
・装備の換装無しでの全領域・全局面展開運用能力の獲得を目指した世代。
現在はまだ机上の空論である。

☆【白式(びゃくしき)】
・待機形態：右腕の白いガントレット
・搭乗者：織斑一夏
・コア搭載位置：両翼のウイングスラスターに二基

○日本製第四世代型（展開装甲が雪片弐型に搭載されている）。倉持技研製。元は欠陥機として放置されていたが、それに束が手を加

えた。
　ツインインフィニティシステム搭載機。だが、本機に搭載されているコアは同調を前提とされていないため、同調率の不安定さが永遠の課題となっている。

☆ツインインフィニティシステム
・一つの機体にコアを二つ搭載し、エネルギーの出力を二倍ではなく二乗化するというシステム。
　完全に稼動するにはコア同士の同調が不可欠であり、これが一定の値を超えないと正常に稼動しない。
　二つのコアは同調専用に造られたオリジナルではないので、同調率が安定しない。

武装
・近接特化ブレード《雪片弐型（ゆきひらにがた）》
【暮桜】の主武装であった《雪片》の発展型。第四世代技術である「展開装甲」が使われている本機唯一の武装。
バリア無効化攻撃発動時にはビームソードを形成し、通常は実体剣である。

★単一使用能力（ワンオフ・アビリティー）：《零落白夜（れいらくびゃくや）》
・コアによるエネルギー性質のもの全てを無効化する【白式】の必殺技。通称「バリア無効化攻撃」。
　無論シールドバリアも削り取れるため、この一撃だけでも相手のシールドエネルギーを大幅に削る事が出来る。
　しかし、発動時には自身のシールドエネルギーを消費するため、

諸刃の剣である。
本来は【暮桜】の単一使用能力。

★ＩＳデータベース★（後書き）

何か疑問点等があれば、質問お願いします。

1．出会い（前書き）

いよいよ、一夏と金寺の物語が始動します。

ちなみに、大体5章ぐらい書き溜めているので、感覚を短くして投稿していきます

1．出会い

◆

日本の神奈川県藤沢市に存在する、ＩＳ学園――正式名称、ＩＳ操縦者育成特殊国立高等学校。
世界初の、ＩＳに関する人材――主に操縦者の育成を目的とされた、高等学校である。

運営及び資金調達は日本国が行い、得られた技術は協定参加国の共有財産として公開する義務があり、黙秘権は一切無い。

何故そのような事になったかというと、数年前の国連理事総会にて、ＥＵサイドが言い放った一言が原因である。

『貴殿の国の者が開発したＩＳによって、今までの様々な常識が打ち破られ軍事バランスすら壊してしまった。日本国は責任を持って、それらの管理などを行い、得られた技術を他国に提供せよ』。

簡潔に言えば、このようなものである。
一部では、ＩＳによって軍隊の大半をつぶされかけたＥＵサイドの報復といわれていたが、定かではない。

これに各国は賛同。日本政府は受け入れざるを得なくなってしまった。何せ、これを拒否すれば外交に多大なる影響が出る可能性があるのだ。

さて置き、この学園に入学した一年生は、まずＩＳの基本事項や

通常の高校の学習要領などを習う『普通科』に入る。

二年生時から学科が別れ、国家代表を目指す操縦者の育成に重点を置いた『操縦科』、ＩＳの開発・研究・整備を専攻する『整備科』、本格的に宇宙進出を目指した学習を行う『宇宙専攻科』の三つに分かれる。

一見、そんなＩＳ学園はそのような点以外普通の高校と変わらないように見えるが、一つ特徴がある。

全校生徒が女子なのだ。

きっかけは、白騎士事件――北欧戦争終結――から二日後に発覚した、ＩＳの致命的欠陥である。

その欠陥とは、『女性にしか反応しない』。

ＩＳは、機体装甲に触れ、そこから流れ込んでくるＩＳの情報を読み取る事で、初めて搭乗できるようになる。

だが、どういうわけか、北欧戦争終結後、ＩＳが男性に反応せず、女性にしか反応しなくなってしまったのだ。

原因――――不明。

この事態には、生みの親である篠ノ之束も頭を抱えざるを得なくなったといわれている。

その原因が、ＩＳの中枢を担う動力源『インフィニティ・コア』――主な呼び名は「コア」――にある事は容易に想像できたらしいが、何をしても原因の解明には至らなかったという。

結果、新世代のパワードスーツであるＩＳは、『女性専用』のレッテルを貼られることとなったのだ。
それゆえ、自然と――――必然的に、ＩＳに関する事業、団体には、女性が多く関わるようになる。

この学園も当初は男子がいたが、それも極僅か。その極僅かの男子も中退し、結果的にＩＳ学園は実質的な女子高になってしまった。
そのＩＳ学園に、このたび数年ぶりに男子学生が入学する事になった。

名前は織斑一夏。

入学式一ヶ月前の入試で、偶発的な要素によってＩＳを動かしてしまった、『世界初の男性ＩＳ操縦者』だ。

そのせいか、今年度の入学式はやけに盛り上がっていた。

◆

このめでたい式典の日に、一人だけ出席していない教師がいた。

その教師は諸事情により、学生寮の１０２６室に自分の住まいを置いている。

“彼”は、本来は備え付けコンピュータしか置いていない机の上

に無理やり設置した二つの大型空間投影モニターと四つの小型モニターに目を通し、手元のキーを一定のリズムで叩いている。

今モニターに表示されているのは、日本製の第二世代型ＩＳ、【打鉄】の機体スペックなどである。

六つのモニターに表示されている情報を亜音速で一気に読み取るのは常人にとって至難の業だが、それを実行しているその青年――そもそも彼は常人ではない――にとっては、何の苦にもならない事だ。

「しかし…日本人は式典が好きなんだな…」

先ほど少しだけ覗いてきた入学式の光景を思い出し、キーを叩く手を止めながら青年は呟く。

もっとも、表面上日本人である彼が言うにはいささか違和感があるが。

とはいえ、このＩＳ学園の教師になったのはつい三か月前だ。それも突然。

ここ数年ＩＳの技術者として世界を飛び回っていた彼に正式な要請が来たのはその半月前。数年契約で、学生寮の一室を私設研究所として使用してもよいというおまけ付きだった。

彼は少し悩んだが、結局ＯＫの返事を返した。何より施設が軒並み整っているこのＩＳ学園なら研究に没頭できるだろうし、各国から怒涛の如く来るオファーにも辟易していたところだった。全世界のＩＳに関する技術の４８パーセントが集うこの場所は、彼のような研究者にとって最高の環境と言っても過言ではない。

椅子の背もたれに体重を預け、脳裏に浮かぶこれまで世界を飛び

続けた日々の記憶に、彼が意識を集中させていると――。

コンコン。

部屋のドアをノックする音が耳に入ってきた。

「…誰だ」

「私だ」

女性にしては鋭い、凛とした声を聞いて、彼はゆっくりと立ち上がった。一応、彼女はこの学園において自分の上司のようなものである。

「何か用で？」

「馬鹿者、今日は入学式だろう。一年一組の副担任になったお前に用が無いわけがない」

「…それもそうか…」

女性――織斑千冬の言葉に嘆息すると、彼はベッドの近くにある洋服掛けにある黒のスーツを着る。

彼の服装は黒のスーツ上下に、上は中に紺色のYシャツを着込んでいる。黒は彼のパーソナルカラーのようなもので、何色にも染まらずに自分らしさを貫く彼に合う色だ。

右拳で胸元を数回軽く小突き、大きく息を吸い、吐くと、彼はドアへ歩んでいく。

ドアを開けると目の前に千冬の姿があった。彼女は一年一組担任である。

「悪いがこちらは職員会議があってな…それまで金寺、クラスを頼む」
「オーライ。行ってくるぜ」
千冬に一言だけ言って、金寺龍輔は、一年一組の教室へ向かう。

世界は、急速に動き出す。

◆

この学園内では、男性というのはまさに希少生物で、好奇の目で見られることが多い。

一年一組の教室内、真ん中の一番前の席に座る少年――織斑一夏は、まさに今そんな視線を真に受けていた。

何せ、一年一組３０人中、彼以外の生徒２９人は女子なのだ。
声を掛けられているわけではないが、視線が身に突き刺さる。ヒソヒソ話している声も聞こえるが、十中八九一夏のことを話しているのだろう。

とにかく、居心地が悪く、つらかった。

女子だらけの学園――――親友曰く、『楽園』に一夏が行く事になると知ったとき、彼の友人たちは揃いも揃って一夏のことを『羨ましい』と言ってきたのだが、今の一夏は彼らに『これが現実だ！』

と叫えてやりたかった。

そんな中で彼の左側、窓際の席にいるポニーテールの少女の名前を彼は知っている。

篠ノ之箒。小学一年生から四年生まで時を共にした剣道のライバルで、その苗字の通り、ＩＳの基礎理論を提唱した篠ノ之束博士の妹である。

……なのだが、どうも彼女は先ほどから、近寄りがたいオーラを放っている。一度視線が合ったが、何故か箒はすぐに視線を逸らしてしまった。

これから先の学園生活を想像し、一夏が本格的に心配し始めたとき、教室のドアが開いて一人の青年が入ってきた。

大半の女子生徒から、黄色い声があがる。それもそのはず、青年は一般的にイケメンと呼ばれるような顔立ちをしている。

一夏はそれ以上に青年の醸し出す雰囲気に思わず声をあげそうになった。

整った顔立ちに、鋭い眼、若干ウェーブがかかった黒い髪。

だがそれ以上に一夏の目に焼きついたのは、色が違う眼――――オッドアイだった。

左眼が漆黒なのに対し、右眼は禍々しい鮮血のような赤色。

それがあまりにも、印象に残った。

生徒の歓声に溜息をついた青年は、一同を黙らせつつ教壇に向か

うと、やや面倒くさそうに手元のコンソールパネルを操作する。
程なくして、教室前方の電子黒板に『金寺龍輔』という文字が浮かび上がった。

「今からＳＨＲだが…手短に終わらせる。俺は一組副担任の金寺だ。担当は主にＩＳの基礎理論、世界史、整備技術。…以上だ、何か言いたいことあるか？」

言葉を切った途端、およそ三分の二の生徒が挙手。無論、金寺に対する質問だろう。
その光景に、一夏は少なからず恐怖を覚えた。
一人目、出席番号一のショートヘアの子。

「誕生日はいつですか？」
「二月十八日」
二人目、同じくショートヘア。
「趣味はなんですか？」
「研究、一人旅」
三人目、ロングヘアの…以下全省略。

こんな感じで金寺に対する質問が飛び終えたところで、金寺は一息つくと教室を一瞥した。
一夏はというと、

「…なんか凄いやこの人」

怒涛の質問攻めにも一切動揺することなく、素っ気無く答えるその姿は彼にとってある種の勇者にも見えた。

「…そういうわけだ。それで――――「金寺先生、もう一つだけよろ

しいですか？」

改めて口を開きかけた金寺に、再び質問が投げかけられる。
ほぼ全員の視線が、音源に向かう。声の主は、縦ロールのある長い金髪の少女だった。

「何だ、言ってみろ」
「…“男性の”金寺先生は、どのようにＩＳに関わってきたのですか？」

『男性の』という部分を強調した少女に、一夏はやや違和感を抱いた。まるで、『何故男性のあなたがＩＳに関わっているのか』とでも言っているような感じだ。
当人の金寺は意に介する事も無く、簡潔に答えた。

「俺は数年前まで一匹狼の研究者だった。最近はいろんな国で技術開発に携わってきたが…ああ、みんな知らねえよな。まあビーム兵器に関する基礎理論をくみ上げたり、非限定情報共有を証明したり、適当になんやかんやしてたんだ」

非限定情報共有――シェアリングとは、コア同士が行う情報の共有のこと。これを各自が進化の糧にしており、それにより形態移行などが行われるといわれている。
これはビーム兵器と同様、近年の研究によって現実的な理論が築かれたばかり。そしてそれらの理論を最終的に確立したのが、この金寺龍輔なのだ。
だが、それを“適当に”と言ってのけた金寺の神経が、一夏には今ひとつ理解できなかった。

「終わりか？」

「はい、…無礼な質問をして申し訳ありませんでした」
「気にするな、俺は気にしない」

それを聞き、少女は納得したようで納得していないような様子で呟くように言った。
彼女にしてみれば、やはりＩＳに男性が関わっている、というのに違和感を覚えていたのだろうか。
一夏がそんな事を考えていると、再び教室のドアが開き、今度はスーツを着た女性が入ってくる。
その女性の名は、

「げえっ！？千冬姉！？」

自分の姉、織斑千冬だった。
一夏が座りながら大声をあげた直後、彼の頭で炸裂音が響く。千冬の持つ出席簿による殴打攻撃――――通称、「出席簿アタック」の音だった。

「…学校では織斑先生と呼べ」
「りょ、了解…」

出席簿の一撃とは思えない、尋常でない鈍痛に頭を抱える一夏をよそに、千冬は教壇にいる金寺に話し掛けた。

「すまない、遅れた。ご苦労だったな、金寺」
「苦労に値しない」

ぶっきらぼうに短く言って教壇から離れる金寺を見て、千冬は苦笑を浮べた。

「全く…お前は本当に変わらないな」
「そう言うお前も前に再開した時と変わってなかったけどな」
「時々言われる」

再度苦笑を浮べ、千冬は金寺に変わって教壇に立つ。
自分の姉が教壇にいる。この状況が読めない一夏をよそに、千冬は口を開く。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが私の仕事だ。これから機動兵器を扱っていく身として、私の言う事はよく聞きよく理解しろ。これは絶対だ。反逆するのは勝手だがな」

悪い言い方をすれば、横暴とも取れる物言い。一夏は絶句したが、

「キャーーー！！」
「千冬様、本物の千冬様よ！」
「ずっとファンでした！」
「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！！」
「私は稚内から！！」
「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」
「私、お姉様のためなら死ねます！」

女子生徒の大半はこの通り。
それもそのはず、一夏の唯一の肉親である彼女は第一回ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』の格闘部門及び総合優勝者で、公式戦負け知らず。事実上の、世界最強である。
それはすなわち、この世の女性の憧れなのだ。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられ

る。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

――――たぶんそうだろうな。

くしくも、一夏と金寺の考えた事は全く同じだった。

それを証明するように、数人の女子が再度黄色い声をあげる。

「きゃあああああっ！！お姉様！もっと叱って！もっと罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躾をして～！」

最早危ない領域に達しているのも何人かいたが、一夏は意図的にそれを聞き流し、自分の姉に質問をした。

「千…じゃなくて、お、織斑先生はいつからここの教師に…？」

「それは後だ、いずれ説明する。今は、ＳＨＲを終わらせるぞ」

千冬の言葉に一夏が軽く頷くと、これらのやり取りを聞いた数人の生徒が気づいたように声をあげた。

「え……？織斑君って、千冬様と知り合い……？」

「親戚とかなのかな？同じ名字だし」

それを聞いて一夏は少なからず驚きを露にする。

てっきり一夏は、自分と千冬が姉弟であることが知られていると思っていた。織斑という苗字は、それほど多くいるものではないはずだ。

「それじゃあ世界で唯一男でＩＳを扱えるっていうのもそれが関係して……？」

――――それは無い。

別に確信があるわけではないが、本人は直感的にそう思った。

いくらなんでも、それが関与しているとは思えない。確か国際ＩＳ連盟のお偉いさんもそう言っていた。

だとしたら、それ以外に何か理由が――――

――――そんな思考を遮断するように、チャイムが鳴り響く。

「朝のＳＨＲはこれで終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半年で覚えてもらう。その後、実習だが基本動作は半月で体に染み込ませろ。これは絶対だ。いいな？」

直後、一糸乱れぬように生徒たちの返事が響く。

呆れるように軽く息を吐いた一夏は、先ほどとは別の考えに没頭した。

（機動兵器、ねぇ…）

いまや、ＩＳが各国軍の要である事は、当然一夏も知っている。

それを、世界最強の弟である自分が操る事になったというのは、正直運命のいたずらのようなものを感じさせた。

そもそも、一夏はＩＳ学園ではなく、生活面で姉――――千冬を困らせないためにも、学費が安く就職率が高い私立愛越学園を受験する予定だった。

だが、彼にとって不幸だったのは、その愛越学園の試験会場が市立の多目的ホールであり、ＩＳ学園の試験会場もそこにあったこと

だ。生憎、当時中学三年生だった一夏はホール内で迷ってしまい、係員に聞いてもよく分からず八方塞の状態だった。

そんな中、迷い込んだ部屋――実は立ち入り禁止区域なのだが、一夏は知らなかった――にあった格納状態のＩＳを発見。興味本位で触れた一夏だったが、どういう訳かＩＳが起動してしまい、その場に駆けつけた試験官に目を付けられたのだ。

その後の展開も急激なもので、一時期国際ＩＳ連盟に身柄を保護された後、『在学中はありとあらゆる機関、団体からの干渉を受けない』ＩＳ学園に半ば無理やり入学させられたのだ。

正直、望んでこの学園に来たわけではないが、こうなった以上仕方が無い。

これから自分は、今世紀最強と謳われる機動兵器を扱う事になるのだ。気の緩みなど許されない。

（まあ、とにかく真面目にやっていきますか…）

大して深く考えず、軽く背伸びをした一夏は、一限目のＩＳ基礎理論の準備をする事にした。

◆

ＩＳの基礎理論。

その名の通りとしか表現しようが無いこの授業は、ＩＳに関する基礎を徹底していく意味合いで行う。

この授業を行うのは、基本的に金寺だ。

ちなみに、金寺が授業を行うのはこれが初めてではない。彼が赴任したのは昨年二月。それから終業式までの一ヶ月ほどの間に、金寺は教育実習生のように教務について学び、今年度から本格的に教師となったのだ。

授業の具体的内容だが、まず最初はＩＳの詳細な概要が主だ。中には、ジュニアスクールなどで数年前から学び始めているのもいるが、大半の生徒はそこまで深入りしていない。

よって、まずは基礎を徹底する事から始めるのだ。

授業の進め方としては、生徒たちが入学前に配布されたＩＳに関する参考書、という名の『電話帳もどき』にある程度目を通している事を前提としている。

一応ＩＳ学園は進学校に値するので、当然といえば当然であった。

金寺が最初に担当したのは一年三組。これまた生徒たちから随分な歓迎をもらったが、当人は気にしていないため特別困る事は無い。

さしたる障害も無く、金寺は授業を終えた。

難なく初陣を終え、書類整理のために一旦職員室に来た金寺に、一人の女性が声を掛けた。

「お疲れ様です。初めての授業、どうでした？」

彼女の名は山田真耶。今年度から一学年の学年主任になった人である。

「まあ、特に楽も苦も無く、って感じだ。千冬のクラス、なかなか楽しそうな面子じゃないか？」

金寺がそう返すと、真耶は少しがっかりした様子だった。どうやら、先輩面をしたかったらしい。

「ああ、でももし分からない事があれば何でも聞いてくださいね！」

他の女性と比べて豊満な胸をはり、堂々とした様子で真耶は言う。最も、短く髪を切りそろえ眼鏡を掛けている童顔の彼女には、威厳などという言葉が全く似合わないのだが。

「…で、アンタはこの学園何年目なんだっけ？」

「あ、そういえば言ってませんでしたね。私は今年度で三年目です」

「…そうか。じゃあま、何かあったら宜しくな」

「はい！改めて！」

喜びを露にする真耶が、何かの小動物に見えた金寺だった。

無論、真耶が金寺のことを職場の同僚としてでなく、一人の男性として見始めていることを彼は知らない。

1．出会い（後書き）

さて、実際金寺は結構チートだったりします。

金寺龍輔と出会ったことにより、原作と比べて一夏たちの運命はかなり変わっていきます。

2．その場にいること（前書き）

書き溜めているのでさくさく投稿していきます。
今回、若干設定破壊があります。

2．その場にいること

◆

続いて、二限目。金寺は引き続き基礎理論の授業を行う。
今回の担当は、自分が副担任を受け持っている一年一組なのだが。

「……」

授業開始から十五分後、異変を感じた金寺は視線を下に落とした。
その眼に映ったのは、なにやら顔が青ざめている一夏。
机に乗せている教科書を適当にめくっては冷や汗をたらし、挙動不審に周りを見ていた。

「……どうしたお前」
「あ…いや、その……なんというか……」

様子が気になったので尋ねてみると、当人はなにやらはぐらかすような表情になった。
どうやら、あまり悟られたくなかったらしい。

「お前が何考えてるかは知らんけどさ、わかんねぇのがあんなら今のうちに聞いておいたほうがいいぞ？」

金寺がそう言うと、一夏は一瞬うつむき、その後、何かを決意したように挙手する。

「先生！ほとんど全部わかりません」

……予想通り。

何となく予測できていたが、いざ実際そう言われると、頭が痛くなるような感覚になった。

「お前さぁ…あの『電話帳もどき』読んだのか？一応俺はお前らがあれに目を通した事前提にやってんだけど」

彼の言う『電話帳もどき』とは、前述したとおり入学前に新入生徒全員に配布されるＩＳに関する参考書の事だ。

そのページ総数はなんと８９４ページ。金寺ですら、“暗記に三時間もかかった”代物だ。

「…古い電話帳と間違えて捨てました」

金寺の眼が、信じられないものを見たように見開かれた。

ＩＳの参考書、それはすなわち兵器及び最新の爆弾の取扱説明書といっても過言ではない。

それを“古い電話帳と間違えて捨てた”という一夏の神経が、金寺にとって間違いなく万死に値するものであった。

「…とりあえずあとで再発行を申請しておく。最低でも来週の月曜までには全部頭の中に詰め込め」
「来週の月曜って…そんな無茶――――」
金寺の一言にそう反論しかけた一夏だったが、直後、頭部に金寺の手刀が襲いかかってきた。
「痛っ！？」
「何が無茶、だ。お前が捨てなきゃある程度は授業についていけたものを…何も考えずに捨てた自分を恨め」
「ううぅ…」
手刀を喰らった場所を押さえる一夏は何も反論できなかった。
当たり前だ。ＩＳの参考書を捨てたのも、ひいては予習すらしなかったもの自分。完全に自業自得である。
「お前はＩＳ学園の生徒なんだからよ、ちょっとは学ぼうって意識持てよな？」
「…はい」
しぶしぶ納得する一夏に若干呆れつつ、金寺は授業を再開した。
◆
その後、休み時間。

「ちょっとよろしくて？」

一夏に声をかけたのは、先のＳＨＲにて最後に金寺に質問した少女だった。

近くで見れば、金髪碧眼に引き締まっているプロポーションの持ち主。文句なしに美人といえるだろう。

「俺に何か用か？」

「その言い方…まぁ今はいいですわ。ところで貴方、イギリス代表候補生のわたくしセシリア・オルコットのことを知っておられまして？」

反射的にそう返した一夏に若干呆れながらも、セシリア・オルコットは彼にそう質問した。

だが、一夏にはそれ以前の問題があった。

「えっと…代表候補生、って何だ？」

一夏がそう言った途端、教室の空気が二重三重の意味で凍りついた。

誰もが、代表候補生、という単語を知らない一夏に唖然としている。セシリアも、愕然としてしばらく言葉を発する事が出来なかった。

「貴方…それすらも知りませんの？」

「？ああ…生憎今までＩＳとはほとんど無縁だったからな」

当然だろ、といわんばかりにそう言い切る一夏に対して、セシリアはある種の失望感を覚えた。

――――ＩＳとはほとんど無縁だった。

男性の彼はそうかもしれない。だが、

「確かに、貴方今までＩＳと無縁だった事は事実かもしれませんが…それでも貴方は今こうして、その『無縁だった』ＩＳに関わる事になりましたのよ」

「う…けどさ、俺だって好きでここに来たわけじゃないんだぜ？だからこういう事もよく分からないし、仕方ないだろ」

反骨心が垣間見えるその言葉が、セシリアにとってはくだらない言い訳に聞こえた。

恐らく、彼が好きでここに来たのではない事は事実だろう。だが彼女にしてみれば、まるで数年前の自分を見ているような気分になるのだ。

「…無知は罪、とはいいません。しかし、そこから知ろうとしないことこそ本当の意味で罪だと、わたくしは思いますの」

セシリアはそれだけ言い切ると、何とか反論しようとする一夏に背を向けて自分の席へ戻ってしまった。

チャイムが鳴ったのは、丁度その時である。

◆

一日の授業と帰りのＳＨＲを終え、放課後。

職員室から金寺が一年一組の教室に戻ると、要件がある人物を発見した。

「ああ、いたか、織斑一夏」

「…？金寺先生？」

金寺に反応してムクリと体を起こした一夏を確認すると、金寺は彼の机に「１０２５」と刻印が入っているキーホルダーがつけられたキーを落とした。

「これは…？」

「見りゃ分かるだろ、お前の寮部屋のキーだ。そこが今日からお前の居住地となる」

それを聞きつつキーホルダーの刻印を見ていた一夏は、ふと思い出したように言った。

「あれ？でも俺って確か一週間は自宅通学じゃなかったんですか？」

ＩＳ学園は全寮制。ＩＳ操縦者を守るため、というのが基本的な理由だ。

とはいえ、全校生徒が女子つまり寮に住んでいるのも全員女子なため、男子の一夏をいきなりそういうところに放り込むわけにもい

かず、彼には入学一週間後まで自宅からの通学を言い渡されていた。

「それはさっきまでな。日本政府からの特命で、端的に言えばお前の保護が第一目的だ。一ヶ月もすれば何とかなるだろう」

「保護って…ああ、そうか、そうだよな」

どうやら一夏も合点がついたようだ。

彼自身、ＩＳを動かしてしまってからこのＩＳ学園に今日入学するまで、波乱が無かったわけではない。

マスメディアの取材にはじまり研究所などからの勧誘が押し寄せ、挙句の果てに誘拐されそうになってしまった事もある。

その一方で、ＩＳ学園は基本的に特別な例を除き外部機関からの干渉を受けない事になっている。簡単に言えば治外法権だ。

日本政府としては、貴重な人材が厄介事にあうのをどうしても避けたいらしい。そこで、今回の特命なのだ。

「事情はわかりました。けど俺の荷物は――」

「心配するな、私が手配した。まあ生活必需品だけだがな。着替えと、携帯端末の充電器があればいいだろう」

それに関して金寺が説明しようとした途端に、千冬の声。

当人は顔を引きつらせていた。

「え、じゃあ漫画とかその他もろもろは…」

「必要ないだろう」

今度こそ一夏はがっくりと肩を落とした。確かに、いくらなんでも最低限すぎる。

「いや、日々の娯楽も必要だと思うけどよ…」

そんな金寺の声は千冬に聞いてもらえず宙に消えていく。
その横で、千冬は薄い冊子を一夏に手渡した。

「これは寮の心得だ。起床時間や食事時間、寮則が記載されている。大浴場はあるが…基本お前、いやお前らは使えないからな」
「え？何でですか？」
「…お前、女子と一緒に風呂入りたいのか？」
「そうか…」

金寺からのまともな指摘を受け、一夏は再び肩を落とした。
この少年、かなりの風呂好きなのである。

「あ、あと金寺先生、一ついいですか？」
「？何だ？」

千冬が教室を後にしたのを確認した一夏に聞かれ、金寺はそちらへ顔を向ける。
このとき、一夏の脳裏に、数時間前に言われた言葉がフラッシュバックしていた。

『…無知は罪、とはいいません。しかし、そこから知ろうとしないことこそ、本当の意味で罪だと、わたくしは思いますの』

それこそ、セシリア・オルコットに言われた言葉である。

「その…授業に関して正直まだよく分からないところがあるんですよ。このままじゃついていけなくなりそうで…だからその、空いている時間とかでいいですから補習か何かお願いできませんか？」

「…了解した。俺のほうで都合のいい時間帯を探しておく。明日辺りなら何とかできるだろ」

一応、金寺龍輔は教師だ。教え子にそのような申請をされて断るわけがない。

最も、彼が教える事が出来るのはＩＳ基礎理論程度だが、数ヶ月前までＩＳに関しては右も左も分からなかった一夏にとっては少なからずともプラスになるだろう。

「そんじゃ、そういう事だ。とりあえず自分の部屋行って荷物の確認しとけよ」

そう言い残し、職員会議のために金寺もまた教室を後にする。

一夏も再度キーホルダーの刻印を見ると、教室を後にしてその部屋に向かう事にした。

◆

「ここか…」

それから数十分後、一夏は指定された部屋へたどり着いた。
ポツリと独語し、ドアを開けて部屋の中に入っていく。

部屋に入った一夏の目に付いたのは、大きな二つのベッド。元々二人用の部屋らしい。

「すげぇなぁ…」

感嘆の声を漏らし、一夏は早速ベッドに横になる。高級ホテルにありそうなそれは素材が良いらしく、横になるとなんともいえない気持ちよさが伝わってきた。

すると、

「誰かいるのか？」

聞き覚えのある声が耳に入り、一夏は自分の体が凍りつくのを感じる。

聞き間違えるはずが無い。今日約六年ぶりに再開した、幼馴染兼ライバルの声。

しかも、どういうわけか声はシャワールームから聞こえてきた。

恐る恐るそちらへ顔を向けると、バスタオルを体に巻いただけの、幼馴染兼ライバルが現れた。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之――」

両者想定外の事態に、お互いに顔を見合わせ、硬直。

シャワー後の熱気で上気した頬に、濡れた髪、タオルを押さえる手が近いせいか肌に張り付いて、その曲線を忠実に表している豊満な胸。

六年間で成長した、年相応でない幼馴染兼ライバル――篠ノ之箒の姿に、一夏は硬直すると同時に、思わず見とれてしまった。

一方、当の箒はというと、幼馴染でありかつて剣道のライバルであった少年が、自身の目の前にいること。

そして何より、シャワー上りの自分の年相応でない――本人にとっては若干コンプレックスになっている体を見られていることに、完全に言葉を失っていた。

目の前の事態に唖然としていた一夏は、箒が肩を震わせているのを目にする。

更に、彼の脳が、彼自身に訴えている。

――ここから逃げろ、と。

だが、残念ながら、その猶予は一夏に与えられなかった。

「――――――きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？？」

悲鳴と同時、箒はそばに立てかけてあった竹刀を手に取り、一夏へ向かって振り下ろす。

その寸前で我に帰った一夏は、身を翻してかわし、ドアへ向けて疾走。その部屋から脱出した。

疾風の如きスピードで部屋から脱出した一夏は、思わずドアに背中を預けて座り込む。

周りから、

「……なになに？」

「あっ、織斑くんだ」

「えー、あそこって織斑くんの部屋なんだ！いい情報ゲット～」

と、騒ぎを聞きつけてきた女子生徒の声が耳に入ったが、そんな事を気にしていられなかった。

その全員がラフなルームウェアで、かなり男の目を気にしていない格好ばかりなのだが、最早今の一夏には気にならない。

深く深呼吸し、何とか落ち着こうとした一夏は、集まっている野次馬の中に見覚えのある顔を見つけた。

「…金寺先生？」

「お前は何をやっているんだ」

呆れてものが言えない、といわんばかりの口調で彼は言う。

周りの女子生徒と比べると背がずば抜けて高い金寺は、自然と目立つのだ。

女子生徒の一人が当然ともいえる質問をした。

「先生なんでここに？」

「諸事情でこの寮使っててな、１０２６号室だが。…つうか変な騒ぎ起こすなよ。下手すりゃ寮監様が駆けつけてくるぞ？」

「…寮監様？」

「ああ。お前の姉貴な」

瞬間、一夏の背中が凍りつく。

もしもこの騒ぎで千冬が駆けつけてきたら、自分の身がどうなるか分からない。

意を決した一夏は、金寺に一つお願い事をした。

「か、金寺先生…ほとぼりが冷めるまで匿ってもらってもいいですか？」

「…匿う？」

「あ、いやその…色々事情がありまして…」

ルームメイトの風呂上りの姿を見てしまい殺されそうになったなど、この場で言えるわけが無い。

数人の女子生徒たちは総じて首を傾げていたものの、同じ男である金寺は何となく推測できたようだ。

「…まあ断る理由も無いし、一時的な」

そう言って、金寺は１０２６号室のドアを開け、自室に入っていく。

やや戸惑いながらも、一夏は金寺の後をついていくことにした。

◆

「うわぁ～…」

金寺龍輔の部屋に入って開口一番、一夏は思わずそんな声を出していた。

隣の部屋という事から、部屋の構造自体は同じだろう。だがしかし、彼の部屋はもとの学生寮の面影を保っていなかった。

「ここ、研究室か何かですか？」

「確かに寝室兼研究室だな。俺が独断で改造した」

そう言いながらルームチェアに座った金寺は、一夏に「そこに座っていい」と目線で話し掛ける。

それに気づき、一夏は軽く頭を下げてベッドに腰掛けると、驚き

を隠せぬまま部屋全体を見渡した。

「……」

確かに、この部屋を始めてみるものはその景色に呆気に取られるかもしれない。

本来は勉強机であるはずの机は、二つの大型空間投影モニターと四つの小型モニター、それを操作するキーボードによって原形をとどめておらず、増設された本棚には多くの資料が整理されて置かれている。

部屋そのものはきっちり整っていながらも多くの精密機器がある様は、まるで地下にある秘密基地を思わせるようだった。

そんな中で、元々備え付けられていた小型テーブルに置いてあるコーヒーサイフォンが何故かよく目立つ。よく見れば、その近くのレトロな木製の小棚にはコーヒーカップやコーヒー豆のパックが入っていた。

それを見れば、彼がコーヒーの愛好家である事は容易に想像できる。

「でさ、さっき何があった？俺の部屋に逃げ込むぐらいなんだから結構な事態なんじゃねぇの？」

「まあ…そう言われればそうでして…」

言いにくそうにしながらも、一夏は事の経緯を話し始めた。

部屋に入った途端、ルームメイトである幼馴染の風呂上りの姿を偶然見てしまったこと、そして直後殺されかけたので全力で避難した事。

全て金寺の予想通りだった。

（…失敗したか）

正直、金寺は自分の迂闊さを呪った。

このＩＳ学園は実質的な女子高。その寮のルームメイトとなれば当然女子。そしてこのような事態が起きる事も予測できたはずだ。

「…悪い、お前のルームメイトが篠ノ之箒である事を把握してなかった。俺のミスだ」

「金寺先生のせいじゃないです。俺が不注意だっただけで…でもこの後どうすれば…」

「一応、謝るしかないと思うけどな。篠ノ之箒に『俺は悪くない』という言い分が受け入れられるとは思えないし…」

「…ですよねー…」

これから先のことを予測し少なからず不安を覚え、肩を落とす一夏。

女の集団の中で男一人というのは相当なものだが、この少年は入学一日目にして、既に苦労しているようだった。

「…何だかんだでお前は苦労してんだな」

金寺の一言は棒読みと捉えられてもおかしくない口調だったが、一夏は同情してくれたのが少し嬉しかったようで、なおも愚痴に似た言葉を続ける。

「そりゃそうですよ。ここ俺以外の生徒女子しかいないじゃないですか。そんな中で苦労するなってのが…って、金寺先生はいつからこの学校にいるんですか？」
「厳密には今年の二月から。正式に教員になったのは今年度からなんだよ」
「はぁ…じゃあ、千冬姉がいつからいたかって知ってます？」
「…確か去年からだったって聞いてるが。お前知らなかったのか？」
やや驚きつつ金寺が振り向くと、一夏は軽く首肯した。
「いや、教えてくれなかったんですよ。第一俺も去年は受験勉強とアルバイトであまり余裕が無くて。まさかＩＳ関係の職業をしていたとは…」
「…なるほどな」
彼女の存在を気に食わないほんの一部の連中から『ブラコン』と揶揄される千冬の事だ。恐らく弟がＩＳに触れる事を避けていたのだろう。
それがこのような形になってしまうとは、なんと皮肉な事か。
「なんというか、最近は色々と激動で…」
「…まあ、割り切れよ。こうなった以上仕方が無いだろ？」
金寺のその一言を聞いて顔を上げる一夏に対し、金寺は彼の顔を見つつ話した。
「俺がもしお前の立場だったら、うだうだ愚痴るより今自分が何をすべきなのかを第一に考えるな。…まあお前はＩＳに関しちゃド素人だし、この環境にも慣れてないだろうから今すぐにとは言わねぇ

よ。けどな、――――『人間考える事をやめたら人間じゃない』、これは俺の持論だ」

人類がここまで発達してきた理由――――それは間違いなく、高度な知能を持っていたからだろう。

人は何かに対して考えて、考えて、それの“応え”を見つけ、未来へ進んでいく。

それが、金寺龍輔の持つ持論だった。

無論、彼はそれがこの世のこの理と思い込んでいるわけではないが。

◆

あれから数分後、１０２５室にて。

「本っ当に申し訳ございませんでした！わざとじゃないんです！！」

金寺の部屋を後にし、何とか箒に部屋へ入れてくれる許しをもらった一夏は、金寺に言われたとおり全力で謝罪を行っている最中だった。

ＩＳ学園の寮は、部屋の構図からもなるとおり、基本的に二人部

屋となる。当然、箒も自分にルームメイトがいるのは承知済みだったのだが、

（まさか一夏とは…！）

実を言うと、箒は今まで、一夏を男として意識した事が無かった。

幼馴染であり、同じ剣道場――――実家の篠ノ之道場で切磋琢磨しあった仲とはいえ、元々出会ったばかりの頃は険悪だったため、一人の異性ではなく、一人のライバルとしてみていた。

だが、今こうして風呂上りの姿を見られた、という状況に、自らの心拍数が上り、頬が真っ赤になっているのがまじまじと分かった。

――――これは、ただ知り合いに見られたから、というだけなのか？

――――それとも……

「……やはりお前が私の同居人だというのか？」

「あ、あぁ、そうみたいだな……」

「どういうつもりだ？男女七歳にして同衾せず。常識だ」

「いやぁ、俺も十五の男女が同居……いや、同棲するのは問題があると思うのだが……」

同棲。

その単語を聞き、箒は喉が渇いていくのが分かる。

同棲とは、正しく説明すると正式の婚姻関係に無い男女が一緒に暮らす事だ。

一夏の言っている事は間違ってはいないのだが、同棲となると、箒はどうしても付き合っている男女が一緒に暮らす、というほうに解釈してしまう。

「そ、それで……この部屋割りは…お前が、選んだのか？」

ふと思った事が自然と口に出る。

――――――――もしも、これが――――――――

「いや、何か日本政府からの特命みたいで、出来るだけ俺を早く寮に入れたかったそうなんだ。まあ一ヶ月も経てば――――って、箒、どうしたんだ？」

淡々と事実を話していた一夏だったが、何故か肩をがっくり落とした箒を見て、心配そうに聞いた。

その箒は、一夏から告げられた事実と、自身が描いていた荒唐無稽な妄想に全身の力が抜けていた。

一夏が自分の同居人と確認して、思わず“一夏が自分との同室を望んだ”、と思ってしまったのだ。

「…けど、正直言うと、同室が箒で良かったよ。見知らぬ誰かと一

緒になるよりかはずっと良かった」
「ほ、本当か！？」
一夏の短い言葉を聞いて、反射的に箒は彼に食いつく。
同室が箒で良かった、というのが、自分を肯定してくれたみたいで何より嬉しかった。
実際、一夏にとっても見知らぬ人物と同じ部屋になるよりははるかに良かったので、本心ではある。
一方で、箒は、「そうか…良かったか…」と、表情を和らげ、とても嬉しそうだった。
その後、シャワーの使用時間を決め、着替える際の注意事項の確認など、同じ部屋で暮らしていく上での線引きの確認をした。
始めはいくら幼馴染兼ライバルと言えど、女子と同室なんてどんなことになるのかと身構えた一夏だったが、難なく進んでいったので本当に安心した。
その一方で、箒にとってこの日の夜は最悪だった。
一夏の部屋の場所が判明した事で、一部の女子が殺到。多くは顔見せという事で自己紹介も兼ねて軽く話している程度だったが、一年生で八名、二年生で十五名、三年生で二十四名。
上級生になる程、一夏と知り合おうと必死になっているのが分かってしまう。
――――何故、一夏が他の女子と会話していると変な気分になるのだろう。

自分でもわからない。第一、箒は一夏のことを異性としてみていなかったはずだ。

いや、それは本人がそう思っているだけなのかもしれない。実際、箒は諸事情で転校してからというものの、一時も一夏のことを考えない事は無かった。

最も、本人はその感情を、切磋琢磨しあうライバルがいなくなったことによる物足りなさ、と解釈してきたのだが、もしかすればそれは違ったのかもしれない。

その後、時間が時間という事もあり一夏と箒は就寝することにしたのだが、結局、箒は自分の気持ちに整理がついていなかった。

2．その場にいること（後書き）

設定破壊＝セシリアがかなりまとも・箒がまだ一夏に惚れていない（と思っている）。

前者はよく考えてください。
イギリスの名門貴族のお嬢様ですよ？

たとえ両親が他界したとはいえ、何らかの教育を施してくれるような人物がいてもおかしくないと思います。

というかいるのが普通なような。

という訳で、本作品でのセシリアは、名門貴族の後継ぎとしての自覚はある程度あります。
原作でのあの物言い、完全にオルコット家の恥さらしですよね。それぐらい理解していないといけないのでは。

後者の箒に関しては、ただ単純に本人に自覚症状が無かっただけです。

今は本人が、一夏へ対する気持ちを恋心だと思っていない段階です。

ただ安心してください。

一夏がフラグを建てないような事はありません。

彼の特殊能力「瞬間的に女子を落とす」は本作品では発動しないだけです。

特別な場合を除いて、人が他の異性を好きになるのはそれなりの経緯があると思うので。

ただ、どうしても金寺と一夏中心の物語なので、書くのがおろそかになってしまいそうな…

後、金寺が妙に悟ってるみたいですが、それにもしっかり理由があります。

それが明かされるのはかなり後の事件にて。

とりあえず、これからも頑張っていきます。

3．自覚（前書き）

第一章、完結です。

一章あたりが意外と短いですね。

3．自覚

◆

次の日。

「授業の前に、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表者とは、対抗戦だけでなく生徒会の会議や委員会への出席など、まあクラス長と考えてもらっていい。自薦・他薦は問わない。誰か居ないか？」

一限目の前、千冬の話を受けて、自然と静まり返る教室。

誰がどう出るか、皆が牽制し合う中、一人の女子が堂々と手を上げる。

「はいっ！織斑くんを推薦します！」

それを聞いた当人は、内心表情を渋める。

恐らくは、自分が珍しい存在だから、程度の軽い理由なのだろう。一夏にしてみれば、面倒の一言だった。

「私もそれがいいと思います」

もう一人、賛同する女子生徒。人の連帯感とは、こう言うときばかり強くなっていけない。

結局、四人ほどの生徒が一夏を推薦してきた。

「他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

確認をとる千冬。

流石にそれはまずい、と、一夏は必死に思考回路をフル回転させた。

この状況をどう打開すればいいかと考えに考えて、彼が出した策は、

「はいっ！」

「何だ？織斑」

「俺はセシリア・オルコットを推薦します！」

またしても教室が静まり返った。

一夏に対して驚きの視線を浴びせるクラスメート――特にセシリア・オルコットをよそに、千冬は眉をほんの少し吊り上げると、一夏にその理由を聞く。

「ほう、推薦理由は？」

「第一に彼女はイギリス代表候補生、すなわちエリートであるはずです。それに俺は彼女に対してとても責任感が強く、クラスを引っ張ってくれる存在だという印象を受けました。それが推薦理由です」

自分でも驚くほどすらすらと言葉が出てきたが、それはおそらく自分が本当にそう思っているからなのだろう。

それには、昨日彼女に掛けられた言葉が、一夏にＩＳ学園の生徒としての自覚を植え付けたというのもあるかもしれない。

「なるほど、一理ある。さて、そうなると代表者候補が二人いることになるが…折角だ。二人で決闘をしてみたらどうだ？」

『決闘？』

一夏とセシリアを含めた何人かが声をあげる中、千冬はやや楽しそうに言った。

「ここはＩＳ学園。物事を決めるとなればＩＳを用いるのがベストだろう。双方の実力を測る意味合いも兼ねればいい。どうだ？」

「確かにそうですわね。それならばわたくしも納得が付きますわ」

いつの間にか立ち上がっていたセシリアが、一夏に向かって声を掛けた。

当の本人も、こうなった以上それに挑むべきなのは分かっているのだが、

「あの…決闘云々はそれでＯＫなんですけど、ＩＳはどうするんですか？」

ＩＳでの決闘となれば、無論ＩＳが無ければ意味が無い。

一夏がその質問をしたのと同じタイミングで、金寺が教室に入ってきた。

「セシリア・オルコットにはＢＴ兵器のサンプリングの意味合いで、昨年イギリスのバッキンガム・ファクトリーから専用機が受理されている。織斑一夏、お前にもデータ採取の意味合いで学園側から直

々に専用機が受理される事になったそうだ」

教壇の横に向かって歩みながらの金寺の説明を聞き、生徒たちが騒然とする。

全世界に存在するコアは全部で４６７機。その限られた中の一つが一夏専用となるのだ。代表候補生クラスになって初めて受理される専用機の価値は、言わずもがなである。

「これで対等ですわね。貴方の実力、この眼で見極めさせてもらいますわよ」

自信満々な様子で自分を指差すセシリアを見て、自然と一夏も気持ちが昂ぶってきた。

少なくとも、手抜きは許されない。

「ああ、分かった。手加減はいらないからな」

きっぱりと言い放つ一夏には、「ハンデがあったほうがいいんじゃない？」「流石に無理があるよ」といった女子生徒たちの声は一切聞こえず、またその近くで金寺が考え込んでいるのも見えなかった。

◆

「――今日はこの程度でいいか。一応復習しとけよ」
「…はい…分かりました…」

二時間にわたる補講を終え、思わず机に倒れこむ一夏を見ながら、金寺は軽く嘆息した。

この日の放課後から、金寺による一夏の補講が始まった。
やはり一夏のＩＳに関する知識の欠如は著しく、普通の生徒が中学二年生までに理解するであろうところをほとんど理解していなかった。

本人曰く、「千冬姉からＩＳに関する事は一切聞いていない」らしい。これでは、ＩＳに関する知識が欠如しているのは当然ともいえる。

ただ金寺は、何故千冬が弟に対してＩＳのことを一切言わなかったのか理解できなかった。
一番考えられるのは、ネームバリューの事だろうか。

初代ＩＳ世界王者の弟となれば、様々な意味合いで知名度が出てくる。そうなれば、ＩＳに関する何らかの厄介事は避けられないだろうし、それを未然に防ぐ意味合いとしては良い策のうちの一つかもしれない。

しかしその一夏がＩＳ学園の生徒となった今、それは完全に凶と出ていた。

「…分かりにくい…何でこんな…」
「仕方が無いだろ。端的に言えばお前の知識が乏しいだけだ」

あまりにもストレートすぎる金寺の一言に、一夏は完全に気落ちしてしまったようだった。

――――――だが、それが事実。

自分のせいだろうが他人のせいだろうが、彼の知識が欠如している現実は変わらない。

そしてここはＩＳ学園。この環境に来た以上、否応無しにその知識を吸収し、自分のものにしていかなければならない。

ここでそれを拒否するのは簡単だ。

だがそうなれば、恥をかくのはほかでもない自分自身。

「無能な男」「劣等生」のレッテルを貼られるのがオチだ。努力を怠ればその報いが刃となって自分の身に返ってくる。

――――――そのような旨の話を一夏にしたところ、本人はしぶしぶと納得していた。

「…割り切れよ。今のお前はこの学園の生徒なんだから」

それだけ言うと、明日の補講の時間を伝え、金寺は教室を後にしていった。

ほとんど誰もいない薄暗い廊下を歩く最中、ふと両腕の黒いブレスバンドに目線が落ちる。

一見真っ黒で飾り気の無いそれだったが、金寺にとっては自身への“戒め”を意味する大切なものであった。

（…何偉そうな口叩いてんだ俺は…）

自分に対して少々呆れ返りつつ、そんな事を心中で呟く。

脳裏に浮かんだのは、１３年前の出来事。自分が感情的に行動してしまったせいで、結果的に最悪の事態を招いてしまったとある事件。

あの時、思い知らされた。

――自分の勝手な行動が、下手すれば数多くの人たちを傷つけてしまう事。

――そして、その後例えどのような行動をとろうと、その人たちの傷を癒す事はできず、それを払拭する事はできないこと。

今でもそれは金寺にとって耐えがたいトラウマであり、同時に彼の生きる原動力となっている。

――過去の事だけはどうしようもない。今教師となった自分が出来るのは、自分が犯した過ちを教え子たちにさせない事だ。

おそらくそれが自分の生きる意味なのではないかと、このとき金

寺は思い当たった。

（…贖罪っていうのか？こういうの。けど、俺には…その道しかないのも事実だ）

自分が死んでも何も変わらない。
強いて変わることがあるとすれば、人の心の闇ぐらい。

これも、金寺が２４年間生きてきた中で思い知らされた事実だ。

彼にとって生まれてからの２４年間は、彼からたくさんのものを奪い、たくさんの戒めを得させたのだ。

今まで金寺が“経験したもの”は、常人の比にならない。
その大半がつらく、後悔したくなるような、トラウマのようなものといっても差し控えないものだ。

だから、願う。
未来のために。

自分の教え子には、自分のようになってほしくない、と。

◆

次の日、学園の外れにある剣道場。

「ダメだ…全然かなわねぇ…」

久しぶりに剣道で箒と手合わせした一夏だったが、全然かなわずに完敗を喫してしまった。

剣道場の隅にいるギャラリーの、

「織斑くんてさあ」
「もしかして弱い？」
「本当にＩＳ使えるのかな～？」

といった声も、今の彼にはかなり痛く響く言葉である。

「…お前は今まで何をしていたんだ」

地べたに座り込む一夏に対し、呆れるような視線を浴びせながら箒が呟く。

「いや、あれ以降バイトとか色々やってまして…中学三年間は帰宅部だったからな…」

それを聞いた箒の眉がピクリと跳ね上がったが、一夏の話した事は事実だ。

別に一夏は、箒が転校してからも剣道を止めたわけではなかった。

暫くは続けていたのだが、自分と張り合えるライバルがいなくなってしまったせいかやる気があまり出ず、中学生になってからは国家ＩＳ操縦者となった姉の千冬を困らせないためにもアルバイトに励み続けた結果、すっかり腕は鈍ってしまった。

「なら丁度いい。これからは私がお前の特訓に付き合う」

「ちょ、ちょっと待てよ。俺はＩＳに関する事を教えてくれって言ったんだぜ？何で剣道なんか――」

箒の一言に納得がいかず思わず反論した一夏だったが、直後「剣道なんか」という事が箒の逆鱗に触れてしまった事を思い知り、激しく後悔した。

「『剣道なんか』？なるほど、一夏。お前にとって剣道とは既にそのような――」

「ち、違うんだ箒！その、なんて言うか…だ、だから言ったろ。何で剣道を…」

額に青筋を浮べて自分を睨みつける箒の怒気に気おされながらも何とか自分の意見を言おうとする一夏。

それを見た箒は一息ついて落ち着くと、一夏の目をまっすぐ見つつ生真面目な表情で話し始めた。

「これは私の個人的な考えだが、ＩＳの決闘――すなわち戦いとなれば、それなりに武器も使うのではないか？私の記憶が確かなら千冬さんも第一回のＩＳ世界大会では刀型の武器を使用していたはずだ。それに、どうやらお前は総合的に体が鈍っているようだしな。その点でも剣道を特訓内容に組み込んで損は無いと思うのだが、どうだ？」

真剣な箒の言葉を黙って聞く一夏。

確かに、箒の言っている事は全て筋が通っている。

ＩＳを扱うにはそれ相応の運動神経が必要であり、千冬も第一回ＩＳ世界大会「モンド・グロッソ」ではＩＳ用の刀を武器にして戦っていたし、剣道をやっていた頃に比べて明らかに体が鈍っているのは当人も承知している。

それに、再来週のクラス代表決定戦で無様な姿を見せ付けるわけには行かない。たとえ「男でＩＳを操縦できる」という特性があっても、操縦者として優秀でなければその価値はほぼゼロに等しくなってしまう。

「ＩＳは扱えるものの、操縦者としては優秀ではない」。

そんな評価をつけられたら自分の身はどうなるか、想像できない事はない。

「――分かったよ」

それだけいい、一夏は自分に気合を入れなおすと立ち上がる。

『…割り切れよ。今のお前はこの学園の生徒なんだから』

脳裏に響く、昨日の補講後に金寺に言われた一言。

その通り。今の一夏はただの男子高校生ではない。一人のＩＳ――世界最強と謳われる機動兵器を扱っていく人間だ。

そうなった以上、弱いままで立ち止まる事は許せない。

「それでこそ私のよきライバルだ、一夏」

正面で竹刀を構える箒が、にやりと笑みを浮べる。

「一人の少年」から「一人の戦士」へなるべく、一夏は右手の竹刀を強く握り締めた。

3．自覚（後書き）

金寺と関わっていく事により一夏はかなり人間として成長していきます。

原作でも、一夏を導くような男キャラがいれば一夏も立派に成長するんじゃないかと思って…

実際それが、金寺龍輔というキャラの誕生理由でもあります。

金寺のトラウマは、後々明らかにします。

次章では、【白式】を中心に進みます。

【白式】をかなり改造していますので、その点はご了承ください。

ヒントは、動力源です。

指摘、感想お願いします。

1．封印されし（前書き）

今回から、クラス代表決定戦のことになります。

改めてみると、原作ブレイク多すぎですね（苦笑）

1．封印されし

◆

数日後、一日の教務の後、手短に一夏の補講を終わらせた金寺が携帯端末を確認すると、一件のメールが入っていた。

送り主は、日本最大手のＩＳ開発事業、「倉持技研」にいる知人の女性からだった。

Ｆｒｏｍ．前川麻美
お久しぶりです。
先日聞きました。ＩＳ学園の教師に正式になられたそうですね。おめでとうございます。
つきましては、そちらの学園に在籍する織斑一夏専用ＩＳに関して説明したい事があるので連絡しました。
出来れば、明日か明後日までに技研の第八研究室まで来ていただければ幸いです。

どうやら、倉持技研で開発中である織斑一夏専用機に関して、何か説明したい事があるようだ。

ちなみに前川麻美とは、二年前に金寺が倉持技研に臨時技術顧問として三ヶ月間在籍していたときに知り合った同年代の女性だ。

何かと関わる機会が多かったが、彼女から――ひいては倉持技研から連絡がくるとなれば、それ相応のことだろうか。

そう判断した金寺は早速学園に外出許可をもらい、山梨県にある倉持技研へ向かう事にした。

◆

山梨県甲府市の山間の一角。

そこに、倉持技研の本社兼ファクトリーは存在する。

中央本線などを乗り継ぎ金寺が本社に訪れたのは、日が沈みかけ、後二時間ほどで夜の帳が下りようとしている頃であった。

以前一時的に所属していた事もあってか、受付の人物に名前と用件を言うとすぐに通してくれる。こう見えて、金寺龍輔の人付き合いはかなり多いほうだった。

社内にある応接室に通され少しの間待機していると、そこへ紺色のスーツを着たセミロングの黒髪の若い女性が入ってきた。

「金寺さん！お久しぶりです、本当に来てくれたんですね」

嬉しそうに声を上げ、軽く頭を下げた彼女が前川麻美。ちなみに彼女、ＩＳ学園の第一期卒業生である。

「アンタが来てほしい、ってメールしたんだろ。特別用事も無かったし、今日にしようと思ってな」

ぶっきらぼうにそれだけ言って、金寺は麻美へ対して手を差し出す。それに答えるように麻美は握手に応じた。

「そんで、俺を呼んだ理由は？」

彼女が向かいのソファーに座ったのを確認し自分も反対側のソファーに座りながら、金寺は本題を切り出した。

途端に、麻美の表情は技術士としての真剣なものになる。

「実は…本社で開発する事になった織斑一夏専用機ですが、数週間前に「自分に機体の開発の一部を任せてほしい」と篠ノ之束から連絡がきまして」

「何？束から？」

予想外の名前が出てきた事に驚く金寺に対し、麻美もやや驚いたような顔になる。

「…お知り合いで？」

「一応な。で、続けてくれるか？」

「あ、分かりました。それで、その篠ノ之束が一時期機体を直に引き取り開発し、先日本社に届いたのですけど…その基本システムがとてつもなく複雑なもので…正直、私たちの手におえないんです」

「…束から何か説明は？」

「新システムを組み込んだ、って。それだけで…」

麻美からの説明を一通り聞き終え、金寺は視線を落として考え込むような動作をする。

新システム。その単語がやけに心の隅に引っかかる。

世界最大手の倉持技研の社員ですら手におえない新システム。未知なる物なのか、それともブラックボックス化しているものなのか、金寺ですら想像は難しい。

それ以前に、何故「世界初の男性ＩＳ操縦者」のデータ採取にわざわざ新システムを搭載した機体を選んだのだろうか？

そこには篠ノ之束の思考が関わっているのだろうか？

考えれば考えるほど謎が出てくるが、今自分がやるべき事はくだらない謎解きではない。

「…謎は放置しておこう。その機体はどこにある？」

「今から案内します」

金寺の要請を受けた麻美が、彼を機体のあるファクトリーに案内しようと立ち上がる。

脳内の隅で思考を働かせつつ金寺は彼女の後についていった。

◆

倉持技研は、本社であるオフィスのすぐ隣にある大型のファクトリーの中に、多くの技術室が存在する。

織斑一夏専用機がある技術室は、ファクトリー内第八ブロックの２８番室。第八ブロックの中の一番奥にあり、人の気配はほとんど無かった。

「実はその織斑一夏専用機、元は本社の欠陥機だったんです」
「どういう事だ？」
「言葉の通りですよ。…作ったはいいけど使い道が無い、といった類のだったんです」

それ以外にも近況報告など軽い雑談をし、金寺は麻美に先導されて分厚い鉄の扉の前へたどり着いた。

「暗証番号を入力しますので、少しよろしいですか？」

そう一声掛け、金寺が後ろを向いたのを確認し首に下げているカードをスキャン。そのあとに指紋印象と網膜認証を行い、セキュリティを一時的に解除する。

程なくして、重たい音とともに鉄の扉が重々しく開き始めた。
完全に開く前に二人は中へ入る。

部屋の中は、真っ暗といってもいいような暗さだった。麻美が先

立って数歩歩くと、生命認証が反応して薄暗い明かりが付く。

そして、“それ”が部屋の一番奥に鎮座していた。

「これが…」
「はい、そうです」

金寺が声を上げるのを聞き、隣についた麻美がにっこり微笑む。

「これが、織斑一夏専用機…純国製第四世代型、【白式】です」

白。

そんな言葉が、まず金寺の頭に浮かんだ。
彼の目の前で眠っている白式は、その白い体を跪かせ、主に忠誠を誓う騎士のようだった。

だがそれよりも、金寺の興味を引くものがある。

「第四世代型、ねぇ…」

最近になって世界では第三世代型ＩＳの開発、研究が進んできた。そんな中で机上の理論といわれている第四世代型ＩＳが、いま目の前にあるのだ。

「それですが…第四世代型技術の展開装甲は、この機体の場合、武装にのみ使われていますので、完全な第四世代型ではないんです。正直、ネーミングは無理があると思っています」

苦笑気味に事実を話す麻美。

「なるほどな…そんじゃ、その『新システム』とやらを見せてもらいませんか？」

「ふふっ、かしこまりました」

自分の知る限りさほど敬語を使わない金寺の、変わった一言に思わず笑みをこぼした麻美は、【白式】の近くに備え付けられているモニターを操作。【白式】のＯＳ及び基本性能を映す。

そこに表示される数々の文字。次から次へと情報が表示され、金寺がそれを一つ一つ的確に読み取り、理解していくと、

「…ん？」

数秒後、金寺の眉がピクリと上がった。

「あ、気づきました？」

金寺の顔色をうかがいつつ、麻美は再度モニターを操作し、金寺が反応したであろう部分を表示する。
そこに表記されている一つの文字に、金寺は絶句した。

始めて見たものではない。見覚えがあるというレベルでもなかった。

むしろ、彼の記憶にこびりついていると言っても過言ではない。

“それ”は、ひときわ目立つ文字でモニターにこう記されている。

――――――Ｔｗｉｎ　Ｉｎｆｉｎｉｔｙ Ｓｙｓｔｅｍ.

1．封印されし（後書き）

早速白式の動力魔改造（苦笑）

この機体は、物語においてかなり重要なものになります。

2. 姉（前書き）

前回の最後に出た謎の単語が、少し明らかになります。

2. 姉

◆

――――ツイン・インフィニティシステム。

ＩＳの中枢である動力源、インフィニティ・コアを二基搭載しそれらを同調させることで、その機体の出力を、コアを一基搭載している機体の二乗にするというもの。

だが、世界で“それ”を知るものは、僅か三人しかいない。

――――そして、金寺龍輔はそのうちの一人である。

その理由に関しては、ここでは割愛させてもらうが。

ともかく、ファクトリーの責任者――――面識あり――――の許可をもらった金寺は、早速【白式】の調整を開始する。

機体の基本スペックを確認していくと、ある事に気づく。

「近接格闘戦に超特化している…【暮桜】と同じ類か…」

【暮桜】。

織斑千冬が第一回ＩＳ世界大会「モンド・グロッソ」にて搭乗し

た第一世代型ＩＳである。

一瞬、心の中に懐かしい気持ちと複雑な気持ちが混ざり合ったが、金寺はそれを意図的に無視する。

よく見てみると、外見がかの有名な【白騎士】にも似ている気がしたが、どうせ機体の設計をチューンした人物の趣味だと思い、その考えも放置する事にした。

さて置き、倉持技研の面子と比べて、金寺はツイン・インフィニティシステムの扱いに慣れており、その特徴なども熟知している。

そんな中で、一つの問題点が見つかった。

（同調率が低い…これでは機体性能を最大限に発揮する事は…）

このシステムで重要なのは、コア同士の同調率だ。

コアには一つ一つ個性のようなものがあり、そのものが意識を持っているといわれている。

そしてツイン・インフィニティシステムの力を最大限に発揮するには、そのコア同士が同調し、同調率が一定の値を超えなければ十分に性能を生かしきれない。

この、「コアの同調させる」というのが製作者曰く「実に苦労に値するもの」らしく、篠ノ之束は同調を前提としていないコア同士

で試したが、全くと言っていいほど同調しなかったらしい。

実際、【白式】の場合はそれらと比べれば安定しているのだが、いかんせん不安定で性能を完全に発揮しきれる状態ではない。

明らかに欠陥機の域を出ておらず、そんな機体で大丈夫か、と思ってしまう。

しかし、こうも思う。

ツイン・インフィニティシステムの力は、ある程度閉じ込めたほうが良いのでは、と。

二つのコア――ツインコアによって発揮される【白式】の真の力――もとい戦闘能力は、現行のＩＳと比べても相当なものになるだろう。

そうなれば、【白式】及び一夏が何らかの危険にさらされる事は目に見えている。

篠ノ之束がそれを考慮しないとは金寺は思えない。

…だが、生憎彼女へ連絡をとる手段は無い。

よって、この思考も一時的に脳内から放置する事にした。

思考回路を切り替えた金寺は、今やるべき事――【白式】の最終完成へ向けての作業を開始した。

◆

次の日の朝、ＨＲ終了後に千冬から「金寺は出張でいない」という旨の説明を受けた一夏は、思わず反射的に聞き返した。

「出張？金寺先生が？」

「その通りだ」

正直、一夏にとっては困る。あれから少しずつＩＳの勉強をしてきたものの、未だに一夏一人では分からない点が多く、そのため金寺による補講の時間はとても意義のあるものだった。

だが、金寺が短期の出張に出たという事は、その意義ある時間が当分なくなってしまう。

「別に悪い事ばかりではないぞ。私との特訓の時間が多く取れる」

一夏の横で箒がそんな事を言っているが、実際一夏のＩＳに関する知識がまだ生半可なのは彼女にも若干原因がある。

箒のレクチャーは、大半が剣道の特訓。今後に控えるクラス代表決定戦に向けてはいいものかもしれないが、知識の面ではあまり良いものではない。

最も、一夏はそのクラス代表決定戦へ焦点をあわせているので文句を言ってはいないが。

「でも、どうして今…」
「お前のためだ、織斑。アイツは倉持技研の依頼を受けて、お前の機体の最終調整を行っているらしい」
「俺の、機体のために…？」

驚いたような一夏の一言に首肯し、千冬は軽く息を吐くと話を続けた。

「どうやら、お前の機体は向こう（倉持技研）でもてこずるほどの代物らしくてな。…まあ金寺のことだ、すぐに帰ってくるだろう。お前は来週の決定戦へ向けて自分なりに頑張る事だ」

それだけ言うと、千冬は身を翻しその場から去っていく。
その後ろ姿を、一夏は羨望のようなまなざしで見つめていた。

「…一夏？」
「ん？どうしたんだ？」
「…お前は変わっていないのだな」

呆れ半分羨ましさ半分、といった様子で呟く箒に対して首を傾げた一夏だったが、直後彼女の思考をある程度理解した。
それは十中八九、「姉」に関する事なのだろう、と一夏は推測する。

一夏も箒も、姉が一人いる。
互いの姉は二人と同じ様に幼馴染なのだが、その弟或いは妹が抱いている感情はかなり違った。

一夏が姉――「織斑千冬」に抱いている感情は、「尊敬」である。

物心ついたときから、一夏にとって姉の千冬は絶対無敵の存在であり、常にその背中に追いつきたいと思っていた。

最も、傍から見ている箒にとっては、彼が『将来は姉と結婚したい』と本気で言い出しそうで正直不安なのだが。

箒が姉――「篠ノ之束」に抱いている感情は、「複雑」と表現したほうがいいだろう。

この世にＩＳを生み出した束は、間接的に箒――篠ノ之家が一夏と離れる原因となった。

理由は、日本政府による「重要人物保護」という、極めて真っ当で当然のものだったが、当時小学４年生だった箒はいかんせん納得できなかった。

よって箒は、少なくとも姉の束に良い感情は持っていない。

だがそれは「憎悪」や「嫌悪」と言えるものでもないため、「複雑」なのである。

最も、姉を引き合いに出される事を極端に嫌がることを考慮すれば、それは十分「嫌悪」に近いのかもしれないが…。

「…まあそうだな。それより、今日も特訓やるんだろ?やっと感覚戻ってきたからさ、早く行こうぜ」

「…っ!わ、分かった…」

さわやかな笑顔で箒の手を握り剣道場へ向かおうとする一夏と、それに思わず顔を紅くする箒。

姉に対する感情は全く持って違うが、それに二人の仲は関係ないようである。

2．姉（後書き）

最近、評価が上がっていたりすると、何だかとても嬉しくなります。
初めて感想をもらったときは、本当に嬉しかったです。

それ以降、読んだ小説には出来るだけ評価をしたり感想を書いたりするようになりました。
小説を書く身の気持ちが分かったとでも言うべきなんでしょうかね。

指摘、感想お願いします。

3．戦闘円舞曲（前書き）

初戦闘。

戦闘描写を書くのはとても楽しいです。本当に。

3．戦闘円舞曲

◆

日が経つのは意外と早いものであり、ついに一年一組クラス代表決定戦の日が訪れた。

それにあたって、現在一夏は特注のＩＳスーツを身にまとい、許可をえた箒、千冬とともに第二アリーナの第一カタパルト内にいるのだが…。

「…あの…織斑先生…？」
「…なんだ」
「俺の機体は…」
「…私に聞くな」

一体どういうわけか、一夏の専用機が到着していないのだ。おまけに金寺からも連絡は一切無い。すなわち、彼らは現状を全く把握できておらずどうしてよいかも分からないのである。

訓練機である【打鉄】を準備すべきか。

千冬の脳裏にそんな考えがよぎったその時――――

『お、織斑先生！』

第一カタパルト内に、第二アリーナ総合管制室にいる真耶の声がスピーカー越しに響いた。

『来ましたよ、織斑君のＩＳが！』

「本当か！？」

待ちに待った知らせを聞き、思わず千冬は声を張り上げる。

それと同時、カタパルトの重い扉が開き、そこから一つの大きめなコンテナとそれを引く一人の青年が姿をあらわした。

「――――悪い、待たせたな」

一夏たちの目に映った“片手でコンテナを引っ張っている”その青年こそ、金寺龍輔である。

「せ、先生…？」

「馬鹿者、連絡もせず一体今まで何をしていたんだ？」

その光景に呆然としている一夏と箒を尻目に、焦燥からか、千冬は思わず苛立ちを含んだ声を出してしまう。

「黙れ。俺だって油を売ってたわけじゃねえ。…それはともかく、時間は無いようだな」

千冬の言葉を一蹴し、金寺は大型モニターへと目線を向ける。

そこには、既に自身の専用機を身にまといアリーナ上空にいるセ

シリア・オルコットの姿があった。

「…仕方がねぇ。初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）処理は戦闘中にやるか。…さて、こいつがお前の相棒だ」

そう結論付けた金寺はコンテナのハッチを開くためにコンテナ備え付けのコンソールパネルを操作する。

コンテナが重々しい音を立てながら開き、中にあるＩＳが姿を晒す。

「これが…」

奇しくも、それを初めて目に収めた瞬間に出た声は、金寺と同じだった。

「ああ、こいつがお前のＩＳ…【白式（びゃくしき）】だ」

コンテナが完全に開き、主に忠誠を誓うような白き機体が、三人の目に入る。

機体を司る飽くなき白は、彼らから言葉を失わせるのには十分だった。

「よし、一夏、時間が無い。早急に装着を済ませるぞ」
「…分かった」
若干せかすような千冬の言葉を聞き、静かに【白式】へ触れた一夏は、

――――頭蓋内に、半瞬鋭い痛みを感じた。

「――――っ!?」

コンマ０．１秒。前触れ無しに襲い掛かってきた痛覚に、一夏は思わず頭を押さえてその場にうずくまりそうになる。

「どうした一夏!?」
「…いや、なんでもない」

それを見た箒が心配そうに尋ねたが、一夏は極力表情を崩さず、【白式】から手を離さないまま答えた。

「…もしかしたら、一瞬脳が情報量に耐えられなかったんじゃない

のか？」

この一部始終を見ていた金寺が、そんなことを呟く。

「――こいつは、今までのＩＳとは一線を越えてるからな」

「どういう事だ？」

千冬の質問に答えず、金寺は一夏に一つ質問をした。

「一夏。…初めてＩＳに触れたときに、今みたいな痛みは来たか？」

「…いや、なんとも…」

それを聞いた金寺は満足そうに話題を切り上げた。

一方、一夏は不思議な感覚にとらわれていた。

先ほど一瞬感じた、脳内に剣を突き刺すような痛みは消え、今は膨大な情報が頭の中に流れてきた。

それも、試験場で成り行きで触れたときとは全然違う。その時とは比べ物にならない情報量が頭の中に流れ込んでいるのにもかかわらず、何故か“それ”を自分は全部理解できていた。

それだけではない。

一夏の頭の中に、何かのビジョンが流れ込んできた。

「何…だ…？」

目が回りそうになる一方で、ビジョンが鮮明になっていく。

――――蒼い空に浮いている自分、数えるのもバカバカしいほど多い“何か”が向かってくる…

――――競技場か？前方にＩＳがいる。“それ”に自分が猛スピードで迫っていく…

ここで、ビジョンと情報の奔流が終わった。

「…大丈夫か？」

千冬の声に、小さくコクリと頷く事しか一夏は出来ない。

猛烈な違和感が、彼の意識を支配していた。

「だったらいい。とっとと装着を済ませるぞ」

金寺が言うと【白式】の装甲が開き、搭乗者を認めたように受け入れる姿勢をとった。

ぎこちない動作で装着を行うと、彼を受け入れるかのように開いていた装甲が閉じ、一夏はまるで自分の体と【白式】が融合していくような感覚にとらわれた。

「背中を預けろ。そうだ、座る感じでいい」

指示を受けながら、一夏は準備を進めていく。

――――Ａｃｃｅｓｓ.

「後はシステムが最適化する」

――――Ｓｅｔｕｐ　Ｓｔａｒｔ.

人口音声と共に、セットアップがオートで進行。

そして、一夏は前方のモニターに提示される情報に目を通し、そ

の名を見つけた。

――――――白式・

表示される空間投影モニターが無数に表示されては、消えていく。
その空間投影モニター越しに、総合管制室にいる真耶が一夏に確認を取る。

『ＩＳには絶対防御と言う機能があって、どんな攻撃を受けても、最低限、操縦者の命は守られるようになっています。ただその場合、シールドエネルギーは極端に消耗します。わかってますよね？』

絶対防御。
ＩＳには、どれほど追い込まれても、パイロットの生命は維持できる装置がある。

最も、金寺はそのようなものを信じ込んでいないが。

（相手は……）

画面左上に表示された、敵方の情報。

名称――――【ブルー・ティアーズ】。

『セシリアさんの機体は、【ブルー・ティアーズ】。遠距離射撃型のＩＳです』

真耶の説明を聞いている最中に、【白式】が一夏に同調し、一夏を理解していく。

「これが……俺のＩＳになったのか…」

体に馴染んでいく様を感じながら、一夏はふと呟く。

「一夏、いけるか？」

千冬のかけた言葉に一夏は首肯し、カタパルトの足場に乗る。

「それと、戦闘中は常に戦況を把握していろ。焦らず、慌てず、自分の勝負に持ち込め。私がお前に言えるのはこれぐらいだ、一夏」

姉の頼もしい言葉に、一夏は思わず笑みをこぼした。

目の前で開いていくカタパルトハッチを見つめると、その先には、青空が広がっていた。

これから自分があそこへ向かって飛び出して戦闘を行うと思うと、よく分からない緊張感が伝わってくる。

「箒…行ってくる」

「ああ…勝って来い」

横にいる箒との短い会話を終え、そして、意識を前方に広がる快晴の青空に向ける。

「…よし、行きます！」

一夏がそう言うと、足場が大きく前方へ滑走。スラスターを噴かせた【白式】をカタパルトから射出する。

いよいよ、実戦だ。

◆

背中の四つの噴射口で姿勢制御を行い、既に空中で待機していた敵――――セシリア・オルコットと向き合う。

「あら、一応来ましたのね」
「来ないとでも思ったか？」

自身満々と言った風で言葉を紡ぐセシリア。
その瞳は、確実に自身の勝利を確信している目だった。

「さて置き、先日貴方は『手加減は要らない』とおっしゃいました。…発言を撤回しようとは思いませんか？」

「…今更前言撤回するわけ無いだろ」

真正面から反抗の姿勢を表した一夏を、セシリアは鼻で笑う。

第一、セシリアは右手の主武装のセーフティを既に解除している。

最初からやる気満々のようだった。

「そう……それはそれでよい心掛けですわ。それなら……」

その言葉と同時に、セシリアは右手に携えている大型のスナイパーライフルを構える。

一瞬遅れて、ディスプレイに赤い枠の警告文が現れた。

――――警告　敵ＩＳ、射撃体勢にに移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填――――――

（敵ＩＳ、射撃体勢に移行……来るか！）

「遠慮なくいかせてもらいます！」

全体のサイズに反して、長い銃身を持ったその兵器――――六七口径高エネルギーレーザーライフル《スターライトｍｋ?》から、青白い閃光が飛び出した。

まさに間一髪。

一夏が彼女の奇襲攻撃を予測していた事もあり、直撃という無様な事態だけは避けられた。

しかし、僅かながら光条は【白式】の装甲をかすり、シールドエネルギーを削る。

流石の一夏もその場にとどまるような真似はせず、更に光線が放たれるのを確認した後加速して回避行動に移った。

「さぁ、踊りなさい。わたくしセシリア・オルコットと【ブルー・ティアーズ】が奏でる円舞曲で！」

間髪おかずにそのようなことを言いつつ、セシリアは《スターライトｍｋ？》による狙撃で一夏を翻弄していく。

一夏もそれを避けようとアリーナを飛び回っているのだが、操縦者の技量の差ゆえか直撃ないしかする事が多かった。

しかし、このままでは埒が開かない。遠方から来る敵弾を避け続けたところで、そこに一切のチャンスはなく、それは出来の悪い曲芸にすらなり得ない。

「クソッ…！何か武器は…！」

回避行動の最中ながらも、何とか反撃に転じようと一夏は【白式】の基本武装（プリセット）を確認したが、

「ってこれだけかよ！」

一夏が素っ頓狂な声を上げたのも無理は無い。

【白式】に搭載されている基本武装（プリセット）は、近接特化ブレード一本のみだった。

（…でも、やるしかないな。…来い！）

そう念じた一秒後、一夏の右手の中で淡い光がはじけ、近接特化ブレードへと姿を変える。

柄から刃まで薄い灰色なそれは、形状が日本刀に似ているような気がした。

ともかく、その刀を片手に、一夏は狙撃をかいくぐってセシリアに接近しようとする。

「遠距離射撃型の私に、近距離格闘型の装備で挑もうとは……笑止ですわっ！」

そんな事は一夏も百も承知だ。

いまだに降り注ぐ青白い光条からは完全に逃れられず、シールドエネルギーもかなり減少してきているが、戦闘開始直後と比べれば彼が操縦にやや慣れたという事もあり被弾数は減少している。

だが、それでもシールドエネルギーは既に四割近く削られている。

一夏としては懐に飛び込んで早めに決着をつけたいところだ。

少々焦り始めた彼の脳裏に、戦闘前の千冬の言葉が響く。

『――常に戦況を把握していろ。焦らず、慌てず、自分の勝負に持ち込め』

…危なかった。

もしこの言葉を思い出さずに無理にでも彼女の懐に飛び込んで行っていたら、自分は間違いなく堕ちていただろう。

その証拠に、

「この【ブルー・ティアーズ】を前にして初見でここまで耐えたのは貴方が初めてですわね。でも……そろそろフィナーレと参りましょう！」

【ブルー・ティアーズ】の腰背部のサイドバインダーが四つに分離し、その先端から《スターライトｍｋ?》と同じように青白い光条が飛び出していた。

これが、【ブルー・ティアーズ】の機体名にもなっている兵装――第三世代型・自立機動ライフルビット《ブルー・ティアーズ》。操縦者の思考制御によって、オールレンジ攻撃を行う無線機動兵装だ。

それらが一夏の周囲を自由自在に飛び回り、彼の死角からビームを放つ。

一夏は何とか見極め避けようとするが、四方向から迫ってくる光条に早々対応できるわけも無く。

背後から、ビームによる奇襲を受けた。

「ぐぅっ……！？」

苦悶の声を漏らしながら、一夏は後退。シールドエネルギーも大幅に削られる。

「あら、耐えましたのね。中々頑丈なようで何よりですわ」

意外そうな声をあげるセシリアの声も、余裕が一切無い一夏の耳には入らない。

しかし、

（……ん？）

何かが、一夏の心に引っかかった。

四方八方から来る光条をよけるのに精一杯なのに、何か「違和感」を覚えた。

そして彼の視線が《ブルー・ティアーズ》を操っているセシリアに向いたとき、「違和感」は明確な「疑問」へと変わる。

（――どうしてライフルで撃ってこない？今なら俺を確実に狙い撃てるはずなのに…）

《ブルー・ティアーズ》がアリーナ上空を駆け巡っている間、セシリアはほとんどその場から動いていない。

そして、不意に《ブルー・ティアーズ》による射撃が止む。
セシリアが《スターライトｍｋ?》で狙撃を開始したのは丁度そのときだった。

当然回避。
直撃コースから外れ、再び思考を開始する。
千冬の言葉が脳裏に残っていることも幸いし、冷静に一夏はそれについて考えてみることが出来た。

少々の思考の末、たどり着いた一つの結論。

（…まさか）

それを確認するため、一夏は意を決し、彼女の懐へ飛び込む機会をうかがう。
飛来する光条を避けて、避けて、避けて。

そして、そのときが来た。

ほんの一瞬、《ブルー・ティアーズ》による射撃が、ピタリと止んだのだ。

――――今だ！

キッとセシリアを見据え、一夏は今の【白式】が出せる最高のスピードで彼女へ向かっていった。

それを見たセシリアの表情が、青くなっている。

「――――ティアーズ！！」

プライドをかなぐり捨てたような素っ頓狂な声をあげながら、セシリアは狙撃体制に移るのを止め、再び《ブルー・ティアーズ》に指示を出す。

その青白い光条に阻まれ、結果的に一夏の奇襲攻撃は失敗したものの、彼の「疑問」は「確信」へと変わっていた。

（やっぱりな。彼女はあのビット兵器と狙撃を同時に行えない！）

実際のところ、一夏の確信は見事に的をいている。

ビットの思考制御にはかなりの集中力が求められる。イギリス国内でＢＴ兵器の適正が一番高いセシリア・オルコット――――それが、彼女がこの学園に来た理由である――――ですら、ビットを操作する

際には思考制御に集中してしまい他の動作が一切出来なくなる。

一見無いようで、あった僅かな隙は、それだけではない。

一夏の動きを見たセシリアは、咄嗟に四基の《ブルー・ティアーズ》で弾幕を張り、一夏の接近を阻もうとする。

「一つ覚えですわね！」

先ほどと同じように、蒼白いビームが網のように張り巡らされ、一夏に襲いかかる。

四方八方からの接射に、一夏はなす術もなく散る。

――――はず、だった。

「――――そこだっ！」

刹那、《ブルー・ティアーズ》の内の一基が、爆煙と金属片へ姿を変えた。
横に振るった近接特化ブレードの一閃が、的確に一基の《ブルー・ティアーズ》を捉えたのだ。
予想だにしない事態に、セシリアの目が驚愕に開かれる。

「見切ったぞ！《ブルー・ティアーズ》！」

一夏は気付いた。
自由自在に動き回るレーザービットが、常に一夏の“死角だけ”を狙っている事を、見切ったのだ。
《ブルー・ティアーズ》の射線は、一夏の反応が一番遅くなるところから放たれている。
それは、気付かなければ死角だが、気付けば死角でも何でもない。
ただの動き回る的だ。

一瞬であれ硬直をさらしたセシリアを、一夏は見逃さない。
完全に《スターライトｍｋ？》と《ブルー・ティアーズ》の射線が止まった一瞬の隙を突き勢いよく接近。
自分の距離に持ち込み押し切るべく、刀の斬撃をセシリアに向け

て振るおうとして――――

「かかりましたわね！」

【ブルー・ティアーズ】の腰部に装着されている銃口が、一夏を捉えた。

背後に、悪寒が走る。

「《ブルー・ティアーズ》は六基ありましてよ！」

そう。

《ブルー・ティアーズ》は、四基のレーザービットだけでなく、二基の弾道ミサイルビットも兼ね備えているのだ。

彼は完全に油断していた。

放たれた弾道ミサイルから簡単に逃れる事が出来るわけが無い。

そして。

【白式】が。

一夏が。

――白銀の光に包まれた。

3. 戦闘円舞曲（後書き）

指摘・感想お願いします。
次で《封印解除》は終わりです。

4．ツインインフィニティシステム（前書き）

今回で《封印解除》は終了です。

4．ツインインフィニティシステム

◆

「一夏あっ！！」

第二アリーナ総合管制室にて。

モニターに映る一夏を包み込む爆発に、箒が悲鳴に近い声をあげていた。

この光景を見れば、一夏が撃墜されたと思うだろう。

だが、

「…全く、タイミングが良すぎじゃねぇの？」

「確かにそうだな。まあそれも、勝負師としての実力の内だろう」

あろうことか、金寺と千冬はのんきにそんな事を呟いていた。

だがそれは、まだ一夏が健在である事を確信しているからに他ならない。

「――――終わったぜ、初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）処理。“封印解除”の時間だ」

◆

爆煙が晴れた場所に、それはいた。

それは先ほどまでの【白式】とは少々違う。

各部装甲が全体的にスリムな形状となり、両腕並びに脚部の装甲にブレード状の突起が付く。

背部の二基の大型ウイングスラスターは、大型の噴射口が一つと、補助の小型の噴射口が一つ付き、全体で四つの噴射口が露になる。

先ほど【白式】を包み込んでいた白銀の光が細かな粒子となり、その全身を覆っている。

そして、その空間投影モニターに映る、初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）処理の終了を告げる文。

ツイン・インフィニティ・システム搭載機、【白式】が、本当の姿を見せたのだ。

「まさか、一次移行!?今まで貴方、初期設定だけの機体で戦っていたというの？」

上空のセシリアが驚愕をあらわにしていたが、一夏は大して気にとめなかった。

試しに腕を動かし、近接特化ブレードを少々振ってみる。

なるほど、どうやら完全に【白式】が一夏のものになったという事もあり、先ほどよりは反応速度が早くなっている気がした。

空間投影モニターに目を通すと、ある事に気づいた。

表示されている【白式】の唯一の基本武装。それは先ほどまでは

ただの「近接特化ブレード」だったのだが、その名称が変わっていた。

刀の名は――――《雪片弐型（ゆきひらにがた）》。

（今まで守られてるだけだった…けど、もうそれも終わりだ）

≪はぁ？貴方、何を言って――――≫

心中でそう独語した時、何故か頭蓋内にセシリアの声が響いたが、今の一夏の意識はそちらへは向いていなかった。

――――正直、自分は千冬姉に頼りすぎた気がする。

揃って親に捨てられたにもかかわらず、自分ひとりで養おうとしてくれた。

食費、学校費、生活費。全て姉が稼いでくれた。

いつしか姉に頼ってばっかりの自分が嫌になり「迷惑を掛けすぎている」と引け目をとるようになってしまった。

――――最も、当の本人は迷惑などこれっぽっちも思っていらず、それが当然と言わんばかりなのだが。

だからこそ、中学校三年間はほぼ一年中アルバイトに励み、少しでも姉の負担を軽くしようとしたのに――――

もう自分は、受身だけの人間ではない。

「これからは俺が――――俺が千冬姉を、家族を、守ってみせる！」

自身の決意を如実に表した言葉。
それが、一夏の「理想」であり、「願い」であった。

実体剣だった《雪片弐型》が、眩い光を放つビームソードを展開する。
先ほどと比べても段違いな速度を出し、一夏は【ブルー・ティアーズ】へ向け突進していく。

（【白式】が俺に応えてくれたんだ…！俺が【白式】に応えないでどうする！）

それにセシリアも反応。遠距離戦からの弾幕展開を試みようとする残った三基の《ブルー・ティアーズ》を自身の周辺に停滞させ、援護を受けながら一心不乱に連射する。
【白式】も、そこまでエネルギー残量があるわけではない。
塵が積もれば山となるように、シールドエネルギーは戦闘開始直後から減り続けていて、既に半分以下になっていた。

例えかすっただけでも、今の【白式】にとっては致命傷になるか

もしれない。猛突進するのを止め、丁寧かつ大胆にスラスターを噴かし、ビームの射線を避け、接近する機会を狙う。

ここまで撃ち続けていれば、やがて疲弊する瞬間が訪れる。

狙うは、秒にも満たぬその好機。

そして。

《ブルー・ティアーズ》の一機が、不意に射撃を止めた。

同時、【白式】が淡い白銀の粒子につつまれる。

――――単一使用能力（ワンオフ・アビリティー）《零落白夜（れいらくびゃくや）》・発動・

一夏は再び、ビームによる猛攻の中へ身を沈める。

道を塞ぐ光弾を避け、襲い来る弾丸にかすり、一夏はついに、セシリアの眼前へ躍り出た。

この距離ならば、《雪片弐型》の一薙ぎが届く。

逃してはならない、千載一遇の機会。

しかし。

「忘れたとは言わせませんわよ！」

再び、腰背部のミサイルビットの銃口が、目前の一夏を捉らえた。
再び放たれる、計四発の弾道ミサイル。

それに対し、一夏は。

「くっ…うおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

――――――急上昇。

決着をつける機会を得てもなお、一夏が打ったのは逃げの一手だった。こうなることを予想していたかのように。

「――――――っ！？」

そして、一夏は急降下。体にかかる慣性をものともせず即座に下降したのだ。

セシリアはそれを見て迎撃態勢に入るが、上方を見上げた瞬間、太陽光が目に入る。
光に目が眩み、またしても彼女に生じた、一瞬の隙。

既に一夏は、必殺の態勢に入っていた。

――――――が。

――――――警告　インフィニティ・コア臨界点突破

◆

無機質かつ不吉なアラート音が、一夏、セシリア、金寺、千冬、箒、真耶の耳に響いた。

『…なんだ?』

間の抜けたような一夏の声が総合管制室に響いた次の瞬間、何の前触れもなしに【白式】の左翼ウイングスラスターが小爆発を起こした。

「織斑君?!」

「一夏っ!!」

真耶と箒が悲鳴を上げる。

左翼部から煙を上げた【白式】は、機体制御ができないらしく徐々に落下していった。

このままでは、何か嫌な事が起きる。

それはこの場にいる全員――特に金寺が思っていた。

「試合中断!セシリア・オルコット、一夏を救出しろ!」

即座に通信回線を開き、金寺がセシリアに対して声を飛ばす。

彼女は一瞬驚きを露にしたが、軽く頷くとスピードをあげて降下。

高度を下げていく【白式】の腕を掴み、何とか落下を阻止する。

『…大丈夫ですの?』

『俺はな…でも機体が無理みたいだ。…ありがとう』

『いいえ、どう致しまして』

現在、管制室のモニターには、【白式】の空間投影モニターと同じ事が表示されている。

そこには依然、《警告　インフィニティ・コア臨界点突破》という紅い文字が表示されていた。

「臨界点突破…オーバーロード？一体どういう意味だ？」

口元に手を当てて、考え込む千冬。

その横で、盛大に金寺が溜息をついていた。

実際のところ、金寺はこの事態をある程度予測できていた。

それゆえ、代表決定戦のギリギリまで技研で調整を行っていたのだがしかし、起きてほしくないという彼の切実な願いは完全に空回りしてしまったのだ。

「アイツは…」

金寺の呆れにも近い怒りは、この場にいない――そもそも所在不明のある人物に向いていた。

◆

結局、今日の試合は無効試合となり、【白式】の修復が終了次第

また試合を行う、という事になった。

そしてその日の夕刻、第二アリーナの第一カタパルト内にて、金寺が一夏と千冬に対してさまざまな説明を行っていた。

「そもそも何故、【白式】のコアがオーバーロードを起こしたんだ？」

至極真っ当な千冬の質問を聞き、金寺は【白式】の基本スペックをカタパルト内の大型モニターに表示する。

「問題の根源は、【白式】の稼動システムにある。…「ツインコア」、これを聞けば大体分かるだろ？」

「ツインコア？…まさか！？」

千冬の眼が、驚愕に見開かれ、金寺が静かに頷く。

対する一夏は話についていけず、新たに質問をした。

「あの…ツインコア、ってなんですか？」

一夏の質問に答えるために、金寺はモニターを切り替える。

表示されたのは、【白式】の図面の翼部に円状のメーターが現れているもの。

それの両翼部分に表示されている丸型メーターを、金寺が指差す。

「言葉の通りだ。【白式】は二つのコアを一つのＩＳに搭載している。俺たちはそう言うのをツインコアと呼んでいるが…その二つのコアを制御しているのが『ツイン・インフィニティシステム』だ」

「…『ツイン・インフィニティシステム』…？」

よく理解できない、といった表情の一夏を見つつ金寺は説明を続ける。

「『ツイン・インフィニティシステム』がツインコアを制御・同調する事により、生成されるエネルギーは二倍ではなく二乗になる」

いまだに首を傾げる一夏に、嘆息しつつ千冬が具体的に説明する。

「例えば、一つのコアの生成するエネルギー量を１０とする。これが単純に二倍だ、と生成されるエネルギーは２０だ。しかし、『ツイン・インフィニティシステム』によってツインコアが同調すると、生成量は二乗化つまり…生成されるエネルギーが１００になる」

「ひゃ、１００！？って事は、機体性能がすごい事になるんじゃ…？」

この例えで一夏も大体理解したらしく、思わず声を上ずらせていた。

それに頷いた金寺だったが、「だが問題点がある」と言いつつモニターを切り替える。

「この機体の場合、過剰に生成されたエネルギーの大半は、機動力と攻撃力に回っている。シールドエネルギーに関してはあまり効力は無いな。それに、『ツイン・インフィニティシステム』を完全に稼動させるには、ツインコアの同調率が大事になるんだ」

「同調？」

「ああ。コアは個別に個性みたいなものがあって、それぞれに意識があるといわれている。まあ現実そうなんだろうが、だからこそ同調させるのは至難の技なんだ。最初から同調を前提にしてコアを作れば問題ないが……今【白式】に搭載されているツインコアは、こいつを改造した野朗曰く『既存のコアの中では一番良い組み合わせ』らしい」

「こいつを改造した野朗…？」

「【白式】は元々、倉持技研内で放置されてた欠陥機だったらしい。それを篠ノ之束が引き取って魔改造。そんでもって今ここにあるわけだ。ちなみに俺が出張していた理由は、こいつの最終調整のためだ。何とか同調を安定させようとしたんだが…上手く出来なかった」

一夏が溜息をつく金寺の顔をよく見ると、僅かながら目の下にくまが出来ていた。

金寺が出張に行ったのは一週間前。となると、ほぼ一週間通してほとんど睡眠もとらず【白式】のツインコアの調整を続けたのだろうか。

そう思うと、とてもありがたいし、とても申し訳ない。

「気にすんな、機械弄りは趣味の一つだからよ」

一夏の思った事が表情に表れていたらしく、表情を変えずに金寺が彼にしか聞こえないようにぼそりと呟く。

「そうすると…先の戦闘でのオーバーロードは、このツインコアが原因、という事になるな」

モニターを眺めつつ、千冬が小爆発の原因を推測する。
金寺はそれに首肯すると、モニターに戦闘のＶＴＲを映す。
その下には、ツインコアの同調率が表示されていた。
戦闘開始直後は、５２パーセント。
「…完全安定領域は大体６５パーセント以上だ」
その後も同調率は不安定で、５３から５８パーセントを前後する。
この間に一夏が《ブルー・ティアーズ》の内の一基を叩き斬ったが、そのときの同調率は５８パーセントだった。
そして弾道ミサイルが命中する直前、突如同調率が跳ね上がった。
同時に、【白式】の周囲に淡い白銀の粒子が舞う。
このときのツインコアの同調率は、
「６８パーセント！？」
「初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）処理終了したのと同時だな…」
どうやら、完全に【白式】が一夏のものとなったのと同時に、同調も安定するようになったらしい。
場面は変わり、一瞬の隙を見つけた一夏が、セシリアの懐に飛び込んでいく。
セシリアは弾道ミサイルを放ち迎撃したが、一夏は急上昇する事で即座にそれをよけ、即座に急降下して必殺の一撃を食らわそうとする。
そして、ツインコアがオーバーロードを起こし、【白式】の左翼が小爆発を起こす。

コアの同調率が完全安定領域に到達して以降の戦闘の様子を見た千冬は、こう分析した。

「機体の機動力もツインコアの同調率と正比例するようだな。一夏が急上昇と急降下を行ったときは同調率が７０を超えている…」

あの瞬間、ツインコアの同調率は右肩上がりに上がっていき、最終的にこの戦闘での最高同調率は、７３パーセントだった。

その最高同調率を記録したのは一夏が急上昇から急降下に転じた直後であり、次の瞬間ツインコアが負荷に耐えられずオーバーロード起こし、同調率は恐ろしい勢いで下がっていったのだが。

「…結局いまだに欠陥機なんじゃ…」

一通り事を理解した一夏は、現在右手首にて待機形態――ガントレットとなっている【白式】を見つつ呟いた。

一夏の述べた事実に、カタパルト内を嫌な沈黙が支配する。

それを壊すように盛大に嘆息した金寺が、メモリースティックに【白式】の全スペックをコピーした。

「一応、安定させるための後付装備でも造ってみるわ。それまでちょっくら辛抱してくれよ」

「わかりました」

どうやら、金寺龍輔の悩みの種は尽きそうに無い。

◆

それから数時間後、セシリアは自室でシャワーを浴びていた。

白く透き通った肌と、整ったプロポーションは、年相応でない大人の女性の色気を感じさせるには十分である。

先の戦闘からすぐシャワールームに入ったのは、戦闘でかいた汗以外に、自分の中でうずめく不思議な感情を洗い落としたかったからなのだろうか。

正直、本人にも分からない。

（……何故、こんな気持ちになるのかしら）

それはとてもめまぐるしくて、訳が分からず、だからといって簡単に放置していいようなものではなかった。

（……私が、負けそうになるだなんて）

勝者は、織斑一夏。

セシリアはそう認識していた。
もし、彼のＩＳが不具合を起こしていなければ、確実にあの太刀筋で敗北していた。

――――手加減はいらないからな。
――――…今更前言撤回するわけ無いだろ。

セシリアは、一夏の言葉を真に受けていた。
手加減せずに、力の差を見せてやる、といわんばかりに全ての力を出し切って、策略を立て、駆け引きを行い、負けそうになった。

納得できるわけが無い。
勝とうが、負けようが、白黒はっきりしたいと思う。

それに、

≪これからは俺が――――俺が千冬姉を、家族を、守ってみせる！≫

彼のＩＳが白銀の粒子を帯びていたときに、聞こえてきた決意。
それが彼の本心である事は、何故かすぐに分かった。

彼――――織斑一夏の瞳に宿っていた信念の光は、自分の父親と正反対だった。

セシリア・オルコットは、イギリス国内でも有名な名門貴族のお嬢様だ。

その母は、尊敬に値する人物だった。
ＩＳが発表される以前から、名門家の主として、様々な会社を経営し、数多の成功を収めてきた。
厳しくも、凛々しいその姿は、幼かった少女が憧れを抱く対象だった。

逆に、父は尊敬に値しなかった。
簡単に言えば、セシリアの父親は、婿入りした男だった。
常に母の機嫌を気にし、常に媚びるような真似をしてきた父親を見ていた少女が、『将来、情けない男とは結婚しない』といった感情を抱くようになったのは、ある種当然の成り行きだったのかもしれない。

だが、それも全て過去の話。

三年前、イギリス国内で、大規模な列車横転事故が起きた。

この、未曾有の事故の死亡者は４００人以上にのぼり、その中に、オルコット夫婦はいた。

一部では、無差別テロなのではないかといわれているが、事件現場が悲惨すぎるゆえ捜査もそれほど行われず、事故として処理された。

――――最も、何故その日に限って別居状態だった両親が一緒にいたのか不思議だったが。

それ以降、セシリア・オルコットの日常は大きく変わった。

両親を亡くし、残ったのは、莫大な財産のみ。

当然の如く、それにつられた者たちが、彼女に群がってくる。

それを避けるため、勉強に勉強を重ね、汚い大人たちから遺産を守ってきた。

――――ＩＳの適性検査でＡが出たのは、その中での偶然の産物だった。

結果的にそれが功を奏し、財産・国籍保持を条件に、彼女は国家代表候補生になったのだが。

――――そして、ＢＴ兵器のデータサンプリングのために日本に来た彼女は、彼と出会った。

最初は、いくら成り行きで入学する事になったとはいえ、ろくに学ぼうともしない彼に失望していた。
しかし最近は積極的に学ぼうとする姿勢が現れて、自分の元に勉強を教わりにくることもあった。

（……織斑一夏は、違うのかもしれない）

そして、今日。
セシリアは、一夏の決意を聞いた。
強き志を持つ一夏の中に、セシリアは、自身が求める何かを見つけたような気がした。

（……知らなければ）

もっと、彼のことを。

4．ツインインフィニティシステム（後書き）

さて、第二章終了です。

セシリアにまだフラグは立ちません。本作の一夏は、じっくり時間を立ててフラグを建築していきます。
それゆえ無効化される人物も出てくるわけですが、それはまた後の話。

次章では、セシリアとの再戦と【白式】関連を中心にしていきます。

指摘・感想があれば、宜しくお願いします。

1．関係（前書き）

新章開始。

若干金寺が空気ですが、今はまだ裏で一夏をサポートする役割なので仕方ないです。

1．関係

◆

「――――というわけで、クラス代表決定戦は一週間後にまた行う」

三日後のＳＨＲにて、千冬はクラスの面々にその旨を伝え、帰りの号令を済ませた後一夏を呼び出した。

「一応、金寺がお前――――もとい【白式】の専属整備士に付く事になった。何かＩＳ関連で分からない事があれば遠慮なくあいつに聞け。金寺は、頭脳の面に関しては私をはるかに超越しているからな」

それを聞いて頷いた一夏の元に、一人の生徒がやってきた。

「一夏さん、少しいいですか？」

「オルコットさん…」

その生徒は、先日戦った相手、セシリア・オルコットだった。

「機体の方は大丈夫ですの？」

「ああ、それをこれから確認しに行こうと思って。なんか俺のＩＳは特別みたいでさ。それより、オルコットさんのほうは…」

その続きを言おうとして、一夏はセシリアに制された。

「わたくしなら万全ですわ。後、わたくしの事は名前で呼んでも構

いませんわ。それと、」

そう言うと、セシリアはまっすぐと一夏を見据え、はっきりと言う。

「――――次こそは、白黒つけましょう。お互いに全力を出して、一夏さん」

それは、戦士としての正々堂々とした宣誓だった。
これが、彼女があの戦い以降ずっと思っていた事。

――――――織斑一夏と勝負のけりをつけたい。

セシリアは一夏を見据えつつ、手を差し伸べる。
その意思が、一夏にもまっすぐ伝わったようで、

「…ああ、分かってるさ。今度こそ勝負をつけよう！セシリア！」

快く、握手に応じた。

この光景を見て、一部の生徒が二人に拍手をしていたが、それは

また別の話。

◆

一週間後。

グラウンドに集合した一年一組は、五列隊形で並んでいた。

“休め”の姿勢で待機している中、男子は一夏だけである。

この状況、正直一夏はきつい。

今、一夏を含めた一組の面子は、全員ＩＳスーツを着ていた。

スクール水着、と例えられても不思議ではないＩＳスーツの主な役割は、操縦者の微弱かつ繊細な体内電気信号を読み取って、それをリアルタイムにＩＳの各部位にダイレクトに伝達する事だ。

それ故、余計な装飾はいらないので、しっかりと体のラインが忠実に現れるのである。

つまり。

織斑一夏は現在、水着少女の集団の中に、男一人放り込まれているような状態だった。

「では、これよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう」

五列隊形の先頭にいる千冬が、ざっとメンバーを見渡す。

「織斑、オルコット。試しに飛んでみせろ」

「わかりましたわ」

その声と同時、列から一歩前に出たセシリアの耳につけた青いイヤーカフスが淡く発光する。

周囲一帯が光に包まれた瞬間には、彼女は【ブルー・ティアーズ】の装備を終えていた。

先日ライフルビットを一基失った【ブルー・ティアーズ】だが、金寺の早業によって数十分で元通りになったらしい。

「織斑、お前もだ」

思わずセシリアに見入っていた一夏は、千冬の声で我に帰り、自分もＩＳを装着しようと一歩前に出る

ちなみに、【白式】を装備するのは、今回で三度目である。

（――――行くぞ、相棒）

目を瞑り、意識を右手首のガントレットに集中する。

反射的に構えた右手首のガントレットにある白金の半球から、二つの光のリングが出現し、一夏の体を包み込む。

その過程まで０．８秒。一夏は【白式】の装着を終える。

――――――と。

（――――――うっ！？）

頭蓋内に、何かのビジョンが浮かび上がった。
先日のように痛みや目が回りそうな感覚は無く、またしても一夏はそれを読み取る事が出来た。

――――――手元から飛び出す粒子ビームが、次々と迫り来る黒い物体を打ち落としていく。

――――――自らの振るった剣の太刀筋が、至近距離にいるＩＳに命中している。

ここで、ビジョンが終わった。

ちなみに【白式】のほうも、修復などは某専属整備士の早業によって完全に完了している。

二人が無事成功したことを確認してから、千冬が声を張った。どうやら、一夏が若干ふらついたのは気づかなかったらしい。

「よし。……飛べ！」

それを聞き、両者同時に飛翔。

先んじたのは、セシリア。目標高度に達した時点で、一夏から二メートルほどの距離を開けていた。

まだ一夏は、空を飛ぶ、という行為に慣れていないのが現状であった。

『織斑、遅いぞ。スペック上では【白式】の方が上なはずだ。…お

前は“特別なもの”を手にしただろう？その程度では済まないはずだ』

「すいません…俺のミスです…」

一応、急上昇と急降下は先日習い、実行したのだが、いかんせん慣れない部分が多すぎる。

もっとも、今回のセシリアは《スターライトｍｋ？》を展開していないので、先の戦闘より機動力が向上していると言う点もあるだろうが。

先日の戦闘で、危なげなくこなして見せた自分が不思議すぎる。

ちなみに、現在のツインコア同調率は６３パーセント。先日金寺が細工を加えたため、以前よりはだいぶましになったようだ。

「自分の前方に角錐を展開するイメージ……教本にはそう書いてありますが、イメージは所詮イメージ。自分のやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ？」

先を行っていたセシリアが、速度を落として一夏に並ぶ。その心遣いに、一夏は感謝せざるを得なかった。

「セシリア…」

「差し出がましいようですけれども……どうやら、あまり慣れていないように見えましたので」

「まぁ、否定できないな」

数日前のクラス代表決定戦以降、セシリアの一夏に対する態度は変わっていた。
細かく言えば、接し方が柔らかくなってきたのだ。
正直、当初の態度があれだっただけに、最初はかなり違和感を覚えたのだが。

「その……よろしければ、放課後に指導して差し上げますわよ？」
「指導？」
「その時は、二人きりで……」
『織斑、オルコット。急降下と完全停止をやってみせろ』

セシリアの言葉を遮って、千冬から通信が入る。
表情を引き締めると、セシリアは【ブルー・ティアーズ】のスピードを上げた。

「では、お先に」

そのままの勢いでいくらか進むと、九十度に近しい角度で地面に降下。
ギリギリまで待ってからスピードを落とし、激突を避け、着地する。

（やっぱり上手いな…この前は何とか互角に戦えたけど、彼女のいろんなところを見習っていかないと）

改めてセシリアに尊敬の念を抱きつつ、一夏もセシリアの後を追おうとして。

（――――――またかよ！）

またしても、頭蓋内に現れる何かのビジョン。

今度は、人の顔が見えた。

その顔は、なぜか見覚えがあったが、すぐビジョンが終わったため考える余裕がなかった。

とりあえず速度を落としてゆったりと着地。千冬に「急降下と完全停止をしろと言っただろ」と出席簿アタックと軽い一喝を食らったが、その時の一夏はさっき脳裏に浮かんだビジョンのことを考えていたためよく聞いていなかった。

おかげでさらにもう一回追加で出席簿アタックを食らったが。

「まあいい。織斑、武装を展開しろ。それぐらいはもう出来るだろう」

「は、はぁ」

「返事は「はい」だ」

「は、はい」

考え事をしていて間抜けな返事になってしまったのはさておき、一夏は右手を突き出して《雪片弐型》を展開しようとする。

刃が純白に煌めく刀を連想し、右掌に意識を注ぐ。
淡い白銀の光がはじけ、灰色の近接特化ブレード《雪片弐型》が展開された。

「初心者にしては、――――まあまあだな。もっと早く展開できるようになれ。実際の戦場では、０．５秒が命取りになるぞ」

ツインコア搭載の【白式】の補助もあり、初心者にしては早いスピードで展開ができた。
これも、金寺が施した細工の一つである。

「次にオルコット、主武装を展開してみろ」
「はい」

指示を受けセシリアが返答すると同時、ほんの一瞬青白い粒子が煌めく。
刹那、彼女の両手には六七口径高エネルギーレーザーライフル《スターライトｍｋ？》が展開されていた。

…銃口を真横に向けて。

「速さは合格点だ。だが、一体どこに向けて銃口を構えている？」
「で、ですがこれはわたくしのイメージを固めるのに重要なことでして…」
「それで、味方を撃つつもりか？第一それでは早撃ちできないぞ」

「……直します」

筋が通った千冬の言葉に何も言い返せず、セシリアは受け入れるしかなかった。

確かに、これでは速攻ができない。

「よし、次は近接武装の展開だ」

「えっ…あっ、は、はい」

続いて近接武装の展開を指示されたが、セシリアは何やら焦っていた。

《スターライトｍｋ?》を収納し、【ブルー・ティアーズ】の基本装備である近接ショートブレード《インターセプター》を展開しようとしているが、セシリアの右手に青白い粒子自体は現れるものの、形にならない。

この武装の量子変換は、必然的に操縦者のイメージというものが重要になってくる。それゆえ、近接武装を展開するのに慣れないらしいセシリアはいかんせん戸惑っているようだった。

「…どうした?」

「す、すぐです…ああもうっ!《インターセプター》!」

半ばやけくそ気味にセシリアが声を張り上げると、やっと刃渡りの短いショートブレード《インターセプター》が展開された。

武器の名を言いながら展開するのは基本中の基本であることから、セシリアが《インターセプター》を使い慣れていないのは一目瞭然

だった
そもそもこの武装はあくまで非常時のためにあるもので、セシリア本人もろくに展開したことがない。
「いくらなんでも遅すぎだ。もっと早く展開できるようにするんだな」
「じ、実戦では接近されないので問題ありませんわ！」
「ほう。先日の戦闘のダイジェストを今ここで語ったとしてもか？」
「…そ、それは…」
先の戦闘、――対【白式】戦――敵機の急上昇と急降下によってセシリアはものの見事に懐を取られてしまっている。
無論、何も言い返せない。
そしてセシリアの苛立ちおよび怒りの矛先は、その戦闘の相手に回り、
『貴方のせいですわ！』
『それはねぇだろ！』
ＩＳ同士の通信で八つ当たりが来たが、予測していたので即座の突っ込みも問題なくこなせた。

1. 関係（後書き）

指摘・感想あればお願いします。

2．白式（前書き）

この辺りから、金寺・一夏コンビが多くなってきます。

2. 白式

◆

その日の放課後、一夏は金寺立ち会いの下で、【白式】の試験運転をしていた。

本来この時間は補講を行うはずだったが、だいぶ一夏が授業にもついていけるようになってきたため、折角なのでこの時間を【白式】のために使おう、ということになったのだ。

現在、第三アリーナを貸し切った状態で、【白式】を駆る一夏はアリーナ内壁に沿って航空している。

金寺の目的は、高速機動時でのツインコア同調率のデータ採取だ。一夏はすでに彼から「とりあえず飛ぶことだけに意識を注ぐように」と言われているため、言われた通り内壁にぶつからないよう、注意して航空している。

航空開始から数分後、金寺からの通信が入った。

『そろそろOKだ。降りてきてもいいぞ』

「了解しました」

その言葉を聞き、慎重に機体制御をおこないつつアリーナの地面に着地。すると、空間投影モニターに航空時のツインコア同調率が示される。

『だいぶマシになってきたな。本来の力には程遠いだろうが、少なくとも前みたいにオーバーロードを起こす心配はない』

金寺の報告に一夏は一安心した。
また戦闘中にあのようなことがあってはたまったものではない。

『でも、いろいろと不可解な点もあるみてえだな』
「不可解な点？」

そのワードに疑問を感じ一夏が聞き返すと、空間投影モニターに【白式】の基本データが表示された。

一夏にしてみれば理解に苦労するような文字と数字の羅列だが、金寺はこの中からいささか不可解な点を見つけたらしい。

「えっと…何をどう見ていいやら……」
『まずここだ。ここは形態移行に関するデータその他が羅列してある』

彼の言葉と同時、データの羅列の一部が拡大表示される。
そこにはとあるパーセンテージがいくつか表示されている。

『そいつらは一次移行（ファースト・シフト）後の稼動データなんだが…どうも本来の稼動値に到達していない。それどころか…よくよく見てみると一次移行したかも分からん状態なんだ』
「…はい？一次移行したのに一次移行してない的な？」
『そう理解してもいい。最もな表現をするなら「まだ完全に一次移行を終えていない」って感じだ』

「完全に終えてない…」
『まあ形態移行は時間がものを言うからな。こればかりは気長に待つしかねぇ』
通信を通して、溜息が混じった金寺のぼやきが聞こえてくる。
そういえば、この人には【白式】のロールアウト前からいろいろ助けてもらったな、と一夏は思う。
正直、自分関係の事に関してこんなに苦労してもらってよいのか、と申し訳なく思う一夏の心境を知ってか知らずか、引き続き金寺はこれまで調べた【白式】に関する事の報告を続けた。
『あと、【白式】の拡張領域（バススロット）だが、単一使用能力（ワンオフ・アビリティー）の《零落白夜（れいらくびゃくや）》に完全に使い果たされている』
「じゃあ、他の装備ができないって事ですか？」
『その通り。これからは刀一本で戦い抜くんだな』
悲しい現実を思い知らされた上ばっさりと斬り捨てられ、一夏は思わず肩を落とした。
『とはいえ、この《零落白夜》もたいした曲者だ。発動中の《雪片弐型》は、コアによるエネルギー性質のもの全てを無効化する。――通称『バリア無効化攻撃』。』
流石の一夏も、この金寺の言いたい事は分かった。
簡潔明瞭に言い表せば、「一撃必殺」。

一太刀でもまともに命中すれば、恐ろしい威力を発揮するだろう。何せ、ＩＳの防御の肝であるシールドバリアを削り取ってしまうのだから。

そんな事を考えていた一夏は、アリーナの入り口に灰色のＩＳ――訓練機の【打鉄（うちがね）】を装備している人物を【白式】のハイパーセンサーで補促した。

「…箒？どうして…」

『俺が呼んだ』

【打鉄】をまとっている黒髪ポニーテールの彼女は、紛れも無く篠ノ之箒その人だった。

どうやら、金寺がじきじきに呼び出したらしい。

「箒、訓練機の使用許可下りたのか？あれって結構大変で待ちも多いはずじゃ…」

『いや、金寺先生が特別に許可をくれた』

ＩＳの開放回線で聞くと、意外な返事が返ってきた。

『さて、これから二人で模擬戦を行ってもらう。どっちかのシールドエネルギーが尽きるまでな。いいか？』

「わ、分かりました。箒は…」

『問題ない。そのためにここへ来たようなものだ』

そう言う箒の右腕には、【打鉄】の基本装備である日本刀型の近接ブレードが展開されていた。

向こうはやる気満々だ。ならばこっちもそれ相応に相手しなければ。

「そうか、宜しく頼むぜ」

『ああ、こちらこそ』

軽く言葉を交わしつつ一夏と箒はアリーナ中央部に移動。ある程度距離をとり、互いの武器を構える。

『忘れてた一夏。単一使用能力の《零落白夜》は俺が良いと言うまで発動禁止な』

「…分かりました」

金寺のよく分からない指示に軽く返事をしつつ、対戦相手を見据える。

二人がＩＳ同士で戦うのは、今回が初めてだ。剣道では箒が常に優勢だったが、ＩＳ同士となればどう転ぶか分からない。

よって二人とも、とてもワクワクしていた。

一瞬の静寂のあと、

『そんじゃ…模擬戦はじめ！』

金寺の声を皮切りに、近接ブレード片手に同士に激突。

一回目の激突は、鍔迫り合いによる甲高い金属音を生み出しただけだった。

『くっ…！』

つながったままの開放回線から、苦しそうな箒の呻き声が聞こえてくる。

生身の戦闘とＩＳでの戦闘という事で、幾分とその違いを実感しているのだろう。

操縦者としては僅かながら一日の長がある一夏と、操縦するのも戦闘をするのもほぼ初めての箒。

その差は、歴然と現れてくる。

だが、刀を扱うものとしては、長年剣道をたしなんできた箒に軍配が上がる。

その剣術もＩＳの操縦に自然と反映されるため、若干押されながらも箒はほぼ対等に戦っていた。

『いささかなれないが…なかなか楽しいものだな！』

「そりゃよかったぜ！」

一合、二合、三合、四合。

刃同士のぶつかる音が立て続けに響き、両者のシールドエネルギーも徐々に降下していく。

『よし一夏、《零落白夜》の使用を許可する』

「分かった。惜しみなく行くぜ！」

『零落白夜？』

金寺のどこか無機質な声。一夏の気合十分といった感じの声。箒の不思議そうな声。

それらを引き金とし、【白式】の空間投影モニターに一つのウインドウが浮かび上がる。

――――――単一使用能力（ワンオフ・アビリティー）《零落白夜》発動可能。

迷い無く一夏は発動した。

その瞬間、灰色の実体剣だった《雪片弐型》の刃が、眩い純白の煌めきを放った。

敵のシールドエネルギーを削り取る、絶対無敵の刃。

それを手にした一夏は、不思議と猛烈な自信がわいてきた。

もう何も怖くない。恐れる必要は無い。

そう耳元で囁かれているような感じだ。

「――――うおおおっ！！」

力強く雄たけびを上げながら、一夏は箒に向かって猛突。

箒も一夏の気迫を感じ取ったのか、近接ブレードを構えると口元を引き締めて迎え撃つ。

鍔同士がぶつかり合い、その間に箒に生じた一瞬の隙を、一夏は見逃さない。

狙い済ましたように、そこへ向かって《雪片弐型》を振り下ろす。

箒は避けきれないと判断したのか、腕の装甲を掲げてダメージを最小限にしようとしたが、

『――――――なあっ！？』

箒の両目が驚愕に見開かれる。

エネルギー性質のもの――――無論シールドバリアも例外ではない――――を全て無効化する最強の剣をまともに喰らっているのだ。

恐らく、今【打鉄】のシールドエネルギーがすさまじい勢いで削られているのだろう。

勝利を確信し、このまま押し切ろうとして一夏は、

『――――模擬戦終了。箒の勝ち』

『「……え？」』

水をさすように届いた金寺の鶴の一声によって、箒と共に思わず間抜けな声を出していた。

このとき、【白式】のシールドエネルギーはゼロを表示していた。

◆

「俺…どうして負けたんですか？」

すっかり日が沈んだ第三アリーナ。

あれから箒との操縦訓練などを終え、アリーナのカタパルト内で一夏は金寺に質問をした。

その金寺は、現在備え付けのモニターで先ほどの戦闘データに目を通している。

「それだが、《零落白夜》が原因だ」

「どうして…？」

一夏が戸惑うような声をあげると、金寺は一息ついて一夏に向き

直る。

「確かに、《零落白夜》――――もとい《雪片弐型》は、現存するＩＳの武装の中でも最強クラスの武器だ。しかし、それには決定的なデメリットが存在する」

「デメリット？」

「《零落白夜》は、自分自身のシールドエネルギーを糧にして発動する。つまり、発動中は【白式】のシールドエネルギーが《零落白夜》に比例して大幅に削られるんだ」

「それじゃあ…諸刃の剣って事に…」

なんという事だろうか、機体だけでなく、武器も欠陥があった。

先ほど自分が抱いた絶対的な自信が、霧のように消えていきそうになる。

「…正確な表現だな。ようは使いどころに気をつけろ、って事だ。後先考えないで発動すると、自分の身を滅ぼしかねないぞ」

「は、はぁ…」

どうやら自分は、ある種とんでもない機体を授かってしまったらしい。

一夏も金寺同様に、悩みの種は尽きないらしい。

――――と、とある悩みが、一夏の脳裏によぎった。

「あの…先生」

「ん、何だ？」

実は、と言い始めようとして、一夏は躊躇してしまった。

――――【白式】に触れて以降、時々、脳裏に何かのビジョンが浮かぶ。

そんなこと、話したところで信じてもらえるだろうか。

「…どうした？ＩＳ関連だったら、多分答えてやれると思うけどよ」

聞きようによっては、無機質な声かもしれないが、その中にもどこか包み込むような優しさが垣間見えるのを、一夏は感じ取っていた。

よって、言うだけ言ってみる事にする。

「実は…最初に【白式】に触れて以降、時々、脳裏に何かのビジョンが浮かぶんです。なんか戦闘だったり宙に浮いていたり…」

「ビジョン、ねぇ…」

一笑に介されないと思っていたが、腕を組みながら真面目に金寺は考えていた。

「それってさ、具体的にどんなのだったりする訳？」

「えっと…さっき言ったとおり戦闘の様子だったり、あとは宙に浮いていてなんか変な物体を打ち落としていたり…でもそれ、傍から見ているんじゃなくて、まるで自分がやっているようなもので…でも、どれも二秒も見えないんです」

少なくとも、あれは第三者の目線ではなく、それを実行している者の目線だったと思う。
そうでなければ、あの不気味なリアルさは表現しようが無い。
暫し考え込んでいた金寺は、一つの可能性に思い当たり、ふと顔を上げる。
「多分、お前が見たそのビジョンとやらは、【白式】のツインコアが関係しているな…」
「やっぱり、理由は【白式】に？」
「それ以外に可能性がねえ。一応、お前には伝えておくが…」
そこで金寺は言葉を区切り、ふうと一息はいてから、一夏の目を見据える。
一夏も金寺が重要な事を言おうとしていることを理解し、真剣な面持ちで聞くことにした。
「――――【白式】に搭載されている二つのコアは、【白騎士】と【暮桜】のものだ」

「…え？」

一瞬、金寺が何を言っているのかわからなかった。

【白騎士】と【暮桜】。

ＩＳを動かせるようになるまでそういった事柄に疎かった一夏ですら、その機体名は知っている。

【白騎士】。

八年前、世界中のミサイルがハッキングされその中の一部が日本に向かっていったが、その全てを撃ち落とした一機の純白のＩＳ。

ちなみに、この一件は「白騎士事件」として語り継がれ、北欧に現れて戦争を数十分で鎮圧した黒いＩＳと共に、ＩＳの性能を全世界に知らしめた存在になっている。

【暮桜】。

第一回、ＩＳ世界選手権「モンド・グロッソ」にて姉――織斑千冬が駆り、見事格闘部門及び総合部門で優勝を果たした機体であ

る。

それらのコアが、今現在一夏の機体である【白式】に搭載されているというのだ。

驚くほか無い。

「でも、どうして…」

「俺が知るか。篠ノ之束がこいつを改造したから、あいつに聞き出すしかない」

「先生、束さんのこと知ってるんですか？」

少々気になって一夏が聞いてみると、「一応な」とだけ短い返事か返ってきた。

どうやら、あまり話したくなかったらしい。

「話を戻すぞ。恐らくお前が見たそのビジョンは、【白騎士】と【暮桜】が実際に経験した事なんじゃねえか？お前の頭ん中に流れ込んできたのは良く分からんが、コアがそれらを覚えてたのかも知れん」

金寺の話を黙って聞く一夏は、いまだに彼の言ったことが信じられないようだった。

何より、実感がわかない。

【白騎士】と【暮桜】という、ＩＳの歴史上においての英雄とも呼べる存在のコアが搭載されている機体を自分が駆るというのがいまいち実感に欠けた。

そんな一夏の心境を理解したようで、金寺はそっけなく言う。

「まあ、これが事実だ。…束が何考えてんのかは知らねえが、お前はそいつらを託された、という事になるかもな」

ツインコア。

【白騎士】と【暮桜】の系譜。

ＩＳを超越するであろうＩＳ。

――――――未知なる、力。

――――――俺は、託された。

その現実が、一夏の身に重々しくのしかかってくる。

――――――果たして、その力をしっかり使いこなせるのだろうか。

そんな不安が、心の内を瞬く間に占めていく。

「まあ、今は大げさに気負う必要は無いさ。――――――安心しろ。もしお前が力の使い道を間違えるような事があれば、強引に直してやるからよ」

やけに重みがある金寺の一言に、一夏はその不安が少しかき消されたような気がした。

――――――この人なら、絶対に力の使い方を履き違えない。

何故か、そう確信がもてたからだ。

会ったときから、金寺が内に秘めているであろう強さを一夏は感じ取っていた。

それは、姉の千冬とは違いながらも、それと同等な“何か”を持っていた。

自分の中で最強の存在である姉の千冬が、彼を認めるような発言をしていたのを思い出す。

今までは、千冬以外に尊敬できる人物が見当たらなかったが、どうやら見つかりそうだった。

ふと、金寺が携帯端末に目を通す。

それにつられて一夏がカタパルト内の時計を見てみると、「６：３９」と表示されていた。

もう夕食の時間らしい。

「…どうする、飯食いに行くか？」

「じゃあ、お供させていただきます」

そんな会話をしつつ、二人はカタパルトを後にし、カタパルト内の照明がおちる。

二人の間には、確実に信頼関係が結ばれつつあった。

2．白式（後書き）

さて、【白式】のツインコアですが…

分かっているとは思いますが、「機動戦士ガンダム００」の【ダブルオーガンダム】の「ツインドライヴシステム」が元ネタです。

どうしてこのようなものを取り入れたかというと、度々エネルギー切れを起こす【白式】を見て、

コア二つ搭載すりゃいくね？

そう思ったからです。

極めて単純な思考かもしれませんが、そのような事から本作品オリジナルの【白式】は生まれました。

ちなみに、今の所外見は原作とほとんど変わっていません。
しいて言えば、両翼にコアが内蔵されていて、そこにＧＮコンデンサーのようなものがくっついているような感じです。

ちなみに、今日東京ＭＸでガンダム００の再放送がありました。
セカンドシーズン２４話、ダブルオーライザーのトランザムバースト発動回です。

改めて、人の作り出したものに感動しました。

3．全力（前書き）

一夏ｖｓセシリア、決着。

3．全力

◆

二日後、第二アリーナで、ついに一年一組クラス代表決定戦の再戦が行われる事になった。

両者とも万全であり、現在アリーナ上空にて自身のＩＳを身にまとい向かい合っている状況である。

「どうやらそっちも準備万端みたいだな」

『そちらも同様みたいですわね…あえてもう一度聞きますが、手加減は無しでいいのですか？』

「何度聞かれようと答えは同じだぜ」

『そうでしょうね。わたくしもその答えを期待していましたわ』

ふふっと、大人びているいつもと比べて幼さがある笑みを浮べたセシリア。

対して一夏は、既に右拳に意識を注ぎ、試合開始後のビジョンを思い浮かべている。

そして、

『それでは両者、試合を始めてください』

アナウンスと同時、セシリア、一夏ともに自分の主武装――――

《スターライトｍｋ?》と《雪片弐型》を展開。

「先制攻撃を――――」

『こちらが仕掛けますわ！！』

刀の刃を純白に煌めかせ、真正面から飛び込もうとした一夏を、セシリアの《スターライトｍｋ?》による早撃ちが妨げた。

「くそっ！」

『わたくしもずいぶんと舐められたものですわね…！』

軽く舌打ちした一夏は、立て続けに飛来する青白い光条から直撃を避けるため、回避行動に専念する事にした。

――――――やはり、無理だったか。

そんな考えが脳裏によぎる。

一夏は試合開始後、速攻でセシリアの懐に飛び込んで先制攻撃を食らわそうとしたのだが、敵の早撃ちの方がすばやかったため失敗に終わった。

やはり、代表候補生の実力は伊達ではなかったという事だろうか。

即座に気持ちを切り替え、一夏はセシリアとあまり距離をとらないように迫り来る射線を避けつつ、攻撃の機会を見つけようとした。

◆

一夏が先制攻撃を仕掛けようとした事は、セシリアにとって想定内だった。

【白式】が近接特化ブレード《雪片弐型》を主武装にする以上、それを投擲でもしない限り近づかなければダメージを与える事はできない。

よって、隙あらば一夏が自らの懐へ飛び込んでくる事は容易に想定できたのである。

そしてそのために、セシリアは先の戦闘からの空白間のほとんどを、対一夏戦へ向けた特訓を単独で行っていた。

第一に、《スターライトｍｋ?》の展開である。

先日の授業で千冬にも指摘されたとおり、どうも自分はイメージ付けのために《スターライトｍｋ?》を横に構えつつ展開する事が多かった。

しかしそれでは、速攻で懐に飛び込まれた際に対処する事ができない。

よって、まずセシリアは《スターライトｍｋ?》の展開を、以前より早くかつ前方にできるようにしようと特訓を重ねてきた。

これに関しては、特訓の成果がしっかりと現れたようである。
こうして【白式】の先制攻撃を防いだセシリアは、現在一定の距離を置きつつ回避に専念している――様に見える一夏へ向けて《スターライトｍｋ？》による狙撃を行っていた。

実際のところ、セシリアは一夏が回避に専念しているとは思えなかった。

その証拠に、セシリアが距離を取ろうと動くと、それにあわせて【白式】も動き、距離を離されないようにしている。
これは、一夏が回避しつつ隙を突いて攻撃しようと思っている――そうセシリアは分析していた。

以前のように、自身の奏でる円舞曲で踊らせようとしたが、どうやら彼はそれを拒否しているらしい。

ならば、強引にでも躍らせるべきだ。

「――――行きなさい、ティアーズ！」

その掛け声とともに、腰背部のバインダーが四つに分離。遠隔操作可能の無線式自立機動ビット――《ブルー・ティアーズ》をいっせいに展開する。

囲むようにビットを配置し射撃を行ったが、一夏は即座に反応して、見事に直撃を回避した。

内心セシリアは舌打ちをする。

どうもこのビットの思考制御は、難しくてなかなかものにできない。

この《ブルー・ティアーズ》は、操縦者の意思による操作装置――――通称、イメージ・インターフェースによって制御される。

それゆえ、かなりの集中力が必要となるので、先の戦闘で一夏に動きを読まれたようにどうも操作が単調なものになってしまう。

ビットの制御に全神経を注げばそのような事もなくなるだろうが、ビットの操作に集中しすぎれば、かえって敵の格好の的になってしまう。

だが、

（もうそうするしかありませんわ…！）

意を決したセシリアは、狙撃の機会を狙う事をやめ、ビットの操作だけに全神経を注ぐことにした。

体からやや力を抜き、目をつぶって意識をビットに注ぐ。

それにあわせて、ビットの動きも先ほどと比べて複雑になってきた。

死角だけを狙うのではなく、あえて真正面から撃ったり、または撃たずに移動したり。

動きを不規則かつ複雑にして、一夏をかく乱していく。

何故か頭の中に、必死になって《ブルー・ティアーズ》の射線をかいくぐる一夏が浮かぶ。

それが今現在の状況で、【ブルー・ティアーズ】がそれを伝えてくれていると、何故かセシリアはそう断言できた。

そしてセシリアは、一夏を「狙う」のではなく、一夏を「誘い出す」方に転換する。

あえて彼の進路に光条を放ち、一夏の動きを制限していく。

その間のセシリアの集中力は、すさまじいものであり。

まるで静寂を保つ水面のように、透き通っていた。

狙うのは、彼が自らの距離に入った一瞬。

意識を集中という名の思考のうねりに静めて、永遠とも、一瞬ともとれる時間がすぎる。

そして。

――――――“それ”は、水面に一滴の雫が落ちたように、突然訪れた。

「――――――そこですわっ！！」

即座に、射撃体勢に移行。

半瞬にも満たない速さで、《スターライトｍｋ？》を構え、トリガーを引く。

その銃口から放たれた青白い一条のビームは、寸分狂わず【白式】の右脚に命中した。

『ぐあああっ！！』

シールドバリアのおかげで【白式】の装甲が爆発するような事は無かったが、直撃したせいか確実に衝撃を与えたようで、一夏は叫び声をあげながらやや後ろに吹き飛ばされた。

その隙を見逃さない。

立て続けに《スターライトｍｋ？》のトリガーを引き、一夏めがけてビームを放っていく。

一夏も何とか体制を立て直したようで、いくつかの光条は直撃を避けたものの、完全によけきれる事はできなかったようだった。

このまま押し切るべく、セシリアは連続でトリガーを引いていく。

すると、一夏は何か意を決したようにこちらへ表情を向けると、【白式】の出せるであろう最大スピードで突撃してきた。

彼が何を考えているのか見当もつかなかったが、明らかにその動きは直線的だ。

これなら確実に自分の狙撃が命中する。

そう結論付けてセシリアは狙撃を続行する事にした。

銃口から迸る青白い光条は、一夏に狙いを定めてまっすぐ向かっていく。

一夏は避けようとしていない。

完全に直撃コースだ。

しかし次の瞬間、セシリアは信じられないものを見たかのように目を見開いた。

一夏は、ビームを斬っていた。

ありえない光景だったが、確かに一夏はその右手に持つ“刃が純白に煌めいた刀”で、ビームの射線を正面から斬り裂いていた。

明らかに常識から逸脱している事態に、驚きを禁じえない。
そのせいで、完全に空白が生まれてしまった。

気づけば、一夏は今にも自分の目前へ迫ろうとしている。
ビットで迎撃しようとしたが、それでは遅い。

「くっ…《インターセプター》！！」

とっさに近接ショートブレード《インターセプター》を展開しようとしたが、既に一夏はセシリアの懐に飛び込んでいた。

残念ながら、《インターセプター》の展開速度だけはどうにも速くならなかった。

「ここは俺の距離だっ！！」

そう叫びつつ、一夏は【ブルー・ティアーズ】の胴へ純白の刃を密着させる。そのまま、セシリアの背後へ斬り抜けた。

シールドエネルギーを無効化してしまう刃の斬撃をまともに受け、思わず苦痛の声をあげてしまう。
それと同時に、ほぼ満タンに近かったシールドエネルギーが半分以下になってしまった。

驚愕に目を見開きつつも、一夏が背後から二撃目を加えようとしているのを確認したセシリアは、何とか《インターセプター》を展

開し、その刃を辛うじて受け止める。
同時にビットを操作し、一夏へ向けてその射線を定める。

それに集中したせいで、刀で弾かれてしまったものの、《ブルー・ティアーズ》の光条の一つが一夏に命中した事もあり、三撃目を喰らう事は無かった。

とりあえず距離をおき、敵と向かい合う。

「ビームの射線を、斬る、だなんて……無茶苦茶、します、わねっ……！」

息絶え絶えになりつつも、自然とそんな言葉が出てきた。
それが呆れているからなのか、あるいは彼に対する賞賛なのか。

今のセシリアは、そこまで判断できなかった。

◆

『ビームの射線を、斬る、だなんて……無茶苦茶、します、わねっ……！』

息絶え絶えのセシリアにそう言われ、当の一夏は苦笑を浮べた。

そりゃそうだろうな、と本人も思う。

あの発想は、ビームの射線をよけつつどう反撃に転ずるかを考えたときに、思いついたものだ。

【白式】の単一使用能力《零落白夜》は、エネルギー性質のものを全て無効化する。

ともすればその対象はシールドバリアに行きがちだが、無論ビームもエネルギー性質のものなので、打ち消す事が可能である。

それに一夏は着眼し、《雪片弐型》でビームの射線を斬り裂きつつ接近し、自分の距離へ持ち込もうとした。

結果、まだ敵は健在で、シールドエネルギーを全て削り取ることはできなかったようだが、それでもかなりのダメージは与えられたはずだ。

しかし、一回実行した以上、セシリアはそれを警戒してくるだろう。

おまけに、【白式】もシールドエネルギーが残り少なく、《零落白夜》は後一回ぐらいしか発動できない。

恐らくは、次が最後のチャンス。

このとき、一夏の手元に残っているカード――手段は、かなり限られていた。

そのまま飛び込むか、スピードを生かしつつかく乱してから飛び込むか、敵の動きにあわせつつ機会をうかがうか。

一夏が選んだのは、最後。

セシリアの動きを伺いつつ、隙あらばその懐へ飛び込む。
そのために、次のセシリアの動きを待った。

当然、いまだ健在である四基の《ブルー・ティアーズ》にも、その警戒の目は行き届いている。

そして、セシリア――――――ではなく、《ブルー・ティアーズ》が動いた。
先ほどまでは二人を囲むように空中で停滞していたが、それらが一夏を狙って青白い光条を迸らせる。

直撃を避けながら慎重に回避し、徐々にセシリアに向けて距離を近づけていく。
どうやら彼女も一夏の意図に気づいたらしく、スラスターを噴かして後退しようとした。

そこへ、一夏は飛び込む。
まさかこの状況で懐に飛び込んでこようとするとは思っていなかったらしく、セシリアは驚愕を露にしていた。

これが、もう一つ一夏が引いたカード「意外性」。

何を言おうと彼女と自分の力の差は歴然だ。最早、形などこだわっていられない。

それに――――――

「これがっ…俺の全力だあっ！！」

《零落白夜》を発動し、迫り来る光条を斬り裂き、セシリアに肉薄。

純白に煌めいた刃を、再び押し込もうとして、

「――――させませんわ！！」

腰部アーマーから放たれた二基の弾道ミサイルが目に入る。

しかし、それをかわすつもりは毛頭無かった。

かわす事ができないわけではなかったが、そうすれば確実に、彼女のもとへたどり着く前に《零落白夜》のデメリットによってシールドエネルギーが底を尽く。

――――言ってしまえば、どの道負ける可能性が高い。
ならば、たとえ愚直にでも立ち向かって、己の全力を出し切るべきだ。

乱暴に《雪片弐型》を振るい、ミサイルを打ち落とし。
そして、一気に距離がつまり、ついに《雪片弐型》の切っ先が、【ブルー・ティアーズ】をとらえる。

同時、互いの懐で爆発が起きた。

原因は、セシリアが最後の最後に放った二基の弾道ミサイルだった。

自分に及ぶ危険を踏まえていても、最後に放った一撃。
これが、セシリアの全力だったのだ。

その一撃が両者に与えたダメージは大きく、セシリアの【ブルー・ティアーズ】は、僅かながら《雪片弐型》の切っ先が触れた事も重

なって、エネルギー残量が風前の灯火となる。

そして一夏はというと。

「くっ…そ……やっぱ……無理だった……か……」

《零落白夜》によってシールドエネルギーが底を尽きたのと同時に、弾道ミサイルの一撃を喰らったため絶対防御が発動せず、そのダメージが生身にも及んでいた。

ダメージに耐えられなかった【白式】が光子となって消滅し、自分の体が重力にしたがって落下していくのが分かる。

遠ざかる意識の中で、一夏はある事を考えていた。

（まだまだだなあ、俺…でも、これから訓練していけば、きっと強くなれる。千冬姉も、金寺先生もいるし…）

気づけば、自分は先の――――未来のことばかり考えていた。

それは、自身の未来に希望を持っているからに他ならない。

千冬、箒、セシリア、そして――――――――金寺。

幸いにも、一夏の周りには自身の手本になりそうな人物が結構いる。

ならば、彼ら彼女らに負けないように強くなって。

（絶対……超えてやる……）

心の中でそう呟いたとき、一夏の意識は闇に消えた。

3．全力（後書き）

この【白式】ですが、どちらかというと燃費は悪いほうです。

ツインコアでも、零落白夜の使用はエネルギーを著しく消費してしまうので。

それに、完全に（以下自重）

4．理想と願い

◆

目が覚めた一夏の目の前にあったのは、白い天井だった。
なんとか感覚を取り戻し、体を起こしてみると、そこは保健室だった。

どうやらあの後、自分は保健室に運ばれたらしい。
ベッドから体を起こした時に痛みなどがなかったことから、きっと自分はミサイルが爆破した衝撃で気を失っていただけなのだと、一夏は推測してみる。

次の瞬間。

「一夏!!無事か!?」

すさまじい勢いでドアを開けた箒が、一夏のもとへ駆け寄ってきた。

吃驚してベッドから飛び上がりそうになってしまったが、それが自分を心配していたからこそだと思うと、少し嬉しくなるし、申し訳なくも思う。

「箒…悪いな、心配掛けちまって」

思わず苦笑を浮かべると、箒は少々ムッとした表情になった。

「心配など…まったくお前はあのような状況で…」
「ははは…で、あの後俺とセシリア、どうなったんだ?」
とりあえずあの後の出来事を聞いてみた一夏だったが、その内容は驚嘆に値するものだった。

なんでも、突如としてどこからか現れた金寺が、先に落下してきた一夏を受け止めて地面に下ろした後、同じようにＩＳが解かれて落下してきたセシリアを、しっかり受け止めたというのだ。
そしてその間にかかった時間は、五秒にも満たなかったらしい。

その場にいた者全員が驚きを隠せず唖然としたと、箒は説明した。
「あの人って…もしかして人外だったり?」
「私も一瞬そう思った…何食わぬ顔で実行していたからな」

二人そろって苦笑。
もしかしたら自分たちは、ある種とんでもない人物に会ったのではないかと思う。

するとドアが開き、別の訪問者を招きいれた。
入ってきたのは千冬と、彼女に同伴しているセシリアだった。

「目が覚めたか…まったく、冷や冷やさせおって」
「一時どうなるかと思いましたわ…」

二人とも、一夏のあの特攻に呆れていたようだった。

実際あれしか効果的な攻撃手段は無かったのだが、特に言い訳等をする気にはならなかったので、ばつが悪そうな笑みを浮べるだけにとどめた。

「でも…貴方の今の全力、しっかりと受け止めましたわ」

「そうか。…サンキューな。セシリアの全力も、しっかり受け取ったぜ」

あれが、紛れも無い今の一夏の全力だった。

――――だがそれも、“今”の話。

――――いつか今の自分の全力も、彼女等の全力も、全て超えてみせる。

一夏には、その決心がついていた。

「一応、今日一日安静にしておけ。試合の結果などについては後日、な」

それだけ言うと、千冬は背を向けて保健室を後にする。

セシリアも、一夏と箒に深くお辞儀をして、同じように保健室を後にしていった。

ドアが閉まったのを確認した一夏は再びベッドに横になり、箒はベッドの近くにある椅子に座った。

二人きりの保健室に、静寂が訪れる。

「…一夏」

「ん？」

「その……二人きり、だな」

「…ああ、そうだな」

一夏にやや赤くなった頬がばれないように、若干顔をそむける箒。

これは、最近になって一夏を一人の異性として意識し始めたからこそなのだが、当の本人は考え事をしているようで、たいして気にも止めなかった。

静寂のあと、暫くしてから一夏はおもむろに口を開く。

「…箒」

「んっ…なんだ？」

「…俺…超えてみせる」

無意識にそう出た一夏の一言に、箒は思わず首を傾げた。

それに構わず、一夏は言葉を紡ぐ。

「今の俺も、今の箒も、今のセシリアも、今の千冬姉も…絶対に越えて、もっともっと強くなってみせる」

「――――で、その理由は？」

一夏の言葉に続くように、保健室に新しい来訪者が現れた。

金寺龍輔である。

「金寺先生…」
「細かい話は後。で、何で強くなりたいんだ?」
先ほどの言葉を聞いたものなら至極真っ当な質問をしつつ、金寺は一夏のベッドに近づく。
一夏はうつむき、少し考え、自然とその理由を口にした。
「今のままじゃ、俺自身が満足できないし……それに、もしも俺らの身の回りに何か一大事があったとき、それからみんなを守れるようになりたいんだ。…昔千冬姉が、俺を守ってくれたように」
実際のところ、一夏はそこまで深く考えていなかった。
それでも、自然とそのような事が口から出てきたという事は、本当にそう思っているからなのだろう。
強く、誇り高く、何かを守れる存在。
それを、一夏は求めていた。
金寺は暫しいつも通りの無表情だったが、口元を僅かに吊り上げ、くるりと回れ右して、ドアの方向へ歩んでいく。
「――――そうか、だったらそれでいいんじゃねえの」
いつも無表情な彼が、このときばかりは笑みを浮べたような気がした。
悠然とその場を去っていく金寺を見ていた一夏はドアが閉まるのと同時、ふと呟く。

「…助けてもらった御礼するの忘れてた…」

◆

その日、すっかり夕日が沈んでいても、一年一組副担任金寺龍輔先生の仕事は、終わっていなかった。

といっても、その大半が最早彼にとって趣味と変化しているのだが。

最初に済ますのは、自分が行った授業についての提出レポートのまとめ、宿題の整理、管理など、主に授業に関すること。

これに関しては、特別面白味を見つけることができなかったため、早目に済ますことにするのだ。

『面倒臭いことは早く終わらせるに限る』、これが金寺の持論の一つである。

ちなみに、クラスに関することは、ほぼ千冬が一括して担当している。

そうして余計な教務を終わらせた金寺が始めたのは、【白式】や【ブルー・ティアーズ】の戦闘データ採取。

金寺にとって、これほど奥が深いものはない。

自分が知ったころから、ＩＳは発展していっている。彼の興味が尽きることはないのだ。

【白式】のツインコアの同調率及び両機の稼働率をみている最中、先ほど保健室で一夏が口にした言葉が脳裏によぎった。

『今のままじゃ、俺自身が満足できないし……それに、もしも俺らの身の回りに何か一大事があったとき、それからみんなを守れるようになりたいんだ』

純粋に、羨ましいと思う。

そう金寺が思うのは、とくに後者だ。

彼にとって、守るべき存在がいる、というのが自分と大きく違い、そして羨ましかった。

何らかに羨望の意を向けるのは自分らしくないとは思うものの、自分には無いものを持っている彼に対し、そういう感情を持ったことは確かだ。

自分にも、そういう存在がそのうち現れるのだろうか。

現れたとしたら、彼のように決意する事が出来るのだろうか。

柄にも無い事を考えながら、金寺は背もたれに体重を預けた。

4．理想と願い（後書き）

地の文って難しいです。

1．再会前（前書き）

いよいよ中国のあの子が登場？

1．再会前

◆

入学式から約三週間後の、四月下旬。

日が沈みかけ、空が夕日のオレンジ色一色に染まっている頃、金寺は一夏と肩を並べてロビーへ向かう渡り廊下を歩いていた。

この日は二日ぶりに、【白式】のデータ採取、ツインコアの安定稼動調査などを終えたところだった。

ちなみに、この日はセシリアが入ってきたりして結構ギャラリーに騒がれたりしている。

「でも、どうしてこうなるかなぁ…」

「んな事言ったって仕方ないだろ？こうなった以上さ」

「いや、分かってますけどね？筋も通ってますけどね？けど…」

朝からずっとこのような調子で愚痴を吐く一夏に、金寺は苦笑するほか無かった。

この日は、彼にとって今後の学園生活を左右するような事が起きた以上、仕方が無いとは思う。

「それに、なんか夕食が終わったらパーティやるとか言い出す始末ですよ？」

「それぐらいはいいだろ、一応お前の事祝おうとしているんだし。…ほどほどにしておけよ？」
「ほどほどにする前に俺が持たないと思うんで大丈夫ですよ」
「なんだそりゃ」
互いに苦笑。
この二人だが、最近になってかなり親密な間柄になってきた。
金寺が一夏のクラスの副担任であり、彼のＩＳの専属整備士であることからも当然といえば当然だが、学園内で数少ない――――たった二人の若い男であることも、その理由だろう。
この状況に、一部の俗に言う“腐女子”がよからぬ妄想を脳内で繰り広げたりしていたが、決してそのような関係ではない。
むしろ、気心知れた友人関係のようなものだ。
「そんじゃ、戦場のほう行ってきます」
「表現が大袈裟すぎだろ…もう一回言うけど、ほどほどにしておけよ」
そう言葉を交わしつつ、金寺は職員室へ、一夏は食堂へと向かう。

◆

同時刻、ＩＳ学園正面ゲート前。

「ＩＳ学園…ふぅーん、ここがそうなんだ…」

そこには、ボストンバックを片手に持った一人の少女がいた。
栗色の髪をツインテールにしており、体格は小柄。パッチリした眼も相まって、どこか幼さを感じさせる。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ？」

歩を進めつつ、彼女は上着のポケットに突っ込んでくしゃくしゃになったメモを取り出す。
そこには校舎の見取り図が書いてあるのだが、いかんせん大雑把すぎて分かりにくかった。

「本校舎一階総合事務受付……って、どこにあんのよ」

思わずメモに向けて愚痴を吐いた転入生であるこの少女だが、そうしたところでこの状況を打開できるわけではない。

結局、学園の関係者に会えたら僥倖だと思いつつ、自力で探す事にした。昔から考えるよりも行動を優先する、彼女らしい選択であ

る。

そもそも、彼女が転入生なのは理由があった。

中学二年時まで日本にいた彼女は、両親の事情で祖国――――中国に帰り、その後ＩＳ適正が高い事が判明して軍隊に入り、持ち前のセンスで国家代表候補生にまで上り詰めた。

今年で１５歳――――高校一年生になる少女は、今年からＩＳ学園に正式に入学するのだが、諸事情により、それが遅れてしまったのだ。

平たく言えば、軍上層部の不祥事と、一ヶ月前まで国内の一部で起きていた反政府デモが原因である。

とはいえ、少女もそこまでこのＩＳ学園に入学を望んでいたわけではなく、とりあえず退屈だった日常から抜け出したかったし、何より数ヶ月前に突如ニュースで流れた『世界初のＩＳを扱える男子』である幼馴染にも会えるだろうから、と、そんな軽い気分だった。

――――アイツ、女だらけの環境に放り込まれてどうしてるだろうなぁ。

――――案外、もう女の一人や二人作ってたりして。

そんな、半ばどうでもいいことを考えていると。

「――――――ん？」

離れたところに、不思議な二つの人影を見つけた。
夕日のせいか、影はやけに大きく見える。

だが、彼女の心何かがに引っかかっていた。
その影は、どう見ても女性のものとは思えない。

「誰だろう…この学園の人かな？」

そうならばありがたい。何せ自分はこの学園内で本格的に迷い始めている。
そう思いつつ、その人影に近づこうとすると。

「――――仕方ないだろ？こうなった以上――――」

――――――――――――！

心臓が、止まった。

一瞬、本気でそう思った。

当たり前だ。
聞こえてきたのは。

低く、重く、それでもどこか人を惹きつけるような声。

二度と聞くことが無いと思っていた声。

また会いたいと、心の底から思っていた青年の声。

その声の主は――――――

「金寺…龍輔…？」

一人の生徒と肩を並べて歩いていた青年――――――金寺龍輔を、少女――――――鳳鈴音（ファン・リンイン）は、ただ見ていることしか出来なかった。

1. 再会前（後書き）

金寺はいつの間にフラグを建築していたみたいです

2．それぞれの夜（前書き）

ギャグパートは正直苦手です…

2．それぞれの夜

◆

金寺の姿をその眼で確認してから数分後。
目的地の総合事務受付は、その直後に見つかった。

先ほどの衝撃を忘れられないまま、鈴音は受付を済ます。

「ええと、それじゃ手続きは以上で終わりです。ＩＳ学園にようこそ。凰鈴音さん」

極普通の営業スマイルを浮べる事務員の言葉も、今の鈴音には届かない。

「えっと…ひとついいですか？」
「どうぞ、どのような事柄を？」
「あの…」

その名前を口に出そうとした瞬間、喉元が詰まりそうになる。

恐らく、ずっと会いたいと思っていた青年に会って、様々な感情がごちゃ混ぜになっているのだろう。

それを一旦、鈴音は飲み込む。

「…金寺龍輔、って人…この学園に、います…か？」

その問いに事務員は少なからず驚いたようだったが、笑みを浮べつつ返答する。

「ええ、いますよ。今年から学園所属になっています。…もしかして、お知り合いですか？」

「あ…まぁ、そんな感じで…」

得体の知れない恥ずかしさを抑え込みながら、何とか鈴音は言葉を搾り出す事が出来た。

こうして、編入手続きを終えた鈴音は、ただ今指定された学生寮の自室に向かっているのだが、昂揚感を抑えきる事が出来ず、軽い足取りで移動していた。

「会えた…のかな？でも同じ場所にいるんだからきっといつでも会えるよね…！」

感情の奔流が、ものすごい勢いで流れているのが分かる。

本当に、この昂揚感は抑える事が難しそうだ。

一年近く想い続けてきた自分の中の“彼”に対する想いが、一段と大きくなってきているのを感じる。

「龍輔…」

凰鈴音、１５歳。

人生の中で一度きりの、初恋を自覚した一夜であった。

◆

同じ頃、夕食後の自由時間。

寮のロビーにて、とあるパーティが催されていた。

「織斑君、クラス代表決定おめでと～！」

その名も、「織斑一夏クラス代表就任記念パーティ」。

クラッカーの音が鳴り響き、ぱらぱらと拍手が上がる。

一体何故、先の戦闘でセシリアに敗れた彼がクラス代表になってしまったのか。

その理由は、この日の朝のＳＨＲにある。

「クラス代表の件だが、織斑一夏に決定した」。

突如、教壇に立っている金寺がそんな事を言い放ったのだ。

どうせ代表はセシリアに決まっただろうから、自分には関係ないことだ、と聞き流そうとしていた一夏は吃驚仰天。

どうして俺なのか、と問い詰めたところ、セシリア本人が「わたくしが辞退したからですわ」と言った。

おまけに、「いいんじゃねえの？実戦経験をつむにはぴったりだし、悪い事ばかりじゃない」と金寺が言い出す始末。

まあ確かに、クラス代表となれば実戦経験も増えるだろうが、金寺の一言は、明らかに先日保健室で言った自分の言葉が反映されていた。

そんな訳で、今現在一夏は多くの生徒――全員女子に囲まれている状況の元、テーブルを二つほど独占している小さいパーティ会場の中心にいた。

本来、そのテーブルの周りのいすに座れる人数は限られているの

だが、あちらこちらから人が集まっているため、端から見れば一夏が女子に囲まれているように見えるのだ。

とはいえ。

（どうしてこうなった…？）

そう思わずにはいられない。

確かに、戦闘中はそういうのも忘れてかなりヒートアップしたりしてしまったが、まさかそれらがこのようなことになるとは。

色々理不尽な気もしなくないが、こうしてなってしまった以上仕方が無い、と思いつつ、右手に持っている、レモンとビタミンCをテーマとしている某炭酸飲料の入った紙コップを、口につけて傾けた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

満足そうに言う一組の女子に対して、何故か他クラスの女子が相槌を打っていた。

「人気者だな、一夏」

横に座っている箒が、そんな事を言ってくる。

「ん？まあクラス代表なら、そんなもんじゃないか？」

若干不機嫌そうな彼女に対し、何気なくそう返した一夏だが、この場に副担任の青年がいれば確実に「無自覚すぎだろうが」と言っているだろう。

そんな一夏たちを、ふと閃いた光が覆い尽くした。

「はいは～い、新聞部で～す。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました～！」

光の発生源は、そう名乗る生徒の持つ、一眼レフカメラだった。

右腕に『新聞部』とかいてある紋章をつけている事からも、眼鏡を掛けている二年生の彼女が新聞部員である事は一目でわかる。

その彼女が、一夏に懐から取り出した名刺を渡した。

そこには丁寧に、『新聞部長　黛薫子』とかいてある。

「ではではずばり織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！！」

眼をキラキラ輝かせ、ヴォイスレコーダーを一夏に向けながら、薫子はそう聞いてくる。

正直、こう言うのは苦手だ。

何か面白味があることでも言うべきなのだろうが、生憎一夏はそう言うのが得意でないので、

「う～ん…まあ、代表として精一杯頑張ります」

このような、極めてスタンダートな一言にとどまった。

対して、薫子は若干その答えに不満があったようで、つまらなそうな顔をしてくる。

「えー、世界で初めての男性ＩＳ操縦者なんだから、もっといいコメントちょうだいよ～。世界中の女は俺の雌奴隷にしてやる、とか！」

「すいませんね、そういう肉食キャラじゃないんで」

荒唐無稽な冗談、としか言いようが無い薫子の一言に、極めてぶっきらぼうに一夏は返した。

なのに、

「一夏さんっ！？まさか、本気でそのような野望を…！？」

「お前はいつの間に…ふっ、ふしみだらだっ！！」

「何故そこのお二方は真に受けていらっしゃるのでしょうか！？」

セシリアと箒は冗談だと思っていないらしく、若干顔を紅くしつつそんな事を言い始めた。

一体どうしたらあれをまともに受けるのか。それ以前に、箒は自分がそういうキャラクターではない事を知っているはずではないのか。

一夏にしてみれば、日頃の授業以上に理解が及ばない。

これは、二人の心境が年頃の少女特有のものへと徐々に動いていっているからこそなのだが、誰一人気づいてはいないようだ。

「まあ、今のは冗談だから面白おかしく捏造しておくね～」

「やめてください。俺の社会的立場が危ないんですけど！」
嫌な予感しかしなかったので、冗談抜きで止めにかかった。
「世の中のジャーナリズムなんて、そんなものよ。一夏君」
「いやいや例えそうだとしても、それを肯定しちゃダメでしょう！」
「どこかの国には、政府からの圧力を受けて捏造をしつつも人気を誇る某予言者新聞とか――――」
「そういう他作品関連のネタ禁止！」
「とにかく奇麗事なんて、この世には存在しないの！」
「この世の真理にまで踏み込まないでください！せめてジャーナリズムだけに！」

なんというか、割と本気で突っ込みだけは上手くなりそうな気がしてきた。

「じょ、冗談だったのか…でも、本当でも良かったような…」

隣で箒がそんな事を呟いていたもの、聞かなかった事にした。

続いて、薫子はセシリアにもインタビューする。

「よかったらイギリスの代表候補生でもあるセシリアちゃんのコメントもちょうだい」
「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

そうは言うものの、セシリアは満更でもないようで、よく見ればいつも以上に髪型が整っている。

コホンと軽く咳払いをし、姿勢を整えた後、セシリアは口を開く。

「では先ず、イギリス代表候補生でもあるわたくしがどうしてクラス代表を辞退したかというと――」

「あぁ、ごめん。長くなりそうだからいいや。理由は織斑君に惚れたからってことにしよう」

さっきからよくよく聞いていれば、この人はジャーナリズムの欠片もない気がする。

何故このような人が新聞部の部長なのか、こちらも一夏は理解が及ばなかった。

「なっ、な、ななっ!?……で、でも、そのような理由でもいいような……」

顔を赤らめ、両手を両頬に当てて恥ずかしそうにするセシリア。

正直なところ、こちらに至っても満更でもないらしい。

幸か不幸か、最後のほうの言葉は一夏の耳に入らなかった。

「それじゃ、最後に写真撮ろうか。ああ、セシリアちゃんも一緒に、写真いいかな?」

薫子が一夏に加え、セシリアにも写真撮影を要求すると、当人は喜びを顔全体にあらわしつつ問う。

「え……二人で、ですの？」
「注目の専用機持ちだからねえ。そうだ、握手とかしてるといいかもねえ」
「そっ、そうですか……あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」
「そりゃもちろん。ささ、立って立って！」

ジェスチャーで二人に指示する新聞部員に、一夏は素直に従った。
こうして記念撮影されるのは、若干恥ずかしいとはいえ、なんだか悪い気もしなくない。

このとき箒が少し不機嫌そうな顔をしていたが、それを見る者は誰もいなかった。

「じゃ、握手してもらえるかな～？」

そう言われ、一応一夏はセシリアへ右手を差し出した。
セシリアもそれに答え、同じように右手を差し出す。

思えば、数日前にもセシリアと握手をしたような気がした。

そのときはその場の空気的な感じでしたが、今このような形式的な感じとなると、少し恥ずかしい気がする。
それに、若干セシリアの頬が赤いのは気のせいだろうか？

ともかく、薫子が首に掛けている一眼レフカメラを構えたのを確認し、二人はそちらへ向く。

「あ～ん、もうちょい笑顔で寄って寄ってぇ。はぁい、緊張しないでぇ。それじゃ、撮るよぉ？」

指示をこなし、最もよいであろう構図を作った二人を、一眼レフカメラのレンズが捉える。

「それじゃあ撮るよ～」

再びカメラのフラッシュが瞬き、撮影を終えた時には、何故かクラスメンバー殆どが写真に写っていた。
おまけに、箒に至っては腕にくっついてきている。

「何故全員入ってますの！」
「まあまあ」
「セシリアだけ抜け駆けはないでしょ～」
「これもクラスの思い出という事で」

怒気を露にするセシリアと、それをなだめる女子生徒。
この状況、どう対応したものか、と一夏は頭を悩ませた。

というわけで、このパーティは十時過ぎまで続き、通りすがりに警鐘を鳴らした金寺によってその幕を下ろしたのだった。

◆

ロビーで騒いでいた生徒たちに警鐘を鳴らした後、部屋に戻った金寺は、あるデータを見ることにした。

一夏と分かれたあと、職員室にて千冬より渡されたものだ。

何でも、二日後に中国から一年二組に転入する生徒がいるらしい。
それも、書類上中国軍に所属する代表候補生。おまけに専用機持ちだ。

ちなみに、この金寺も昨年一時的に中国の軍事施設に臨時技術顧問としていた経験がある。
当時、中国が第三世代型兵器の開発に着手していたため、それに伴い金寺龍輔にオファーが来たのだ。

（まさかな……）

同じ頃中国軍では、国内のＩＳ適正が高い少女を集めており、彼女等の世話焼き係も言い渡されていた。

向こうに言わせれば、厄介な事柄を押し付けた形だろう。幸いにも特に困る事も無く、軍が第三世代型兵器のプロトタイプを完成させた事によって金寺の役目も終わり、その九ヵ月後に中国から去っていった。

そんな中で、一人だけ印象に残っている少女がいる。

ツインテールで、小柄で、いつもは無駄に元気が良くて、でも少しさびしがりやなところがあって。

とにもかくにも、中国人で一番最初に思い浮かべるのは彼女だ。
そう思いつつ、データに目を通すと、

（そのまさか、か。本当に来るとはな…）

データに記されていたのは、その少女のものだった。
あの、少し騒がしかった日々が、脳裏によぎる。

（退屈しねえなぁ、俺）

本日何度目かも分からない苦笑を浮べつつ、金寺は就寝の準備をする事にした。

3．再会（前書き）

本格的に鈴音登場。
この辺りの話は、結構考えました。

原作ブレイク、今回もあります。

3．再会

◆

二日後、ＨＲ前の一年一組の教室では一夏とセシリアを中心にとある会話が繰り広げられていた。内容は、再来週のクラス対抗戦についてである。

ちなみに、このクラス対抗戦で優勝すると、『学食のスイーツ一年間食べ放題』という景品がかかっているという。

そのせいか、女子は全体的に士気が上がっていた。

最も、実際に戦う一夏は、そのような類のものに興味がなかったりする。

「もうすぐクラス対抗戦だね」

「そうだ、二組のクラス代表が変更になったって聞いてる？」

「ああ、何とかって転校生に代わったのよね」

「転校生？この時期に？」

転校生、という単語に一夏は思わず耳を傾ける。今は四月下旬、この時期に新しい生徒が転入してくるというのはいささか珍しい。

「うん。中国から来た子だって」

中華人民共和国。

その国の名前を聞いた一夏の脳裏に、一人の少女の姿が映る。
小学五年生の始めに自分のいる学校に転校してきて、中学二年生の終わりに両親の離婚のため中国に帰国した“セカンド幼馴染”。
彼女は今どうしているだろうか、と思わず考えてしまう。

「ふん。私の存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

相も変わらず、隣に来たセシリアは尊大な態度を見せている。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどの事でもあるまい」

窓側の席にいた箒も、一夏のところに来ていた。

「どんな子だろ。強いのかな……」
「今のところ、専用機を持ってるのって一組と四組だけだから余裕だよ～」

そんなクラスメートの言葉を、突如飛んできた言葉が妨げる。

「――――――その情報、古いよ！」

クラスのほぼ全員の視線が、音源の方向へ向く。そこにいたのは一人の少女。

「二組もクラス代表が専用機持ちになったの。そう簡単には優勝できないから！」

まるで勝気な性格を全面的に表現するような一言が教室に響く。ある種挑発的ともいえる態度に、感化させられたセシリアが体を向けた。

「貴方が、噂の転入生なのかしら？」

「そうよ！中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）！」

凰鈴音、中国代表候補生。

この二つのワードに、一夏は驚愕し、目を見開く。

「今日は宣戦布告に来たってわけ！」

正々堂々すぎる敵対宣言に、一組の教室でざわめきが起きる。

「専用機があるからって、いつまでも舐めてると痛い目――」

そんな意気揚々とした鈴音の声は、彼女の頭の上で鳴り響いたスパンッ、という音と共に途切れた。

「いったぁ……、何すんのっ！」

頭を抑えつつ、鈴音が後ろを振り向くと、そこにいたのは、

「もうＳＨＲの時間だぞ」

一年一組の担任、織斑千冬その人だった。

「ち、千冬さん……」

彼女の姿をその目に納めた鈴音は、明らかに「しまった」という表情をしていた。その場に先生が来たからどうこうという訳ではなく、どうやらかなり苦手意識があるようだった。

「学校では織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、邪魔だ」

「すっ、すいません……」

そう言いながら追い払うように鈴音をあしらい、何事もないように教壇に向かう千冬。

一方、当の鈴音は先ほどの勢いが完全に相殺されながらも、

「あんまり油断してると、すぐ負けちゃうんだから！覚悟してなさいよ、一夏！」

捨て台詞を残しながら颯爽とその場を去っていった。

「…なんですの！？あの方…？」

先ほどの鈴音の言動に、セシリアや箒ら数人のクラスメートは僅かながらも不快感を露にし、

「あいつが…中国代表候補生…？」

一夏は未だに驚きを隠せない様子であった。

◆

「ねえねえ凰さん、織斑くんに宣戦布告してきたんだって？」

一年二組、朝のＳＨＲ終了後、早速鈴音の元に、何人かのクラスメートが声を掛けてきた。

「うん、まあね。アイツ、あたしの顔見て本当に驚いてたよ」

先ほどの行動がすぐさま級友の間で広まっている事に驚きつつも、得意げに鈴音は答えて見せた。

この一年二組に男子は無論いないので、完全に女子高状態である。もっともな事を言えば、隣の一組が特別なだけなのだが。

さて置き、中国代表候補生である鈴音だが、クラスの面子に紹介されたのが昨日にもかかわらず、元々の性格もあってか早速、クラス内で人気者になっていた。

本当にありがたい。
このクラスに来てよかった、と心から思う。

正直、鈴音は、あまり良い目では見られないだろうと思っていた。
当然といえば当然かもしれない。彼女の所属する中国国防軍は、上層部が不祥事を起こし何人もの幹部たちが辞職に追い込まれたのだ。

そういうわけで、中国――中国人への風当たりは良いわけではない。
しかし、そんな事気にせず、クラスの女子たちは明るく接してくれた。

曰く、「別に凰さん自体はその不祥事と関係ないんだし、変に接する必要は無い」との事。

それを聞いたとき、本気で泣きそうになった。

「で、凰さんと織斑くんって、どんな関係？」

何人かのクラスメートが、至って真剣な眼差しで聞いてくる。
その姿勢にややたじろぎつつも、鈴音は一応答える事にした。

「前日本にいたときの友達みたいなものよ。小五から中二の時まで日本にいたからね」

そう答えると、クラスメートたちは、感心するような、少しがっかりするようなリアクションをとった。
大方、鈴音と織斑一夏が深い関係なのでは、と思ったのだろうか。

確かに彼とは日本にいたときの親友だが、生憎彼に恋愛感情を持った事は無い。
むしろ、共通の親友の妹に勝手にライバル意識を持たれて、一時期本当に困り果てたぐらいだ。

「でもかなり仲良しなんだよね？いいなぁ～」

そう言う一人のクラスメートは、本当に羨ましそうだった。

「織斑くんと仲良くなれる方法って何かある？」

直後、級友の一人が発した質問に、ほとんどのクラスメートが注目してきた。

これほど一夏の話題に皆が皆食いつくのかと思うと、今度こそ鈴音は驚きを禁じえない。

苦笑を浮べつつ、鈴音は真面目に答える事にした。

「まぁ…『世界初のＩＳを扱える男』といっても、元は極普通の男子だから、大して心得る事はないと思うけど…」

と、まで言い終えた後、鈴音はある事を思い出して、口元を僅か

に吊り上げる。

「アイツにそっち方向でで近づきたいんなら、本気出さないとダメよ。ああ見えて結構色々な娘に好意持たれてたから」

その一言に、クラスメートたちの驚嘆の声がもれる。どうやら、本気で狙っている人もいるようだった。

それにしても、と思う。

前に日本にいた頃、鈴音が知っているだけでも、一夏に好意を抱いていた女子は多い。少なくとも、その共通の親友の妹を含め、五人以上はいた。

確かに、ああ見えて意外といい男だとは思う。

ルックスも悪くないし、正義感も強い。家事に関しては万能で、優しさに境界線が無い。いつもは飄々として間抜けなだけに、そんな彼の一面を見て好意を抱く女子は少なくなかった。

そして、前に日本にいたときも、「織斑君を私に紹介して」と、何人の友人に言われた事か。

その女子たちは大体、一夏の恋愛に対する異常な鈍感さの前に儚く散っていったというのは、別の話。

（まぁ…結果論言うと、アイツは何も変わってない訳ね）

一限目開始のチャイムを耳にし、ＩＳ基礎理論の授業の準備をしながら、鈴音は心の中でごちる。

（なーんで今更こんな事習うのかしら）

正直、国家代表候補生である鈴音にしてみれば、何故今になってこのような授業を受ける必要があるのか分からない。

最も、これが一学年共通のカリキュラムの一つなので、どんなに愚痴っても仕方が無いのだが。

適当に復習感覚で受け流しますか、と思いつつ、前方の教壇に目をやると、

（――――――え？）

いた。

若干ウェーブがかかった、手入れしていないような黒い髪。決して端正とは言えないが、力強さが印象的な顔立ち。赤い右眼と、漆黒の左眼。

金寺龍輔、鳳鈴音の初恋の相手。

「嘘…マジで…！？」

思わず声が出たが、驚愕のあまり思うように口から出ず、独り言のようになってしまった。

（え…！？ちょっと…え？こんなトコで…！？）

必死にショートしている思考回路を修復しようとするも、全然上手くいかず逆に焦る有様。

昔、『思考回路がショートする』という表現を鼻で笑っていた自分が馬鹿馬鹿しく思える。

とりあえず、鈴音にしてみれば思考回路はとんだ不良品だったらしい。

そんな彼女を見て心配そうに声をかけるクラスメートの言葉も耳に入らない。

「――――――おい、そこのツインテール大丈夫か？」

次に耳にまともに入ってきた声は、怪訝そうな表情の龍輔のものだった。

予想外の事態に、鈴音は本気で飛び上がりそうになる。

「は、はいっ！大丈夫です問題ないです元気１００％です！」

矢継ぎ早に口から出た意味不明な単語の羅列に、鈴音は恥ずかし

くて頭が沸騰しそうになる。

「…そうか、ならいいが。最低限教員連中の話ぐらいは聞いといた方がいいと思うぞ」

「わ、分かりました…」

恥ずかしさのあまり、小動物のようにしゅんとしてしまう鈴音。

結局、金寺龍輔の事で頭がいっぱいになってしまった鈴音は、授業をまともに聞くことが出来なかった。

◆

やっぱいた。

それが、鈴音を見た龍輔が抱いた第一感想だった。

見たところ、何も変わっていないようにみえる。自分に対して過剰に反応していたのは気のせいではないように見えたが。

教室の前の扉から出ると、後ろの扉からその少女が出てきた。

「龍輔！」

自分の名を呼びつつ、駆け足で近づいてくる。

瞬く間に自分の目の前に接近してきた彼女に対し、龍輔は、軽く彼女の脳天に手刀を振り下ろした。

「うっ！？」

「今の俺は先生だアホ。その呼び方は控えなさい」

「ううっ…再会した女の子に向かっていきなり手刀を浴びせるなんて…」

脳天を押さえつつ軽く涙目になる鈴音に、龍輔は適当に溜息をついた。

「おい待て、そこまで俺とお前の中は特別じゃないだろ」

「いいのいいの！あたしにとっては特別なんだし、また龍輔に会えて嬉しいんだもん！」

極めて一方通行な言葉が返ってきたが、それは受け流す事にした。

それより、彼女がここまで自分を特別な目で見てきたのか、それが疑問だ。

「にしても、約半年ぶりか？相変わらず元気そうじゃねえか」

「えへへー、やっぱりそう？龍輔も相変わらずだね」

表情を緩ませながら楽しそうに話す鈴音を見た龍輔は、少し嬉しさを覚えた。

自分との再会を、こんなにも喜んでもらったのは、今までの人生の中で初めてのことだ。

「…で、どうよ、あれ以降。なんか専用機もらったらしいじゃねえか」

「そうそう！ホントあたし頑張ったんだよ！」

ウサギのようにピョンピョン跳ねながら、全身を用いて喜びを露にする鈴音に苦笑しつつ、携帯端末で時間を確認すると、次の授業まで後四分となっていた。

「…悪い、そろそろいいか？次の授業の準備しなきゃなんねえからよ」

「んー…分かった。で…あ、あのさ…今日昼空いてる？出来れば…一緒にお昼…食べたいなぁって…」

最後の方の声が完全に細くなっていたが、龍輔はそれをしっかり聞き取ると、思考を少し働かせた後答える。

「…悪い、昼休みは少々立て込んでんだ」

「そう…」

「でも、放課後だったらその気になれば空いてるが」

「本当！？」

どういう偶然かは知らないが、本当にこの日の放課後は空いていた。

流石に毎日はつらいだろうと思い、【白式】の稼動調査やツインコア同調率調整は、三日に一回にすることにしたのだ。

一瞬、昼休みＮＧを聞き表情が暗くなった鈴音だが、龍輔が放課後ＯＫを伝えると、一気に表情が明るくなる。

「じゃ、じゃあ…放課後第四アリーナね！」

それだけ言い残し、まだ嬉しさを全開にしながら鈴音は教室に戻っていった。

周りの生徒が怪訝そうな表情で彼女を見ていたが、どうやら気にしていないらしい。

（…なんか、相変わらず表情がコロコロ変わる奴だなぁ…）

適当にそう思いながら、次の授業のために龍輔は職員室に戻っていった。

◆

午前中の授業を終えて昼休み。

一夏と鈴音は食堂前で偶然鉢合わせていた。

丸々一年間、顔を見ていなかった二人は、昔の仲もあり自然と話し始める。

「びっくりしたぜ。おまえが二組の転校生だったとはな。連絡くれりゃよかったのに」

「そんなことしたら、劇的な再会が台無しになっちゃうでしょ」

「なあ…お前って、まだ千冬姉のこと苦手なのか？」

千冬の話になると、鈴音はしかめ面を浮べる。

「そ、そんなことないわよ…。ただ…その、得意じゃないだけよ」

嘘である。

日本に滞在していたときから双方は家族ぐるみで縁があったが、そんな中で厳格な千冬は本当に苦手であった。

カウンターで鈴音が中華蕎麦を受け取るのを見て、一夏が率直な感想を言う。

「相変わらずラーメン好きなんだな。…丁度丸一年ぶりになるのか、元気にしてたか？」

「まあね。色々あったけど、本っ当アンタは何も変わってないみたいね。根幹的なところから」

「何だよそれ…」

そんな光景を、一夏の後ろに並んでいる一組の生徒たちは、複雑そうな、不思議そうな表情で見ていた。

◆

「で、いつ代表候補生になったんだ？」

「去年。アンタこそ、ニュースで見た時吃驚したじゃない」

「俺だって、まさかこんな所に入るとは思わなかったからな」

「入試の時にＩＳを動かしちゃったんだって？どうしてそんな事になったのよ」

「何でって言われてもなぁ…」

頭を掻きつつ、一夏はその時の経緯を話し始めた。

「――で、その後色々あって、ここに入学させられたわけだ」

「ふーん、変な話ね」

鈴音が一夏の話に同調した時、隣のテーブルに陣取っていた箒とセシリアが、堪忍袋の緒が切れたように立ち上がり、一夏に肉薄してきた。そして二人そろってテーブルをバンと叩く。

「一夏、そろそろ説明してほしいのだが！」

「そうですわ、一夏さん！まさかこちらの方と付き合っていらっしゃるの！？」

そんな二人を見て、

（随分必死ね…もしかしてこの二人…）

心の中で独り言を呟きつつ、一夏の方へ視線を向けると、

「違うぞ、ただの幼馴染だよ」

直球的な返事を返した事により、前方の二人が安心しているところだった。

（さすが一夏。この辺の安定感は抜群）
「鈴、どうした？」

どうやら人の本質というものは早々変わらないらしく、一夏の朴念仁ぶりも健在のようである。

最早、呆れるどころか軽い尊敬の意を示す鈴音を見て、一夏がきょとんとした様子で尋ねる。

「なんでもないわよ。やっぱアンタって何も変わってないな、って」

彼女に言わせて見れば、それを聞いて頭の上に『？』を浮べるところも含めて、だ。

彼は昔から、気配りはある程度きく男なのだが、どうも恋愛事情となると、異様な鈍感さを見せ付けるようだ。

一方、『幼馴染』というワードに、箒は首を傾げる。

「で、一夏。この人は？」
「ああ…まず、こっちは篠ノ之箒、前に話しただろ。箒は“ファースト幼馴染”で、お前は“セカンド幼馴染”、ってとこだ」

前方の二人が深い仲でない事を確認したせいか、箒は安心したように表情を緩めた。

「“ファースト”…」
「ふーん、そうなんだ。はじめまして、これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

探るような視線を箒に向けつつ、鈴音は笑顔で挨拶する。

それを見て若干疎外感を感じたのか、蚊帳の外だったセシリアが自分の存在を誇示するように咳払いをする。

「わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。一夏さんとは先日クラス代表の座をかけて――「そういえば一夏、クラス代表になったんだって？」

自分自身のことを尊大に語りだしたセシリアの存在を無視するように鈴音が話を一夏に振る。

「ああ、成り行きでな」

「…まさか自分から立候補したとか？」

「まさか、まあ色々あって――「――って、ちょっと聞いてらっしゃるの！？」

ここで、先ほどから独り語り状態だったセシリアが二人の会話に介入した。

「ん？大丈夫よ、あなたの事は知ってるし。――セシリア・オルコット。イギリス代表候補生で、英国内ＢＴ兵装適正者の中で唯一Ａ。あってる？」

「え、ええもちろん！分かってくださっていればいいのですわ！」

鈴音の口調はかなりぶっきらぼうだったが、自分のことを分かってもらっていて安心したのか、セシリアらしい態度が復活した。

「なあ、ＢＴ兵装、って何だ？」

一夏の疑問に、鈴音が端的に答える。

「簡単に言えばビーム兵器よ。彼女はイギリス国内でその適正が一番高いって事」

「そうなのか…代表候補生ってやっぱすごいんだな」

一夏から賞賛の言葉を掛けられたセシリアは、頬を赤らめながらもとても嬉しそうだった。

その一方、箒は不機嫌そうな表情を浮べている。

二人の様子を見て、先ほどから抱いてきた疑念が具現化してきた鈴音は、話題を切り替える事にした。

「じゃあさ、あたしが練習見てあげよっか？ＩＳの操縦も」

「おっ、そりゃ助かる――「一夏に教えるのは私の役目だ！」

鈴音の提案を聞いた一夏が嬉しそうな表情をするのを見て、箒が二人の会話に介入した。

それにセシリアも続く。

「それはわたくしの役目ですわ！――――第一あなたは二組でしょう？“敵”の施しは受けませんわ！」

セシリアの言葉は的を射ていた。クラス対抗戦となれば、一夏と鈴音は敵同士だ。

だがそれ以前に、鈴音はセシリアが言った最初の言葉の方に、力が入っているように思えた。

しばらく、鈴音の試すような視線が箒とセシリアに向けられる。

「…なんだ？」

「な、なんですの？」

そんな二人の様子を見て、嘆息した鈴音は、

「――――まあ、確かにクラス対抗戦となれば一夏とは敵同士だしね…分かったわ、やるからにはちゃんと教えなさいよ」

それを聞き、虚を突かれたような表情になる箒とセシリアを尻目に、鈴音は中華蕎麦のスープを飲み干す。

「じゃあ、また後でね。練習しっかりやりなさいよ、一夏」

この件をボーッと見ていた一夏にそう言うと、鈴音はそそくさと食堂を去っていった。

――――――色々大変な事になりそうだなぁ、と、心の中で呟きつつ。

3．再会（後書き）

鈴音が金寺にベタ惚れ。
金寺龍輔というキャラクターが明確に確立した段階で、鈴とのカップリングが思い浮かびました。

4．龍の記憶（前書き）

恋愛要素は、難しいです。

4．龍の記憶

◆

放課後。

自分の職務を、大してやる気が無かったので適当かつ大雑把かつ投げやりに終わらせた龍輔は、言われたとおりに第四アリーナに来ていた。

客席からは、訓練機で練習を行う生徒たちが何人か見える。恐らくは、専用機を所持していないクラス代表も含まれているだろう。

「龍輔！」

そんな風に思考を働かせていると、鈴音が龍輔の元に駆け寄ってきたところだった。

ニコニコ笑顔で、龍輔の隣の席に座る。

「なんか嬉しそうだな」

「えへへ…そう見える？」

龍輔が鈴音の顔を覗き込んでみると、今まで彼が見てきた鈴音の表情で、一番の笑顔だった。

そして鈴音は、手にもっていた缶コーヒーを金寺に渡す。

龍輔が大のコーヒー好きである事は、もちろん鈴音は把握済みである。

「はいこれ。確か龍輔コーヒーがお気に入りでしょ？」
「ほぉ、よく覚えてるもんだな」

鈴音が渡してきたそれは、有名ブランドの微糖ものだった。
そう言いながら、缶のタブを開け、そこからあふれ出る香りを少々楽しむと、軽く喉に注ぎ込む。

嗅覚と味覚を研ぎ澄ました後、口を離して瞑っていた目を開くと、

「――――――まぁ、香りが少し薄いが、味は及第点だな…こりゃエスプレッソか」

意外と細かいのね、と呟きつつ、鈴音も自分用に買った赤色の缶ジュースを喉に流し込む。

「まあな。俺が拘りを持つ数少ないモンだからな…」
「で、その数少ないうちの一つはＩＳなんでしょ？」
「ご名答」

それだけ言うと、金寺は手元のコーヒーに集中する事にした。
一度も飲んだ事が無かったが、意外と口に合いそうだな、と、龍輔が思考を働かせていると、

「……何だ？」

鈴音の視線が、先ほどからずっと自分に向いている事に気付いた。

「なっ、なんでもない！」

指摘された鈴音は、慌てて龍輔から視線を逸らした。

その後、変な沈黙が二人の間に流れる。龍輔が缶コーヒーを飲み終えてから、アリーナで訓練を行う二、三年生を見ているのに対し、鈴音は気が気でない様子で、龍輔の顔とアリーナの光景を交互に見ていた。

意を決した鈴音は、思い切ってある質問を龍輔にぶつける事にした。

「ねぇ、龍輔…」

「ん？何だ？」

「龍輔があたしを慰めてくれた時の事…覚えてる？」

上目遣いで金寺に問う鈴音に、龍輔は当然の如く、とでも言うように答えた。

「――――――ああ、覚えてるぞ。一年前のこの時期だったよな」

それを聞き、鈴音の表情が、花が咲いたように明るくなる。

「本当！？覚えててくれたんだ！」

「お前…そんなに喜ぶ事か？」

やや呆れ気味の龍輔に対し、満面の笑みで鈴音は何度も何度も頷く。

それは、丁度一年前の出来事であった。

◆

一年前、中国軍の軍事施設にて。

「――会いたいな…パパ…ママ…一夏…弾…みんな…」

当時、入隊させられたばかりの鈴音は、塞ぎこんでいた。

友人たちの下を離れ突然の帰国、直後に両親の離婚、軍への入隊。激動の数ヶ月に、まだ精神的に幼い少女が心を閉ざしかけるのも、ある種当然だった。

その時の鈴音は、ろくに人と関わらず、食事なども最低限で、引きこもり寸前ともいえる状態であった。

「凰鈴音か？――――――何故塞ぎこんでいる？」

そんなある日、部屋で引きこもっていた鈴音の元に、一人の青年――――金寺が来た。

当時、金寺は臨時的に中国軍のＩＳ開発に携わっており、その途

中、一人の代表候補生の候補生が塞ぎこんでいる、と聞いて、彼女とコンタクトを取ろうとしていた。

正直、最初はウザイと思った。

――――――何も言わずに人の部屋に入ってきて、何様のつもり？

アンタには関係ない、と鈴音は一時拒絶した。

軍にいるのが嫌なのか？、と金寺は聞く。

仕方なく、鈴音は理由を話した。これで、この男が去ってくれれば、と思ったのだが。

「――――――何故離れ離れになったぐらいで泣いている」

帰ってきたのは、意外な言葉だった。

驚きのあまり、「え？」と裏返った声を出した少女に、金寺は淡々と言った。

「何も、二度と会えない訳じゃないだろう？――――お前がその気になれば、いつでも会いに行く事が出来る……お前もその連中も、生きているんだから」

これを聞き終えた瞬間、鈴音は理解した。

――――――もしかしたら、目の前にいるこの男は、両親や知り合いを亡くしてしまったのではないか、と。

彼の淡々とした言葉からはいささか読み取りづらかったが、表情に僅かな悲壮感が宿っているのを見て、そう感じたのだ。

今思えば、彼に惹かれていったのは、この時からかもしれない。

「ねぇ…アンタ、誰？」

「俺は…金寺龍輔だ」

それが、二人の最初の“会話”だった。

◆

「龍輔にしてみれば些細な事だったかもしれないけど…あの言葉のおかげで、あたしは立ち直れたんだよ」
「そっか…まぁ、だったらそれでいいけど」

あくまで淡々と話す金寺を見て、鈴音は思わず笑ってしまう。

「何だお前、いきなり笑い出して」
「ふふっ…だって龍輔、全然変わらないもん。そういう素っ気無さとか」
「あっそ」

これまた、感情というものが感じられない素っ気無い返事だったが、鈴音は初恋の相手の本質が変わっていない事が嬉しかった。

「…まあ、そういう事だとお前もそうだろ。人の本質なんて、よっぽど劇的なことが無い限りかわるモンじゃねえし」

その通りだ、と思った。

龍輔も、一夏も、人間の本質という面ではほとんど変わっていない。
約一年ぶりに日本へ来た彼女にとってはそれが嬉しく、今こうして自然体でいられることが出来るのだ。

「そういやよ、お前の国、最近大変だった見たいだな」

ここで、金寺の話が自国の問題へと移行した。

正直この話はあまりしたくなかったが、溜息混じりながらも重々しく口を開く。

「……一応あたし中国軍所属だけど、何も知らないわ。事態は全部あたしたちの知らないところでしか動かないから、どうしたらいいかも分からなかったし…」

軍上層部のとある不祥事に、一部の都市でおきた中国共産党に対する反政府デモ。

始まりから終わりまで、それらは全て鈴音たちの知らないところで動いていた。

発覚、鎮圧、事後処理に至るまで、国家代表候補生と言えども所詮軍の少尉である鈴音を含めた、同じ代表候補生の少女たちが踏み込めない領域。

言い方を変えれば、『暗部』とも表現できるようなものだ。

その点を踏まえると、ある種、鈴音は被害者なのかもしれない。

これらの事態が、結果的に鈴音が四月にＩＳ学園に入学できなくなった間接的な原因となったのだから。

「…大変だったろうけど、別に俺は気にしねえからさ。んなつまんねえ事考えんな」

「……そうだね」

安易に踏み込めるような事態でない事は分かっているも、どうも

気にしてしまう。
だから、龍輔がそう言ってくれて、少し肩の荷が降りたような気もした。

ここで、鈴音の頭の中に、一つの考えがよぎる。

――――――流れで告白しちゃえば？

すぐさま、顔が熱くなるのがわかる。

――――――いやいやいや！まだ早いでしょ！

そう自分に言い聞かせているものの、“告白”という単語に、頬が紅潮していくのが分かる。

ひょっとしてこんな自分を見られたのではないかと思い、鈴音は横を向いて見ると、

「――――お前本当に今日変だぞ。何か変なモン食ったか？」
「――――っ！い、いや…その…」

怪訝そうな龍輔の視線を受けて、思わず目線が下に向いてしまう。
僅かな逡巡の末、

「龍輔…って、あたしの事…どう思ってるかなぁ…って」

辛うじて言い切り、視線を上げると、それを聞いた龍輔が、口元に手を当てて真剣に考えていた。

そんな金寺の様子に、鈴音は思わずドキッとしてしまう。

いつもカッコイイのに、こうやって更にカッコイイしぐさ――――本人は無意識だが――――をしているから、いつもの数倍増しでカッコよく見える。

…それが、彼女自身の思い込みである事は、書くまでも無いだろうが。

鈴音の心中が期待と不安でいっぱいになる中、

「――――まあ、そうだな…」

暫しの思考の末、龍輔が答えを出す。

「話が逸れるけどよ、お前にまた会えて嬉しかったからさ…まあ、どうでもいい奴じゃねえな。」

「『会えて嬉しかった』…？本当に…？」

期待していた答えとは違ったものの、予想外だった一言に思わず聞き返してしまう。

それに首肯すると、少し目線を下げながら龍輔は話し始めた。

「俺にとって、また会えて嬉しい、って言われたのはほとんど無かったからな……さっきああやってお前が全身に喜び露にしながら話してきたときは、……本当に嬉しかった」

そう言う龍輔の顔には、普段めったに見せないような、優しげな笑みが浮かんでいる。

嬉しさを感じつつも、龍輔の心の闇の一端に若干触れてしまったような気がして、鈴音は少し複雑な気持ちになってしまった。

結局、自分は一人の女として見られていなかった、という事実を目の当たりにしたのだが、その一方で、龍輔に「会えてよかった」と言われて満足している自分がいるのも確かだった。

（…ま、今はこれでいいのかな…？）

何となくだが、鈴音はそう思えた。

ずっと会いたいと思っていた青年と、この日本の地で会えたのだ。今はそれでいいと思う。

今も、彼がほとんど見せた事の無い笑顔が見れたことだし。

――――最も、この青年の女になる努力を怠るつもりは毛頭無いが。

本能的に、鈴音は体重を横の龍輔に預けた。

「…鈴？」

「なんでもない。…このままいさせて」

「…了解」

その後、中国時代の思い出を、二人は飽きることなく話し続けた。
気付けば、既に日没前である。

◆

その数刻前。

「篠ノ之さん、…どういうことですの？」

放課後、第二アリーナにて、なんとも不満げな視線を向けるセシリアの先には、一夏の【白式】に対峙する箒の灰色のＩＳがあった。

「訓練機の使用許可が下りた。今日からこれで訓練を行う」

そう言いながら、箒は灰色のＩＳ――【打鉄（うちがね）】の近接ブレードを構える。

【打鉄】は日本国産の、第二世代型ＩＳである。フランス製第二世代型の【ラファール・リヴァイヴ】をもとに、防御性と扱いやすさを重点的に開発されたモデルだ。基本武装は日本刀に形状が似た近接ブレード。見た目が鎧武者に似ていることもあり、妙にマッチしている。

そのことから、多くの企業並びに国家などで訓練用として使われており、ＩＳ学園も例外ではない。ＩＳ学園では訓練の際には許可申請をとる必要があるのだが、箒はその許可を取り、今ここにいる。

「ではいくぞ、一夏」

「わ、分かった」

互いにそれぞれの剣を構え、向き合う。

「お待ちなさい！一夏さんのお相手はこの私ですわよ！」

その光景に憤慨したセシリアが、左のイヤーカフスから蒼い光に包まれる。次の瞬間、そこには【ブルー・ティアーズ】がいた。

さすがに身の危険を感じたのか、一夏がセシリアを諭す。

「…セシリア、悪いけど、後にしてくれないかな？さすがに二対一だときついからさ…後で頼むよ」

「……分かりましたわ。一夏さんが言うのなら…」

いかにも不平をもらしそうなセシリアだったが、これ以上の文句は言わないことにした。

この日は、一夏は主にＩＳを扱う上で接近戦の間合いの取り方、銃撃回避の練習、飛行時の機体制御の練習などを。箒は一夏と同じような基本動作、近接ブレードの扱いの練習。セシリアは銃撃の精度の向上やライフルビットの扱いの練習などを重ねに重ね、濃密な

三時間半となった。

途中、一夏が最初に警鐘を鳴らしておいたにもかかわらず、最終的に二対一となり、おまけに箒とセシリアが一触即発のムードになったりして、二重三重の意味で疲れ果てた一夏は訓練後に大の字になって地面に倒れてしまった。本人曰く「しばらく動けない」らしく、箒とセシリアは後の会合を約束して第二アリーナを後にしていった。

◆

「……」

すっかり日が落ちた第二アリーナの中心で、一夏は仰向けになりながら、右手首のガントレットを、じっと見つめていた。

最初はいささか違和感があったが、今ではもう自分の体の一部になっている気がしてきた。

「ツインコア、か…」

自分の相棒――――【白式】が、他のＩＳと比べて特別なものである事は分かっている。

インフィニット・スクエアシステム――――本来一機に一つだった

コアを二つ搭載し、二つのコアを同調させる事で、従来のＩＳを超越した力を生み出すシステムを、一夏は託されたのだ。

彼は、自分の技量などをしっかり把握している。

だからこそ、特別な存在とはいえ、経験も知識も素人レベルの自分に、このような強大な力を託した連中の真意が、一夏は良くわからなかった。

それでも、一つだけ、確かな事がある。

「俺は…変わらなきゃいけないのかもな」

変わる。

それは、力を手にした人間としてだ。

強大な力は、それを手にした人間によって、時に全てを破壊するものとなり、時に自分の信念を具現化するものになる。

だからこそ、その力の使い道を間違えないために。

自分が願い続けた、「誰かを守れる人間」になるために。

守られているだけの自分から、脱却するために。

「――――俺は…変わる。俺の想いを、具現化するために」

力強く自分に言い聞かせる。

一夏の右手首にあるガントレットでは、二つの白金の半球体が、雲から姿をあらわした月の光を浴びて神秘的な輝きを帯びていた。

1．開戦（前書き）

今回は、内容をかなり凝縮しました。

1. 開戦

◆

そこからの二週間はあっという間だった。

一夏の訓練も次第に熱が入るようになり、箒との居合いの確認や練習、セシリアとの模擬戦、千冬と金寺による座学などで、充実した日々を過ごしていった。

本人も一切マイナスな事を言わなくなり、対抗戦に向けて気合が入っているようだった。

鈴音も鈴音で独自に調整をしているらしく、対抗戦へ向けて彼らの準備は万全のようである。

――ちなみに、この期間中に三年生数名が、アリーナの席を裏で転売していたのが千冬に発覚して処分を喰らったというのは、また別の話。

そして、いよいよ一学年クラス間対抗戦当日。

競技場である第二アリーナの入り口では今朝発表されたばかりのトーナメント表が掲示されており、生徒たちが集まっていた。

このクラス対抗戦は、トーナメント形式で行われる。一学年は全部で六クラスあり、そのため三位決定戦を含めて、全部で七試合が行われる事になる。

現在、一学年で専用機をもっているのは一夏、セシリア、鈴音の三人。その中でも一夏と鈴音はなおかつクラス代表という事もあって生徒たちから注目を浴びていた。

今、トーナメント表の前ではざわめきが起きている。生徒たちにとって、ある種衝撃的だったのは、第一試合の組み合わせだった。

◆

「まさか本当に鈴と当たるとはな…」

第一カタパルト内にて、【白式】をまとっている一夏は未だに驚きを隠せなかった。

今日の第一試合の組み合わせは、一組対二組。

つまり、一夏ｖｓ．鈴という組み合わせだった。

もちろん、一夏もこのような事態を想定していなかったわけではない。だが、それが現実になっているとなると、得体の知れない奇妙なものを感じていた。

『鈴のＩＳは【甲龍（シェンロン）】。中国製の第三世代型だ』

【白式】のモニターに、総合管制室にいる金寺の顔が映る。

第三世代型、すなわち【ブルー・ティアーズ】とコンセプトの根底は同様のものだ。だが実際は全く違う。

『【甲龍】はお前の【白式】と同じ近接格闘戦型』

『わたくしの時とは勝手が違います……油断してはなりませんわ』

金寺に加え、同じ総合管制室にいるセシリアからも声を聞き、一

夏は静かに頷く。

近接格闘戦となれば、一夏のフィールドでもある。しかし、それは相手も同じ。あらゆる技量で鈴音が勝っているのが現状であり、一夏にとってはある種不利でもあった。

金寺の言葉は続く。

『相手は代表候補生だ。お前とは経験も技量も比べ物にならないけど…』

そこで、言葉を切った金寺はモニター越しに不敵な笑みを浮べる。

『今まで培った事を忘れるな。自分のしてきた事を信じろよ』

「分かってます」

『コアの同調率は…若干不安定だが、許容範囲内だ。気にする必要は無い』

軽く頷いて一夏は通信を切り、これまで重ねてきた訓練の様子を頭に思い浮かべる。

――――俺は緊張しているのだろうか？

多分そうだろう。心拍数が少し上がっている気がするし、唇が乾いている気もする。

だが、これまで彼女たちと数多くのの訓練をこなしてきたのだ。その結果が一回戦敗退など、笑い事ではない。

反射的に、一夏は大きく息を吸い込んだ。

◆

所変わって、反対側の第二カタパルト内。

こちらでは、一夏同様に鈴音が自身の専用機である【甲龍】を展開させて、射出体制に映っている。

ＩＳ学園に来てから、本格的な実戦は、今日がはじめてだ。とはいえ感覚に問題はないし、コンディションもいい。絶好の戦闘日和だ。

『鈴、調子はどうだ？』

目をつぶって感情を整えていると、龍輔から通信が入ってきた。昂揚感を抑さえられず、返した言葉が上ずりそうになる。

「準備ＯＫ！いつでもいいわよ！」

気持ちは緩むどころか、気合が更に入っている。好きな人の目の前で、いいところを見せられるのかもしれないのだ。少なくとも、空回りする事は無いだろう。

ちなみに、鈴音の恋愛事情だが、あれ以降特別進展があるわけではない。

『そうか。一夏のほうも大丈夫みたいだし…』

通信が切れる。

同時、カタパルト内で、射出シークエンスが始まった。

『リニアボルテージ、第一、第二カタパルト、７５０を突破』

光が点り、ブースターランゲージがあがっていく。

第一、第二カタパルトハッチが開き、はるか前方に見える相手のカタパルトに、二人は相手の姿を見た気がした。

『全システム接続、双方オールグリーン――――――射出タイミングを凰鈴音、織斑一夏に譲渡する』

「了解！凰鈴音出るわよ！」

気合をみなぎらせつつ宣言し、カタパルトから勢いよく飛翔する。

『――織斑一夏、行きます！』

同時に、一夏の【白式】も、カタパルトから打ち出された。

◆

操縦者に強烈なＧを与えながら、【白式】と【甲龍】がカタパルトからアリーナ上空へと飛翔した。

鈴音は難なく、一夏はセシリアと百回以上練習してやっと身に着

けた空中制御をし、互いに向き合う。

『まさか本当にアンタとあたるとはね』

「こっちこそ」

『一応言っておくけど、絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドを突破する攻撃力があれば、殺さない程度にいたぶることが可能なの』

「お前はそうしたいのか？」

『……いや、やりたいわけじゃないけど…』

ならばいい、とでも言いたげに一夏が口を閉じると。

『両者、試合開始！』

タイミングを見計らったように、金寺の声が響いた。

鈴音が、背負った青龍刀――――《双天牙月》を右手に携えた。

機体の全長ほどはあろうかと言う巨大な刃物は、いくら絶対防御があれ直撃すれば大惨事になりかねない。

対する一夏も、《雪片弐型》を構え、鈴音と対峙する。

両者同時に、相手へ向かって加速、突進。

クラス対抗戦の火蓋が、きって落とされた。

◆

一夏の斬撃を悠々かわした鈴音は一定の距離を取った後、一夏より上にあがってから重力に合わせて《双天牙月》を振りおろす。真正面から《双天牙月》と《雪片弐型》がぶつかり合い、激しい火花と金属音が起きた。

しばしぶつかり合った両者は距離を取り直し、再び向き合う。苦悶ともいえる表情の一夏に対し、鈴音は余裕そうな顔を浮べていた。

（単純な馬力じゃ向こうが上…！）

最初のぶつかり合いで本能的にそう感じた一夏は舌打ちをした。

近接格闘戦に重点を置いた【甲龍】は機動力をある程度捨てている代わりにパワーを強化されている。一方、【白式】は近接格闘戦以外に機動力も重視されているため、単純な正面からの激突では【甲龍】が上回る。

まともにぶつかりあうのは危険と判断した一夏だが、

『ふぅん、初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど』

そう言う鈴音の左手の手のひらが一瞬発光する。

光が消えるとそこに、二刀目の《双天牙月》が現れていた。

まるでバトンのようにくるくると弄ぶと、間髪いれずに再び一夏に向かって突進し、右手の《双天牙月》を乱暴にたたきつける。

それに対し一夏は《雪片弐型》を横に構えて防御。だがそれに合わせて鈴音は左手の《双天牙月》を横殴りに振るい、一夏の横腹を狙う。

一夏は《雪片弐型》を縦に構えなおしてそれも防いだ。
それでも尚、鈴音は余裕の表情を保ち、力でねじ伏せようとする。

再び距離をとり、両者は三度自分の剣を構えて激突する。一夏は鈴音の破壊力抜群の《双天牙月》の斬撃を強引に体を捻ってかわし、鈴音は一夏の《雪片弐型》の斬撃を自らの剣で無理やり跳ね返す。

回り込めばその長い《双天牙月》の扱いが難しいのではないか、と踏んだ一夏だったが、代表候補生たる鈴音の技量がそれを補っており、期待外れに終わった。

互いに一閃、二閃、三閃と激突し、戦いは緊迫していった。

（これじゃあ消耗戦だ……このままじゃ……）

額に汗をかきながら、一夏は迫りくる《双天牙月》の斬撃を宙返りでかわす。
そして、鈴音から距離を取ろうとめまぐるしく動きながら上空からアリーナの地上へと降下していく。

ひとまず、距離をとることはできた。後は、どうここから立て直すか。

『――――甘い！』

そんな考えを強引に断ち切ったのは、後ろから響き渡った鈴音の声と、警告を示すモニター音だった。

何か――その正体は分からないが――が来る。

根拠はなかったが、確信した一夏は降下を止めないまま、【白式】の軌道を逸らす。

次の瞬間――――

（やべえっ！！）

一夏がさっきまでいた所を、“何か”が通り過ぎて行った。空間を引き裂き、進路上の全てを溶かそうとする、見えない砲撃が貫いたのだ。

それは一度では終わらない。まるで雨のように先ほどの見えない砲撃が一夏を襲う。

その内の一つが、【白式】の左側のウイングスラスターをかすった。うめきながら一夏が慌てて機体制御を行った瞬間、一夏と鈴音を結ぶ線の延長線上にあったアリーナ客席の天井の一部が、何の前触れもなく破壊された。

「な…！？今のは一体…！？」

想像もしていなかった事態に驚愕する一夏の前方で、鈴音は楽しそうな表情を浮べている。

『――今のはジャブだからね』

短いその一言が引き金となった。

一瞬、【甲龍】の両肩上部にある二つの非固定浮遊部位（アンロックユニット）が光った――気がした。

本能的にかわすこともできず、目に見えない砲弾をまともに食らい、一夏は地面に叩きつけられた。

◆

その衝撃は金寺、セシリア、箒、千冬、真耶のいる総合管制室にも伝わった。

「何ですのあれは!?」

「空気砲…か？――目に見えなかったぞ…」

驚きを隠せない様子の二人に、横にいる金寺が説明する。

「……第三世代型・空間圧作用兵器・衝撃砲《龍咆（りゅうほう）》。――アイツは空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す代物だ」

「わたくしの《ブルー・ティアーズ》と同じ第三世代型兵器ですの…？」

セシリアの問いに、金寺は首肯した。

ちなみに、第三世代型兵器とは、搭乗者の意思による操作装置（イメージ・インターフェース）を内蔵している兵装。インフィニティ・コアの能力を、誰でも自在に使用できるようにするという構想の元から開発された。

「おまけにこいつは砲身も砲弾も眼に見えないし、その上砲身斜角がほぼ制限なしで撃てる。読んで字の如く『死角がない』」

強いて弱点を上げるとするならば、空気が薄い所では威力が弱わまること、真空状態では無用の長物になる点だろう。だが、基本的に大気圏内での戦闘では全く問題はない。

安定性を求められた【甲龍】らしく、安定した力を発揮できる特殊兵装だ。

◆

地面に叩きつけられ、【白式】は砂埃を上げて地面を滑りながらかろうじて体勢を立て直す。

正面から食らったせいか、衝撃で体の節々が悲鳴を上げている。まともに直撃したせいで、シールドエネルギーも大幅に消費してしまった。

余裕を取り戻す時間がほしかった一夏だが、そんな暇を与えるほど、鈴音は甘い性格ではない事は知っている。

間髪いれず響いた轟音に、自分のいる数メートル手前に大きな穴が開いたのをしっかり確認した一夏は、歯を食いしばって地上を滑るように移動しながら必死にその砲撃をよけていく。

その強大な威力からして連射が難しいのではないがという一夏の予測を裏切り、《龍咆》は立て続けに一夏めがけて正確に撃ってくる。

地上には一夏がいた所に、数多の穴が開いていた。

『――――――はあああああっ！！』

一夏が一瞬動きを止めた隙を見て、上空から《双天牙月》を振りかぶった鈴音が一夏に襲いかかる。

その一閃は確実に一夏を仕留めるために地面に向かって振りおろされたが、一夏は間一髪で後ろに下がり、再び飛翔した。その顔に余裕の笑みを保ちつつ、鈴音は一夏を追って同じように飛翔する。

『よくかわすわね。この《龍咆》は砲身も砲弾も見えないのに』

一夏の技量を称賛しつつ、止めることなく鈴音は《龍咆》を撃ちつづけた。

彼が目に見えない衝撃砲の一撃をかわせるのは単純な技量だけではない。

一夏はＩＳのハイパーセンサーに《龍咆》が射出する瞬間に、空間の歪みと大気の流れを探らせることによって紙一重で砲弾をかわ

していた。

だが、これでは攻撃に転化することが出来ず、逃げ回る事しか出来ない。

（…冷静になれ！俺は……千冬姉と同じ武器を持っている！）

自身の右手に握られている、近接特化ブレード《雪片弐型》を強めに握りなおしつつ、背後から来る《龍咆》の無尽蔵な射撃をかわす一夏の脳裏に、クラス代表決定戦直後のアリーナでの千冬との会話がよぎった。

『金寺先生も言ってたけど……【白式】の武器って、この《雪片弐型》だけなのか？』

『私も、それだけで優勝した。その一振りで十分だ』

『世界大会優勝者と一緒にされても困るんだけどなぁ……』

直後、【白式】を纏った一夏が飛び上がる。千冬がその手に持っている竹刀で地面を強く叩いたのだ。

『大体、お前のようなド素人に射撃戦ができるものか。……反動制御、弾道予測から距離の取り方、一零停止、特殊無反動旋回（アブソリュート・ターン）、それ以外にも弾丸の特性、大気の状態、相手武装による相互影響を考えた思考戦闘――――射撃戦闘に関する用語はまだあるぞ。出来るのか？お前に』

『ううぅぅ…ゴメンなさい…』

千冬の言葉を聞いて頭が痛くなった一夏は、頭を抱えながら謝る。

彼の感情に比例してか、【白式】のウイングスラスターが縮こまっているように見えた。

『ひとつの事を極めるほうがお前には向いている。――何せ、“私の弟”だからな』

（バリア無効化攻撃（れいらくびゃくや）…そして“あれ”が出来れば…）

一夏の中で勝利への回路が出来上がった。

でも、という自然と湧き上がってきた弱気な感情を振り払い、一夏は決心する。

「行くぞ……織斑一夏！！」

自らを鼓舞するように大声を張り上げると、《龍咆》を避けつつ大きく旋回し、ハイスピードで鈴音に向かっていった。

◆

――しめた！

急旋回して自分の方向へハイスピードで向かってくる一夏を見て、内心鈴音はほくそえんだ。

ついさっきまで【甲龍】の放つ《龍咆》はことごとく回避され、彼女は戦略を立て直そうかと考えていたところだったのだ。

近接格闘戦は【甲龍】のフィールドであり、【白式】のフィールドでもある。だが、一夏が考えたとおり単純なぶつかり合いでは、軍配が上がるのは【甲龍】だ。

今、一夏はその“フィールド”に入ってこようとしている。

鈴音には近接戦闘で一夏を圧倒して見せるだけの自信を持っていた。仮に拮抗したとしても、そのときはゼロ距離で《龍咆》をぶっ放てばいい。自身にも少なからずダメージはくるだろうが、それ以上に相手に与えられるダメージも大きいのだ。

前方から向かってくる【白式】は、鈴音にとってまるで蜘蛛が張り巡らした網という罠に何も知らずにやってきた純白のモンシロチョウに見えた。

無邪気ともいえる邪悪な笑みを浮べ、鈴音は接近してくる一夏に向かって《龍咆》を拡散する。

案の定ほとんどかわされて致命傷を与える事は出来なかったが、それで十分。

もうすぐ目と鼻の先まで近づいてこようとする一夏を返り討ちにするために、《双天牙月》を――――

――――振るおうとした次の瞬間、鈴音の予測しなかった事が起きる。

一夏がとった動きはぶつかり合いでは無く、大きく軌道を変えてスピードを保ったまま【甲龍】の横を何もせずに通り過ぎたのだ。

（ええ…！？……どういう事！？）

一瞬、【甲龍】の動きを見て即座に回避運動に切り替えたのかと思った。

だが、鈴音が《双天牙月》を動かす前に一夏は【白式】の軌道を変えていた。

考えられる可能性は一つ。

最初から、攻撃するつもりは無かった。

だとすれば、彼の狙いはなんだったのだろうか。

鈴音には検討もつかなかった。

「何のつもり…！？」

苛立ちを隠すことなく、鈴音は振り返るとはるか前方にいる一夏に向かって吐き捨てながら、《龍咆》を放ちつつ【白式】に接近しようと向かっていく。

それを確認した一夏は逃げるように加速。

ターンしながら機体の高度を下げ、地面すれすれを飛行し、雨のように降ってくる《龍咆》の砲撃を難なくかわしながら鈴音のはるか後方に飛翔する。

再び鈴音が後ろを向いて一夏の姿を確認したとき、一夏は鈴音に話し掛けた。

『鈴！』

「…何よ」

『――本気出すからな』

鈴音の頭の中で、何かが爆発した。

“本気出すからな”。

その台詞は、まるで遠まわしに「今までは手加減だった」と言われているようだった。

何より、まだＩＳの操縦経験が浅い一夏に言われると、国家代表候補生としてのプライドがズタズタに切り裂かれた感じがしたのだ。それ以前に、鈴音自身の性格が元々やや荒いという事もあった。

「何よ！そんなの当たり前じゃない！！――とにかく、格の違いってものを見せてあげるわ！！」

乱暴に言葉を吐き捨てると、鈴音は二刀の《蒼天牙月》を連結させ、一夏めがけて思いっきり投擲する。

苦も無くそれをかわした一夏は、再びハイスピードで旋回する。右へ、左へ、上へ、下へ、無秩序な動きで縦横無尽にアリーナを駆け巡る。

《龍咆》の砲撃をはかすり傷程度のダメージしか与えず、自身に接近してきてもほんの少しの接触だけですぐに離れていく。

その姿は、先ほどのようなモンシロチョウではなかった。

むしろ、自分の周りを飛び回る鬱陶しいハエのように見えた。

ささくれ立った神経を気にすることも出来ず、先ほどからイライラしているのを自覚しながら鈴音は一夏に向かって《龍咆》を放ち続けた。

◆

一夏の戦術が目に見えて変化している事は、総合管制室にいる面々にも分かった。

「織斑君…何か秘策があるのでしょうか…？」

未だに逃げとも取れる動きを続ける一夏をモニター越しに見ながら、真耶がポツリと呟く。

一方、この時点で、千冬と一夏の練習光景を見ていた金寺は、ある程度の察しがついていた。

「一夏に残された、事実上の“切り札”…そしてその発動への策略…」

おもむろに口を開いた金寺に箒、セシリア、真耶が顔を向ける。

「その切り札の名前は――――“瞬時加速（イグニッション・ブースト）”、だ」

「イグニッション…」

「ブースト…？」

聞きなれない単語を耳にした箒とセシリアはよく分からないといった感じに首を傾げる。

金寺が確認を取るように千冬を向くと、彼女は頷き、説明を始めた。

「その通り。――私が教えた。一瞬でトップスピードを出し、相手に接近する奇襲方法だ。出しどころさえ間違わなければ、あいつでも代表候補生と渡り合える。しかし――――」

そこで千冬は一旦言葉を区切り、目をつぶってから再び鋭い表情を構築し、短く言う。

「――――この奇襲攻撃が使えるのは、おおよそ一度だけだ」

そこで金寺が千冬の説明を引き継ぐ。

「原理としては、ウイングスラスターから全面放出したエネルギーを一度取り込んで圧縮、そしてまた全面開放をする。そのときの慣性エネルギーを爆発的推進力に利用する、と言ったところだ」

瞬時加速による爆発的加速力と、【白式】の単一使用能力、《零落白夜》。

この二つが上手く重なり合えば、一撃必殺の強力な戦術になる。

それがまるで、【白式】の真骨頂とでも言うように。

◆

事実、先ほど一夏が考えていた“あれ”はまさにその瞬時加速だった。

丁度一週間前から、一夏は従来の訓練時間にあわせて千冬から二人きりで瞬時加速の特訓を続けてきたのだ。

そして今行っている行動は、鈴音をかく乱し、死角を見つけ、そこへ瞬時加速で思い切り飛び込もうというものだった。

現在も、一夏は縦横無尽にアリーナ上空を駆け巡り、鈴音の一瞬の隙を見つけようとしている。

鈴音をかく乱するにあたって、これまでの訓練が全て生きてくる

形となった。
基本的な旋回や航空に関しては、日頃から繰り返してきた事によりもうすっかり慣れている。《龍咆》に対しては、セシリアの【ブルー・ティアーズ】との何十回という模擬戦で慣れてきた回避運動で難なくかわす。《双天牙月》に対しては、箒との剣道の練習や模擬戦で感覚を思い出した間合いの取り方で自分のペースに持ち込み、金寺からアドバイスされた、【白式】の機動力を最大に生かせる一撃離脱戦法ですぐさま離れて、鈴音にペースを渡さない。

そして千冬直伝の瞬時加速で、勝負を決めるチャンスをうかがう。

今の一夏は、決して愚かに罠へ向かうモンシロチョウでもなく、鈴音の周りを飛び回る鬱陶しいハエでもない。
むしろ、茂みの中から虎視眈々に獲物を狙い今仕留めようといわんばかりの猛虎だ。

そして何より、もう一つ、目に見えて分かる鈴音の変化がある。

――――――さっきより攻撃が雑になってんじゃねえの！？

実際、そうだった。
一夏がかく乱作戦を開始して以降、確かに鈴音の一つ一つの攻撃が明らかに雑になっていた。

例えば、《双天牙月》。

先ほどまではただ単に力押しするだけでなく、的確にパワーを刀に加えて一夏を押し切ろうとしていた。それが、今となってはただ力任せにぶつけようとしているだけである。

さっき鈴音に向かって言い放った「本気出すからな」という台詞は、作戦の一つだった。

鈴音がやや気性の荒い性格という事を知っている一夏だからこそ、あのような挑発めいた台詞をわざわざ吐いたのである。

そして、今一夏がやろうとしている事は。

自分の姉の十八番だった、必殺技。

瞬時加速で相手の懐に潜り込み、《零落白夜》を発動した《雪片弐型》で相手を一刀両断。

こうして考えてみると、このためだけに【白式】というＩＳが存在するような気もしないことも無い。

そして――――そのときが来た。

一夏が上空にいる鈴音の死角を狙って彼女の下方を横切ったとき、不意に鈴音が一夏を見失ったのだ。

先ほどから虎視眈々とチャンスを狙っていた一夏が、これを逃すわけが無い。

（《零落白夜》起動！瞬時加速！！！）

心の中で強く叫んだと同時、《雪片弐型》の刃が眩い煌きを放つビームブレードへと姿を変える。

背後の二基のウイングスラスターがコアエネルギーを全面解放し、一旦内部に取り込んで圧縮。

次の瞬間、再び圧縮されたインフィニティ・エネルギーが全面解放され、【白式】の背中に神々しい光の翼が宿った。

そして、一夏は狙いを上空にいる【甲龍】に定める。

「うおぉぉおおおっ！！」

一夏が雄たけびを上げた瞬間、《零落白夜》と瞬時加速によって爆発的推進力を得た【白式】が、先ほどとは比べ物にならない猛スピードで鈴音に向かっていく。

一瞬、回避行動をとろうとしている彼女が顔面蒼白になっているのが見えた。

だが、気にしない。

これが、一度きりのチャンス。これが、最後の一撃。

一夏と鈴音の間に直線が結ばれ――――――

――紅い一筋の光が駆け抜けた。

一夏と鈴音を結んでいた直線の真横を。

2. 強襲

◆

それは、アリーナ上空から来た。

突如迸った赤い光は、爆炎と轟音を上げ、地面に着弾する。

反射的に、一夏も鈴音も動きを止める。

一瞬、一夏は【甲龍】の奇襲攻撃かと思ったが、

『何……！？』

ただ驚いている様子からして、その可能性は無くなった。

モニターで自機の様子を確認したが、何か異常が起きたわけではなく、瞬時加速が暴走した形跡も無い。

『システム破損！何かがアリーナの遮断シールドを、貫通してきたみたいです！』

総合管制室から、二人の耳に焦せった様子の真耶の声が飛び込んできた。

それが示す事実は唯一つ。

完全な、緊急事態。

『試合中止！織斑、凰！直ちに退避しろ！』

この千冬のアナウンスがアリーナに響き渡った瞬間、一気に客席から動揺が生まれた。

客席用のシェルターが下がり、それらの声が遮られる。

「何が起きたんだ…！？」

紅い光が迸ったのが分かっただけで、それ以外は全く分からない。

今も、光が着弾したところからは黒煙が上がっていて、何が起きているか見当もつかない状態だ。

『聞こえた！？試合は中止よ、すぐピットに戻って！』

鈴音からの通信が入ると同時、モニター右に赤枠の警告文がポップアップされた。

――――ステージ中央に熱源
所属不明のＩＳと断定
ロックされています

――――ＬＯＣＫＥＤ

「ロックされている…？俺が…！？」
『聞こえてるの！？早くピットへ！』

状況に追いつけていない一夏の元に、鈴音から通信が入った。

「お前はどうするんだ！？」
『あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！』
「何言ってんだ！お前をおいてのこのこ引けるかよ！」
『って言ったって、アンタＩＳに触ってからそう時間が経ってないでしょ！？あたしの方が経験あるんだからしょうがないでしょ！』

真正面から正論を言われ、一夏は返す言葉を失う。
確かにＩＳの操縦者としての経験、実績は、完全に一夏より鈴音の方が上だった。

『別にあたしも最後までやりあうつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生がやってきて収拾――――』

鈴音が言い終えるよりも早く、一夏の勘が彼の体を突き動かした。

同時、黒煙の中から再び紅い光が迸り、それが【甲龍】に襲い掛かる。

すばやく動いた一夏は、突如迸った光に怯んだ鈴音の腕を強引に掴み、光条から彼女を遠ざける。なるべくバランスをとりやすいようにするため、支点を背中と膝裏へ移した。

「セシリアの【ブルー・ティアーズ】と同じビーム兵装か……！」

それにビーム砲が高出力である事は、これらに詳しくない一夏にもすぐ判った。

第一アリーナ上空には遮断シールドが施されており、そう簡単には突破できないはずだ。

にもかかわらず、今のビーム砲はその遮断シールドを軽々突き破ってきたのだ。あたればその被害はとんでもない事になるだろう。

『……あ、ちょっ、ちょっとバカ、離しなさいよ！』

「――――ってうわあっ！？そんなトコで暴れんな！！」

『一夏にお姫様抱っこをされている』という予想外の状況に、暫し呆気に取られていた鈴音だが、その事実を把握すると慌てて一夏から――――恥ずかしいので、離れようと暴れ出した。

それに吃驚した一夏は、自身に及ぶ被害を防ぐため、素直に彼女を離す事にした。

「大丈夫か？」

『あ…う、うん。ありがと』

鈴音が言葉を切った直後、二人の耳に電子警告音が入ってくる。即座に反応した一夏と鈴音が回避行動をとると、再びビーム砲が襲い掛かる。

その直後、黒煙が消えて、敵機が姿をあらわした。

巨大な腕と足に反して華奢な胴体と言う歪なフォルム、通常のＩ

Ｓの二倍はあろうかと言う寸胴なその巨体、無機質さを感じさせる、ビームと同じ紅に光る人の目のような穴。

そして何より特徴的なのが、全身装甲（フルスキン）。――――通常、ＩＳはシールドバリアによって操縦者が守られるため、基本的に装甲は、胴体、脚部、腕などの最低限の部分にしか存在しない。

物理シールドを兵装として搭載している機体もあるのだが、前方にいるＩＳは、人間の肌ともいえる部分が、１ミリも露出していないのだ。

まるでこの世のものではないような感じを、その機体――――巨人は醸し出していた。

その姿はまるで、【ゴーレム】と呼ぶのにふさわしい。

「こいつは…これでもＩＳなのか…？」

一夏がそう思うのも無理は無い。黒煙の中にいる【ゴーレム】は、彼の知っているＩＳとは全然違った。

その【ゴーレム】は、じっとこちらを見つめていた。動く気配が無い。

「お前は何者だ！答えろっ！」

通信回線を全領域に開き、一夏は【ゴーレム】に向かって声を張り上げた。

だが、返事は無い。

表情をしかめる一夏の元に、総合管制室から通信が来る。

『織斑君、凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！先生達が、すぐにＩＳで制圧に行きます！』

『残念ながら、そんな暇ないぞ』

真耶の声が響いた直後、別の声が入る。女性のものではない、低く鋭い声。

金寺龍輔だった。

「どういう事ですか？」

『今、あの寸胴野朗の放ったビーム砲の大体の威力と射程距離を計算した。……その結果だが、通常のＩＳでは再現しようの無い出力と射程距離が確認できた』

ビーム砲がアリーナを貫いたとき、金寺はその場にいた誰よりも早く行動を取った。

学園の外部にある監視カメラの映像を、全て自分の手元にあったモニターに移し、ビーム砲によって地面にあいた風穴から威力、射程距離のある程度の予測数値を出したのだ。

これは、金寺にしかできない芸当である。

『……分かりやすく言えば、あれを二、三発ぶっ放てばアリーナのシェルターも危ない…！』

つまり、ここで一夏たちが引けば、無防備な一般生徒に被害が及ぶ可能性がある。最悪、死人が出る可能性もあるのだ。

『嘘でしょ…！』

愕然とする鈴音の声を聞きながらも、金寺は一夏と鈴音に向かって話す。

『あのクソ野朗をぶっ潰せとは言わない……先生たちが来るまでの時間稼ぎだ。――お前ら二人、出来るな？』

金寺から来た予想外の問いに、一夏も鈴音も一瞬驚いた。

だが、二人は顔を見合わせ、

「――分かりました」

『…やってやろうじゃない』

決然と、意志を決める。

これは、生徒を守るための戦いだ。一歩も引けない。

『そっ……それは、そうですけど……でもいけません！』

『一夏さん！』

『一夏！』

真耶の後に立て続けに聞こえてくるセシリアと箒の声を聞いても尚、一夏の決意が揺ぐことはない。

しかし、確か管制室はアリーナに直通の通路があったはずだ。

「……セシリア、頼みがある」

◆

一夏の揺るがない決意は、鈴音も同様だった。

「いけるな？」

『…誰に向かって言ってんのよ』

一夏の問いに、鈴音から不敵な返事が返ってくる。

それを見た一夏は思わず笑みをこぼす。それを見て鈴音も微かに笑みを浮べた。

そして、前方の所属不明機――――仮称、【ゴーレム】に向き合う。

直後、敵機はその巨大な足で地面を蹴り上げ、空中へと飛ぶ。

「来るぞ！」

そう一夏が言い切る前に、鈴音は動いており、一夏もそれに続く。

巨体に似合わぬ俊敏さだが、二人は難なくその攻撃をよけきる。

歪な拳は空を切るも、散開した両者に向け、【ゴーレム】はビーム砲で攻撃。最初の一撃とは違い、殺傷力を弱めての拡散形式だ。

それをかわし、《龍咆》の援護射撃を受けながら一夏は《雪片弐型》をかざして接近しようとするが、【ゴーレム】の張るビームの弾幕に遮られて近づけない。

『私が援護するからアンタは突っ込みなさい！武器それしかないんでしょ！』

「ああ…よし、それでいくぞ！」

再び一夏は気合を入れなおし、【ゴーレム】に向き合う。

敵のスピードは依然速く、腕の収束ビーム砲を撃ちながら、《龍咆》を拡散し放つ鈴音の真横を凄まじいスピードで通り過ぎる。

一夏は再度接近しようとするが、【ゴーレム】はビーム砲を拡散し、またしても一夏が近づけないように弾幕を張り、遠ざかる。

「くそっ！速すぎる！」

その動きには一切の無駄がなく、巨体のイメージに合わぬスピードを発揮している。

戦いの雲行きが、怪しくなってきた。

◆

「第二アリーナ遮断シールドレベル４…？」

総合管制室にて。

真耶に代わり、管制システムの操作を行っていた金寺は、目の前に現れたウインドウを見て唖然とした。

「これでは、非難も救援もままならない…！」

彼の後ろで、悔しさを押し殺すように千冬がうめき声を上げる。

これによって、教員がアリーナ内部に突入することも、客席にいた生徒がアリーナ外部に出ることも不可能となったのだ。

「あのＩＳの仕業……」

横で考え込むセシリアに金寺が同調する。

「そう考えるのが妥当だな……突如強襲し、アリーナの緊急シークエンスを強制操作…一体何が狙いなんだ？」

「でしたら…！緊急事態として政府に救援を！」

行き着く気配がない問いに金寺が頭を抱えていると、セシリアは後ろを向いて千冬に向かって言った。

「やっている。現在――」

「そんなモン今終わるぞ」

金寺が千冬の声を遮るように言うのを聞いて、全員の視線が彼の操作するモニターに集まった。

「システムクラックコード００３３４…通達シークエンス０８１、

2Bから6Eに移行……。これでOKだ」

そして、セシリアに向き直り、

「一夏からの依頼、忘れてないだろ？――――行ってこい」

◆

一方、戦場では情勢に変化が起きていた。

「第二アリーナがロックされた…！？」

突如飛び込んできた情報に、【ゴーレム】を追いながら一夏は目を丸める。

『嘘でしょ！？本当に！？』

「ああ、さっき金寺先生が言ってた…！」

鈴音の驚愕の声に返事をしつつ、一夏は【ゴーレム】の懐に飛び込む機会を窺う。

そして――――依然、地上を高速で動きまわる巨人の動きが、一瞬硬直した。

「そこだあっ！！」

この機会を逃さないと言わんばかりに、一夏は【ゴーレム】の左

側から一機に胴体めがけて突進する。

だが、【ゴーレム】は再び動き出す。

その左腕を、横薙ぎに振るってきたのだ。

まともに当たれば、大ダメージは避けられない。すでにその巨体に肉薄していた一夏は反射的に右方向に体をねじって回転し、その攻撃を何とかかわした。

それに合わせて、右腕のビームソードモードの《雪片弐型》が真上に振り上がる。

剣の一太刀が向かう先は【ゴーレム】の左脇。このままいけばどうなるか、それは一夏にも分かる。

だが、慣性に従った右腕の動きは止められない。

一夏が、鈴音が、金寺が何かを言う前に、《雪片弐型》の一閃が、【ゴーレム】の左腕を肩口から吹き飛ばした。

◆

一夏が振り返った直後、【ゴーレム】の肩口から盛大に爆発が起きる。

赤い液体が、洪水のように切断された場所から吹き出た。

『ば…バカ…っ！何…や、ってんの…っ…！？』
「俺だってそんな……！！」

あまりの事態に顔を真っ青にする鈴音と一夏。

だが次の瞬間、今度こそ二人が絶句する。
左腕を肩口から切断されている【ゴーレム】が、再び突進してきたのだ。

呆然としつつ二人は危なげなく回避。左腕を失っているせいか、やや機体のバランスが取れていなかったが、それでも圧倒的なスピードは変わらない。不思議な事に、一刀両断された左腕を気にしている様子は一切なかった。

「何で…？腕を切られたのに…！」
『これを見ろ』

驚愕する鈴音と一夏の元に、金寺から光学カメラの詳細データが送られてくる。

そこに映っていたのはアップされた【ゴーレム】の左肩の付け根の画像。
このＩＳを人間が操縦しているのならば、そこから人の骨なり、血液なり、人肉が見えているだろう。

だが、それが無い。
本来それらがあるであろうところにあったのは、電子配線や人間のものとは違う骨組みのようなものが存在していた。

つまり。

それが意味する答えは、一つ。

『――あれは……無人機だ…！』

鈴音は信じられなかった。

ＩＳは、人が動かさなければ動かない。

その事は彼女の頭の中に常識として、普段から居座り続けてきたのだ。

だが、一夏と金寺は、【ゴーレム】がもしかしたら無人機なのではないかと、予測がついていた。

アリーナの遮断システムをロックし、学園の情報網をもってしても所属不明扱い。おまけに、先ほどのように【ゴーレム】が動きを止めるときは、一夏たちが何らかの会話をしているときだった。

単純に、奇妙な点が多すぎるのだ。

それもあの巨人が無人機だという事実を知れば、当然といえば当然であったようにも感じる。

「ってことは……これでやれる…！」

『何か策があるわけ…？』

「ああ」

相変わらず地上から無尽蔵にビームを浴びせてくる【ゴーレム】に対峙しながら一夏は自信を持った表情で答える。

鈴音が息を飲んだのがわかった。

「【白式】の単一使用能力…《零落白夜》は、相手のシールドエネルギーを削り取る事が出来る……それは操縦者にダメージを直接与えるから、あまり模擬戦だと力を出し切れないんだ」

一夏が鈴音に話し掛けている間、先ほどのように【ゴーレム】はその動きを止める。

「だから相手が無人なら…本気を出せる」

そう確信している一夏だが、一つ問題があった。

先ほどのように、【ゴーレム】に肉薄するには瞬時加速を兼ねて《零落白夜》を発動しなければならない。

それを実現するためのエネルギー残量を、今の【白式】は持ち合わせていなかった。

それ知ってか、金寺から再び通信が入る。

『織斑一夏に問題』

「？」

『瞬時加速の原理はなんでしょう？』

いきなり出された問題に一夏は思わず頭を抱える。それによって会話が遮断されたため、【ゴーレム】が再び収束ビーム砲を撃って

きた。

「ええ！？ええっと確か……ウイングユニットから全面放出したエネルギーを一度取り込んで圧縮してからまた全面開放をしてそのときの慣性エネルギーを加速に利用する、でしたっけ！？」

『大正解。ちなみに、【甲龍】の《龍咆》も、見えないとはいえ立派なエネルギー砲弾だ。――ここまで言えば……分かるよな？』

「？？？？？」

にやりとモニター越しに笑う金寺を見て、一夏は自分の頭が混乱していくのを感じた。

（何なんだ？全く分かんねえ！……待てよ、瞬時加速は一旦放出したエネルギーをまた取り込んでから放出する……そしてあの衝撃砲もエネルギー砲弾……――――まさか！！）

この瞬間、一夏の脳内で完全な勝利の方程式が浮かんだ。

金寺との会話の真意をやっと理解したのである。

ビーム砲をかわしつつ、一夏は口元をぎゅっと締めた後、少し離れたところにいる鈴音に向かって通信回線で叫ぶ。

「鈴！俺が合図したらアイツに向かって最大出力で衝撃砲を撃ってくれ！！」

『いいけど……――当たらないわよ！？』

「問題ないさ！」

自信満々に答える一夏を一瞥して、了解したのか鈴音は頷き、一夏とともに再び回避運動に専念する。

地上を滑空しながら二機に向かってビーム砲を放つ【ゴーレム】から目を離さず、一夏は千載一遇のチャンスをうかがう。

そして、死角に回り込んだ鈴音を捉えようと巨体が体の向きを変えた瞬間――――

『一夏ぁっ！』

何故か、アリーナのスピーカーから、箒の声が飛び込んできた。

『男なら……男なら、そのぐらいの敵に勝てなくてなんとする！』

どうやら、管制室を抜け出して激励しにきたようだったが、それが最悪の事態を生み出していた。

『――――何やってんのよ、あの娘！！』

【ゴーレム】の残った右腕が、箒に向く。

このままでは、すさまじい破壊力を持った光条が、箒に襲い掛かる。

猶予は、無い。

「今だ！！鈴、撃て！！」

「分かった――――――――――！？」

そう言って、鈴音が《龍咆》の射出エネルギーをチャージする。

だがその直後、彼女の目が驚きに見開かれた。

《龍咆》と【ゴーレム】の射線上に、一夏が入り込んだのだ。

これでは、衝撃砲の一撃が自分にに命中する。

しかし、それも策の内。

『何やってんのよ！！それじゃあ当たるじゃない！！』

「いいから早く！！」

自分の行動の真意がつかめず、唖然とした鈴音だったが、最早やるしかないと腹をくくったようだ。

『――ああもうっ！！――――――――どうなっても知らないわ、よっ！！！』

半ばやけくそ気味に割り切ると、鈴音は言われたとおりに最大出

力で《龍咆》を放つ。
そしてそれは、【白式】の背部に命中し――
――衝撃砲の生み出したエネルギーが、【白式】に取り込まれた。
何が起きているのか全くもって分かっていない鈴音を尻目に、一夏は背後からの衝撃に耐えつつ、目の前のモニターを確認する。
Ｉｎｆｉｎｉｔｙ－Ｅｎｅｒｇｙ……７２０．
Ｒｅｓｏｎａｎｃｅ－Ｐｒｏｐｏｒｔｉｏｎ……７８Ｐｅｒｃｅｎｔ．
Ｃｏｒｅ－Ｂｙｐａｓｓ……Ｔｈｅ ｅｎｔｉｒｅ ｓｕｒｆａｃｅ Ｌｉｂｅｒａｔｉｏｎ

――――単一使用能力（ワンオフ・アビリティー）《零落白夜（れいらくびゃくや）》・発動可能.

再び《雪片弐型》が神々しい眩い煌きを放つ。
同時に、彼の後方で、爆発のような光の翼が発生した。

そんな事には目もくれず、一夏は【ゴーレム】に向かって凄まじい速度で迫っていく。

【ゴーレム】もはじき返そうと腕の収束ビーム砲を構えるが、遅い。
ビーム砲を相手が放つ前に、一夏は巨人の懐へともぐりこむ。

そしてついに、《雪片弐型》の一閃が、【ゴーレム】の胴体を真横に切り裂いた。

だが、次の瞬間、ビーム砲では遅いと判断したのか、【ゴーレム】は余った右腕を横殴りに振るった。

その衝撃に、自然と一夏は吹き飛ばされる。

「がぁっ……!?」
『一夏!!』

鈴音の悲鳴に大丈夫、と答えようとした一夏は、自分の体が動かない事に気付く。

見ると、巨人がその豪腕で、一夏を【白式】ごと握りつぶそうとしていた。

鈴音は、先の衝撃砲で消耗している。そう簡単には救援に来られないだろう。

だが。

「今だ……撃て！セシリア！」

『ええ……照準は完璧』

通信機越しに響く、少女の声。

『狙い撃ちます！』

狙撃手の声が響いた瞬間、青白い光が、【ゴーレム】の胴体を一直線に貫いた。

遅れて、爆発。

派手に火の粉があがり、一夏を拘束する力が緩む。

だが、【ゴーレム】は腹部のビーム砲を、一夏に向けようとしている。

『まだだ！止めを刺せ！』

総合管制室から届いた千冬の声を聞き、一夏は少し巨人から距離を置く。

――――――と。

その時だった。

アリーナの物陰から飛来した、一条の淡いピンク色の光が、【ゴーレム】を撃ち抜いた。

「……え？」

止めを刺そうとした一夏は、思わず間抜けな声を上げていた。

同時、目の前では、動力源を撃ち抜かれたと思われる【ゴーレム】が、ひときわ激しいスパークを機体のあらゆる場所から上げていた。

『――――――その場から離れろ！！』

耳に響く、千冬の声。

言われるまでも無い。一夏だけでなく、鈴音とセシリアもバックブースト。

そして、すさまじい爆発音を上げ、すさまじい衝撃を生み出した【ゴーレム】は、爆煙と、用を成さない鉄塊に成り果てていた。

2．強襲（後書き）

さて、一夏ですが、鈴音とのゴダゴダが無かったのと、セシリアと箒が節度を持って訓練に付き合ってくれたので、ここまで善戦する事が出来ました。

最後に放たれた一条のビーム。

ある程度、予想がつくと思いますがいかがでしょう？

3．闇の始動（ダークネス・イグニッション）

◆

「……本当に良かったのか？」

【ゴーレム】が大爆発を起こした直後、管制室に戻ってきた金寺に千冬はそう言った。

その一言には、呆れや心配の感情が入っているように、真耶は思えた。

「いいんだよ、結果オーライだ」

短くそれだけ言うと、金寺はアリーナ中央にいる三人に通信を送るために、機器を操作する。

その途中に、真耶は気づいた。

黒のスーツを着ている彼の手首に、まるでリストカットの後のような切り傷があったのだ。

それはまだ血がにじんでいて、かなり新しい傷らしい。

「全員、総合管制室にくるように」

『…分かったわ』

『…了解です』

『承知しましたわ』

各自から、しぶしぶといった感じの返事か帰ってくる。

自分を含め、結果的に彼らはこの事件に関わってしまった。学園上層部から口止めのような何かしらが言われるだろう。

そう考えると若干気が重くなるのだが、金寺はそれとは同じようで違う表情を浮べていた。

「箒がどこにいるか、わかるか？」

「篠ノ之さんですか？さっき第三音響室に行って…」

「そうか…ありがとな」

溜息混じりにそう言うと、金寺は再び管制室を後にしていく。先ほどの箒の行動は、真耶に冷や汗をかかせるには十分すぎた。

迂闊だったのは、先の全身装甲によるハッキングが金寺によって解除され、その事後処理を行うために手元の作業に集中してしまった事だった。

結果、セシリアがＩＳスーツに着替えに行った直後、千冬の隙を見計らって管制室を抜け出し、アリーナの第三音響室へ突入。一夏に檄を飛ばしたことによって、一瞬全身装甲にロックされてしまったのだ。

正直、あれは酷かったと思う。

ＩＳを前にして生身をさらすというのは、最早論ずるに値しない。彼女のあの行動が、一夏のことに考えが行き過ぎていてそちらへ思考が向いていなかったのかどうかは、分からない。

けどあれは、二度としてはならない行為だろう。千冬はもちろん、スピーカーから箒の声が響いた瞬間、金寺が悪態をつきながら管制室を飛び出していった事から、それは金寺も分かっているはずだ。

いずれにせよ、今日は気が重くなる事が多すぎた。

職員室で日本茶をのんびりすするという、日々のリラックスタイムが恋しいと思いつつ、真耶は軽く溜息をついた。

◆

「…そこにいたか」

「金寺先生…」

金寺が箒を見つけたのは、アリーナの出入り口だった。

自分の姿を確認した箒は、怯えているかのような眼でこちらを見てくる。

という事は、自分の先ほどの行為が愚かなことだったと、自覚しているのだろう。

「いくつか聞きたいことがあるだけだ。説教する気は無い」

軽く息を吐くと、金寺は前方の箒へ向けて歩を進めていく。

箒は視線を下に落としていて、金寺の目を見ようとしていなかった。

「…どうしてさっき、あのような行動に出た」

「それは…」

金寺が問いただすと、箒は答えに詰まったように再び視線を落とした。

「大方、一夏を叱咤激励しようとでも思ったんだろ？」
「そう…です…」

やっと帰ってきた箒の声は、注意しなければ聞き取れないほど細かった。

「で、その結果どうなった？」
「……あの機体に……狙いをつけられて……」

どうやら、箒は自身の行動がどのような事態を招いたか、しっかりわかっているようだった。

「分かってるなら今はそれでいい。この後どうしたらいいか、…それは自分で考えろ。…そうだ、教頭からお前らにお呼出がかかってるぞ」

くるりと体の向きを変えた金寺は、それ以上何も言わずに彼女の元を去っていく。

あえて説教をしなかったのは、今の状態でまともに聞ける状態ではなかっただろうし、何よりこの先彼女自身がどのように考えていくか、自分で判断させたかったからだ。

教師というのは、答えを“教える”のが仕事ではない。答えを“導かせる”のが仕事。

この学園に来たとき、千冬がそう言っていたのを思い出す。
まさにその通りだと思った。
これから先、箒がどのようになりたいのか、何を目指したいのかは、金寺は分からない。その上で、そこへたどり着くためには自分

で考え、自分で実行しなければならない。

言葉にはしなかったが、金寺はそう伝えたかった。

だったら最初からそう言えよ、と思わなくも無いが、箒の姉のことを考えると、その選択肢がベターだと思ったのだ。

（束……お前は今、何をしている？）

心の中でそう呟きつつ、千冬に呼び出しを喰らっていた事を思い出した金寺は、学園の校舎へ歩いていった。

◆

学園の教頭先生から緘口令をしかれた一夏、箒、セシリア、鈴音の四人は、人気が無い第二アリーナのロッカールームにいた。

緘口令を言い渡された直後、箒から一夏たちに対し謝罪があった。その内容は、先の事件にて、自らの身を危険にさらした上に、結果的に一夏たちを危険にさらしてしまった事に関してである。

本人はとても申し訳なさそうだったが、一夏たちは普通に許した。

一夏は、「結果的に俺らは無事なんだからそれでいいじゃないか」と言い、鈴音は、「無謀なまねはしないほうがいい、って教訓が出来たんだからいいでしょ」と気楽に言った。

その後、一夏と鈴音は制服に着替え、あの一件のことを語ろうとしたのだが、生憎寮のロビーは人が多かったため、わざわざこの場所を選んだのだ。

何せ、そうまで話したい事がある。

「……あのビーム砲は一体なんだったんだ？」

先の戦闘にて、アリーナの物陰から突如迸り、【ゴーレム】を一撃で沈めた淡いピンク色の粒子ビーム砲。

千冬曰く「教師陣による迎撃」らしいのだが、どうも彼らは納得がいかなかった。

「弾道速度、威力、命中精度…どれも、現存するＩＳのどれよりも上回ってましたわ…」

【ブルー・ティアーズ】に記録されているその映像を見ながら、セシリアが若干悔しそうに呟く。

やはり、ビーム兵器を扱う身として、目の前で自身をはるかに上回るビーム砲による狙撃を見せ付けられては、悔しいのだろう。

そんな彼女に同情しつつ、ロッカーに寄りかかっている鈴音が、セシリアに確認を取る。

「…確か、ＢＴ兵器って、イギリス以外で公表されて無いわよね？」

「わたくしの知っている限りでは…」

「…って事は、イギリスが…？」

「それは無いですわ」

一夏が出した一つの可能性を、セシリアはきっぱりと否定する。

「何故言い切れる？」

「わたくしの【ブルー・ティアーズ】は、イングランドで初めて実用化されたＢＴ兵器搭載型ですの。それ以外では、わたくしと【ブルー・ティアーズ】のデータを参考に現在開発が進んでいるＢＴ二号機以外、存在しませんわ」

「じゃあ……あれは何なんだ？」

セシリアの説明の後に発した箒の一言が、この場の四人の心境を物語っていた。

何もかも説明しようが無い。あの粒子ビーム砲を何が放ったのか、どういう意図があったのか、果たして自分たちを助けようとしたが故のことだったのか。

一学生である自分たちが入り込めるような領域ではない事は分かってはいるものの、それが自分たちの危険を救った以上、どうしても知りたくなってしまう。

だが、今は八方塞だ。先に進む事も、あがく事もできない。

「…仕方が無いわ。保留するしかないわよ」

「それもそうだな…このまま考えても答えが見つかるとは思えん…」

「今のわたくしたちではどうにもする事が出来ませんわね…」

鈴音、箒、セシリアが、諦めにも似た言葉を言う。

だが、一夏はいまだに納得がいかなかった。

「…でもよ、やっぱり知りたいよ、俺は」

あきらめない、絶対突き止めてやる、といった感情を滲み出しつつ、一夏は喘ぐように言った。

彼がここまで執着するには、れっきとした理由がある。

あの時、【白式】が感じたのだ。

何かの、昂揚感に近いものを。

その存在に、歓喜するかのように。

◆

ＩＳ学園、地下施設。

病院の診療台を思わせるベッドには、先ほど一条のビーム砲の一撃で散った【ゴーレム】が眠っていた。

それは、中身がからっぽの、ＩＳと呼べるかどうかすらわからない代物だが。

天井からは機械の溶接などに使うだろう機器が吊るされていて、どうやら、ＩＳの解体作業に従事しているようだった。

あの後、騒ぎにまぎれて教員は、学園上層部からの指令を受けて秘密裏にこの所属不明機を回収していた。

ビーム砲に胴体を穿たれて爆散した【ゴーレム】は、何とか原型をとどめている状態だった。

幸いにも、その巨人に搭載されていたインフィニティ・コアには損傷は見られなかった。

だが、そのインフィニティ・コアに、問題があった。

「結果は出たか？」

「はい、それが…」

研究成果を千冬に問われ、別室にいる真耶がキーボードを叩きつつ、答えようとして、言いよどむ。

「確かにこれはコアですが……正確に言うと、コアじゃないんです」

「どういうことだ？」

予想だにしない真耶の答えに、千冬が思わず声をあげる。

金寺が地下施設に入ってきたのは、丁度その時だった。

「…本来無限炉にあるべき機能が無かった、とでも言うべきか？」

そう言う金寺に千冬は怪訝な視線を向けたが、真耶はそれに肯定した。

ちなみに、無限炉というのは、金寺がコアに名づけた日本語名のようなものである。

「そうなんです。…これ、コア・ネットワークが一切確認できなかったんです。それに、他にも細かい所ですけど、金寺先生が言った通り本来コアにあるべき機能が無いというか…」

それを聞き、考え込む千冬に対し、金寺はある程度の考察が既に出来ていた。

「…海賊版」

千冬と真耶の視線を受けつつ、金寺は持論を口にする。

「こいつは…疑似無限炉、とでも言うべき代物かもな…」

「疑似無限炉？」

真耶が首を傾げるのを確認しつつ、金寺は言葉を続ける。

「要は、戦闘のみ重視したコア…本来の用途であるはずの、宇宙進出を無視した、純粋な軍事用のもの…」

「それって…」

「…かなりまずい事になるな」

重苦しい様子で、真耶と千冬が口を開く。

「現在ＩＳのほとんどが軍事転用されている…もしこれが流出する事があれば…」

そこから先は、言わずもがなだ。

核兵器と同等の力を持つといわれているＩＳ。中枢のコアの数が制限されているからこそ、今の世界は均衡がとれているようなものだ。

そこに、純粋な兵器用かつ、量産可能なコアが登場すればどうな

るか。おそらく各国の軍備増強が進み、下手すれば第三次世界大戦が起こりかねない。

「…山田先生、このデータは完全にブラックボックス化しておくように。絶対流出するような事があっては…」

「…分かっています」

千冬の言葉を聞き、事の重大さをかみしめた真耶は、重く頷いた。

それを確認し、今度は金寺の方を向く。

「…金寺、この“疑似無限炉”とやらの解析を進めてくれないか？ともかく、今のままではデータが足りない」

「…やれるトコまでやってみる」

そう言いながらも、金寺は千冬からデータ保存のメモリースティックをもらい、“疑似無限炉”のデータを取り込む。

各々が、迫りくる大波乱を予感していた。

◆

中東、ドバイに存在する、高級ホテルの最上階の部屋。

そこには、二人の女性がいた。

一人は、黒髪の少女で、見た感じは１５歳ほどに見える。
もう一人は、薄い金髪の美しい女性。

薄暗い部屋で二人は、モニターに移されているデータと映像に目を通していた。

「…あれは撃破されちゃったみたいだけど、ミッションは成功ね」

一通りデータ――――ＩＳ学園から盗んだ――――を確認した金髪の女性は、満足そうにそう言うと、別室へと戻っていく。

一方で少女は、ソファーに座りつつ、映像のほうを凝視していた。
その中では、白いＩＳとマゼンタのＩＳが、全身装甲のＩＳに向かって攻撃を行っていた。

（つまらないな…）

ふと、少女は心の中で呟いた。

生ぬるい、と思う。
今モニターに映っている戦闘が、彼女にしてみればとても生ぬる

いものに見えた。
自分なら、この全身装甲を、一分もかからず鎮圧する事が出来る。
なのに、今モニターに映っている、白いＩＳをまとっている少年と、マゼンタのＩＳをまとっている少女は、かなり苦戦しているようだ。

つまらない。
もう一度、その言葉を口に出さずに呟く。

だが次の瞬間、予想外の事態が起きた。

突如、どこからか来た淡いピンク色のビーム砲が、寸分狂わず全身装甲の動力源を撃ち抜き、爆煙と用を成さない鉄塊に姿を変えしめたのだ。

驚きを禁じえない。
あのような威力が高く、精度もよく、弾道速度も速いビーム兵器の一撃は、見たことが無い。

少なくとも、そのそばに停滞している青いＩＳ――――アイルランド製のＢＴ兵器サンプリング一号機――――の一撃ではないようだ。

だが、少女はそれすらも一蹴する。
唯一考えているのは、自身の復讐の対象である少年のことだ。

「織斑一夏…苦戦したようだな…」

自分の存在意義をかき消している、憎むべき少年。

両目の虹彩を銀色に輝かせ、呪詛を込めつつ、言う。

「少しは楽しませろ……それほどの事を、貴様はしたのだからな」

幕は、まだ開いていない。

3．闇の始動（ダークネス・イグニッション）（後書き）

かなり早い段階で、闇は動き始めました。

ちなみに、五人のヒロインズでそれぞれが誰に惚れるかはある程度決めているのですが、ラウラだけが決まっていないという事態に…！

そこで、アンケートをとりたいと思います。

ラウラが惚れるのは金寺か、一夏か。
どちらか希望を書いて、感想欄に書いてください。

今後の物語の展開を大きく左右するアンケートなので、是非投票をお願いします！

後、一言でもいいので感想をいただければ幸いです。
くれるとモチベーションあがるので。

1. 生徒会長

◆

結局、一学年のクラス対抗戦は、別の一回戦をやっただけで終了した。

あの襲撃事件が理由なのは言うまでも無い。

事実、事件にかかわった一夏、箒、鈴音、セシリアには緘口令が敷かれ、金寺、千冬、真耶といった直接かかわった教師たちにも、口止めがかかったのだから。

だが、二学年と三学年のクラス対抗戦は、別のアリーナで滞りなく行われる事となった。

◆

そんな中、夕食を食べ終え、あくびを噛み殺しながら金寺は自室へと向かっていた。

この日は三学年のクラス対抗戦が行われ、三年二組が優勝した日だった。

一学年の基礎理論、二、三年生の整備学、全学年の世界史に携わっている彼は、この日も職務が残っていた。

別に忘れていた訳ではないのだが、この日は自分の担当の授業が無かったばかりに研究――――主に【白式】関連の――――に没頭してしまい、夕食前に千冬の姿を見て思い出したのだ。

面倒くさいモンは早めに終わらせるに限るな、と思った金寺は、

（……やはり、つけられている？）

食堂を後にしてしばらくたったが、先ほどから何者かの気配を感じていた。

何度か気付かれぬように振り返って見たが、人影は見当たらない。

察知力は人並み以上に優れている金寺ですら察知しにくい追跡力。少なくとも、一般人の行えることではない。

さて、どうするか。とりあえず、放置しておくわけにもいかない。

金寺は自室への道をはずし、階段の方向へ向かう。そして階段の陰に隠れ、追跡者がどう出てくるか、息を殺して窺う。

もしもの時の迎撃用に、金寺の右手には漆塗りの万年筆が握られている。

そして――――――追跡者が、階段の陰から姿を現した。

即座に金寺は追跡者の背後を取り、その腕をとろうとしたが――――追跡者は目にもとまらぬ速さで動き、金寺の束縛を逃れる。

それだけでなく、追跡者の手に持っている扇子が、金寺の即頭部を襲う。

「っ！？」

突然の事態だったが、金寺は持ち前の動体視力で鋭く反応。それをかわし、手に持っていた万年筆で攻勢に出る。

そして。

追跡者――――青髪の少女の持っている扇子が。
金寺が手にしている万年筆が。

それぞれ相手の喉仏を、捉えていた。

「も～いきなり女の子に攻撃しようだなんて、普通の男の人のやる事じゃないよ？」
「……相手による、と訂正しておこうか」

飄々とした青髪の少女の声とは裏腹に、金寺の口調は重々しいものだった。

◆

数分後、両者は１０２６号室――金寺の自室兼研究所にいた。

「――――で、その生徒会長様が俺に何の用だ」

「だ・か・ら、そんな堅い表情しないで？いい男が台無しよ」

「……」

デスク前の椅子に座り、ベッドの一つに腰掛けている青髪の少女を一瞥した金寺は、盛大に嘆息した。

結局、場所を移そうという事で金寺と少女は彼の部屋に移動したのだが、金寺はこの少女の意図が全く分からなかった。

「ま、とりあえず君に接触したかっただけなんだけど、ああいう手段に出られちゃね、お姉さん困っちゃうのよ」

ベッドにちょこんと腰をかけ、金寺に向けて不敵な笑みを浮べている青髪の少女の名は、更識楯無。二年生なのだが、この学園の生徒会長だという。

「で、俺に接触する理由は何だ？」

「この前君達が関わった事に関して」

金寺の眉が、ピクリと動く。

この前金寺たちが関わった事といえば、あの全身装甲襲撃事件以外に思い当たる筋が無い。

「…お前らはお前らで、動いていたのか？」

「そうね。…まあ、そっちが知っていること以外に特別目くじらを立てるような発見は無かったけど、そっちはどう？」

楯無の家――――更識家は、世界の闇を影から駆逐する、対暗部用暗部なのだ。ちなみに、楯無という名前は、代々更識家に継承される女の名前で、目の前にいる楯無は第17代目にあたる。

それゆえ、世界の裏事情に関してはとても詳しいので、そのネットワークを利用して楯無は今回の全身装甲襲撃事件を調査していたのだ。

恐らくは、金寺に接触を図ったのも、その情報収集の一環なのだろう。

「……けどよ、俺が口を割るとでも思ってんのか？」

「んー？おねーさんたち、君の秘密知ってるけどなぁー？」

明らかに、何かを含んだ、脅迫とも言える一言。

しかし、金寺が顔色を変えることは無かった。

「……だったらどうした？」

「あらつまんない。あまり動じないのね」

ややふてくされたような顔をする楯無だったが、当人の金寺はそれを気にせず、淡々と言った。

「別に隠す気もないし、おおっぴらに言いふらそうとも思わないからな。それに、最初から教えねえつもりは無いから安心しろ」

「それは良かった。で？」

僅かに身を乗り出して聞いてくる楯無に対し、脚を組みつつ金寺は低い声を出した。

「あの寸胴、一時的に学園のメーンコンピュータのデータベースにハッキングした事は知ってるか？」

「ええ、それは把握済みよ」

「その中にある、一学年全員の個人データが盗み取られてたそうだ。あとは、一時的にアリーナの備え付けカメラもその中の映像が流出したらしい」

事件後、上層部の許可を得て学園のデータベースを調べた金寺だったが、何者かが進入した形跡が見られたのだ。

流石に学園の機密事項だったため、たかが一教師の金寺がそれを目にする事はできなかったが。

「…明らかに情報収集ね。襲撃に関しては二の次って感じだわ…」

「だろ？俺の推測だと、どっかの組織が学園の情報収集のためにあの機体で襲撃してきた、って思うんだが」

「奇遇ね。私もよ。でも、こんな大胆なやり口、そんじょそこらの

組織ができる事じゃないわ」
「…という事は」
嫌な何かが、金寺の背中を滑り落ちる。
どうやらそれは、楯無も同様だったらしい。
「そうね……亡国企業、の可能性が高いわ」
「亡国企業…」
二人揃って苦々しく、その名を口にする。
亡国企業。
その起源すら分からない――第二次世界大戦以降の歴史のうねりから生まれたとされている――上に、その活動目的も、組織の規模もわかっていない。
現在唯一把握しているのは、起こす行動の対象が、ＩＳに向いている事だ。
一口に行動といっても、それは様々だ。略奪、破壊、関係企業への襲撃。少なくとも、ＩＳに関わる人々にとっては、邪魔以外の何でもない存在である。
「くだらねえよ。本当に…」
「そうかもしれないけど…こればかりはどうしようも、ね」
得体の知れない怒りを無理やり吐き出すように、二人は小さく言った。

金寺と楯無が憤りを感じているのは、その事件及び行動によって浮き彫りになる人々の思想だ。

亡国企業に関する事件となると、被害者側も加害側も、ＩＳを兵器として扱っているようにしか見えない。

「亡国企業含む敵対勢力に対抗するためには、更にＩＳを兵器として強化していかなければならない」。

そんな、亡国企業の被害にあった国の政府重役のいう事が、この二人にしてみればあまりにも馬鹿馬鹿しいものだった。

それつまり、ＩＳを無機質な機械、という眼でしか見ていないという事だ。

実際、そのような眼でＩＳをみていない二人だからこそ感じる憤りである。

それに、これらの事件は気付かぬうちに鎮火されている事が多く、一部のマスコミが、「政府の官僚に、亡国企業のメンバーが潜んでいるのではないか」と騒ぎ立てるほどだ。

これらの事件がこうして処理される理由は、やはりＩＳを肯定する側と否定する側のバランスが拮抗している事が第一だろう。

一連の亡国企業の行動は、ＩＳの存在を快く思っていない人間からすれば、賞賛に値するものである。

各国の政府内でも、実際には亡国企業の存在を肯定するものがわずかにいるため、それらによってもみ消されたりする事もあるといわれているが、定かではない。

こうして、思想の統一が図られていないため、事態はますます複雑なものに展開していくのだ。

実際、これほど滑稽なものは無いだろう。

「ま、私もこういう事態は想定してたけどね…」

楯無が不覚、と言わんばかりに言葉を吐き出す。

そしてこのたび、その矛先がついに、ＩＳ学園に向いてしまったのだ。

いつかはそうなるだろうと踏んでいた楯無は、こうして金寺に接触を図ったのだろうか。

「…そんで、これからそういうのに対処していくために、俺にコンタクトを取ろうとしたのか。じゃあ、何であんなやり口に出たんだ？」

「んー、ちょっと試してみようと思ってね」

試すというには、あまりにもやりすぎな気がした。

確かに、ああして本気で迎撃した金寺も金寺だが、それ以上に彼女のやり口はプロフェッショナルのそれだった。

それほど、ある程度金寺のことを把握していたという事だろうか。

「…まあいい。もう一つ質問だが、どうして俺なんだ？」

「さっき言ったでしょ？私は君の素顔を知っている。だから、ちょっと味方にしておきたくてね」

やや控えめな姿勢でそう言う楯無。

つまり、同じ学園――組織に所属し、その素性に特別な何かがある金寺を、自分の仲間としていたいのだろう。

楯無の口調から考えると、自分の駒にするというよりは、共同戦

線を組みたい、といった感じだ。

さてどうするか、と考えるまでもなかった。

第一、楯無の言い分は、かなり筋が通っている。

それに、彼女も亡国企業を忌々しく思っているだろうし、金寺も同様だ。お互いに学園の防衛を図るという面では、意見が一致するだろう。

あまり気にならないが、自分の素顔をベラベラ言いふらされるのもそれはそれで癪だ。

「乗った、その話」

「そんな簡単に、いいの？」

「連中が来たら潰す。それだけだ」

楯無の問いただすような一言にも、金寺は極めて短く答えた。

そのぶれない真意が、短い一言の中に凝縮されていた。

別に、金寺は積極的になって亡国企業を潰そうとしているわけではない。

自分たちの居城――学園を脅かす存在がこちらに来たら、ただ迎え撃てばいいだけの話。

一学園の一教師となった金寺には、そのような思想が芽生えていた。

「…なるほどね、わかったわ。じゃあ、こっちもこっちで情報を収集していく方針だから……もしものときは、よろしくね♪」

先ほどまでの真剣な表情はどこへやら、一転して子供っぽい表情に切り替えると、そのまま楯無はドアのほうへ歩き、部屋から出て行った。

何だあいつ、とでも言いたげな表情を浮べていた金寺は、気持ちを切り替えると別のことを考え始めた。

「亡国企業…」

連中が何を考えているのかは、さっぱりわからない。

だが、そのうちその毒牙が、ＩＳにかかわる人材を育成するこちらへ向くのは、時間の問題だろう。

大袈裟な話、それが明日という可能性だってゼロではない。

だからこそ、

（来るんだったら来い。その時は完膚なきまでに叩きのめしてやる…）

呪詛にも似た言葉を、声に出さず呟く。

何よりも、ＩＳを奪い、そのすべてを我が手に集約しようとする彼らの傲慢さが、金寺にとっては明確な拒絶の対象である。

楯無との今日の会話を忘れないようにし、金寺は意識を別のほうへ移すことにした。

1．生徒会長（後書き）

さて、当方ですが、もうすぐ学校の試験が迫っているので、今後更新速度が遅くなる可能性が大です。

申し訳ございませんが、ご了承ください。

2. 更識楯無（前書き）

アンケート（前々話参照）ですが、投票数がものすごく少ないので（涙）、期限を延期します。

楯無の飄々とした感じを書くのは、難しいです。

2．更識楯無

部屋に戻るなり、楯無は上下の制服を無雑作に脱ぎすて、下着のみの姿となった。

◆

「ふぅー…」

ちなみに、彼女の寮部屋は一人部屋である。

主な理由としては、彼女自身がそれを望んだし、対暗部用暗部の当主である以上、何らかの表沙汰にしたくない物事を円滑に進めていくには、一人部屋のほうがいい。

洗面所に向かい、下着もとって一糸纏わぬ姿になった彼女が向かったのは、バスルーム。

なんとなく、としか言いようがないが、とにかくシャワーを浴びたい気分になったのだ。

栓を捻り、シャワーヘッドから程よい温度の湯を噴出させる。素肌に当たる心地よいシャワーの水流は、まるで日々の疲れを一掃してくれるかのようだった。

なんとも親父臭い思考かもしれないが、これも仕方がないものだ。

対暗部用暗部の更識家の当主として、ＩＳ学園の生徒会長として、

それによる彼女の苦労は一般的な同年代のものと比にならない。

まだ彼女も所詮、17歳の少女。流石に荷が大きすぎるかもしれない。

だが、楯無はそう思ったことがなかった。

というよりは、楯無の名を授かったその瞬間から、そう思う余裕がなかったのかもしれない。

対暗部用暗部――それすなわち、汚れ仕事だ。

自らの手を血に染めて、世界の秩序を平定させる。そのためには、それ相応のものを身につける必要があった。

幼少期から鍛練を受け、対暗部用暗部の当主として、身につけるべきものはすべて身につけさせられた。

その中でも、年頃の少女としての振る舞いを忘れることはなかったが。

そしてその彼女は、生徒会長となった今年、新たな世界の闇と対峙することになる。

（亡国企業…）

少なくとも、楯無は今回の一学年クラス対抗戦襲撃事件の犯人が、亡国企業と見ていた。

あのような、大胆かつ確実で、状況による汎用性に富んだ手法。まさに亡国企業の常套手段だ。

それに加え、金寺が言っていた、「一学年全員の個人データが盗まれていた」というのは、間違いなく一夏たちに関することだろう。

そうなれば、確実に彼が――――彼にかかわる人物が、この一連の事件に巻き込まれていくだろう。

しかし、更識楯無にもプライドがある。

対暗部用暗部の当主として、ＩＳ学園の生徒会長として。

（学園は、守り抜く。私の誇りにかけて…）

その誓いだけは、シャワーの湯で一掃されることはなかった。

シャワーを浴び終え、楯無はバスルームを出る。

体をバスタオルで拭き、先ほどまでつけていたブラジャーと下着を、湯上りで若干蒸気が上がっている身につける。

ふと、鏡に映る自分の姿が目に入り、楯無は思わず正面に立ち、それをじっと見た。

話がそれるが、楯無のプロポーションは一般的なモデルなどと比べても、かなり抜群なものである。

決して巨乳というわけではないものの、引き締まった体も相まって、女性特有の美しさを感じさせるには十分すぎるほどだ。

その体の、右の二の腕と左太腿に、僅かに黒ずんだ切り傷がある。

更識家の当主として、歴戦の強者というまでではないものの、数多くの修羅場を乗り越えてきた。だがそれもすべてが一筋縄でいくようなものではなく、こうした傷を負うこともあった。

その中で、いまだに残る二つの傷。

この傷がついた理由は、彼女にとって簡単に忘れるような事が出来るものではなく、それはあまりいい思い出ではない。

彼女の白い肌にはいささか似合わないが、これは“更識楯無”にとっての“傷痕”なのである。

息を大きく吸い、呼吸を整えた楯無はそのまま洗面所を出ると、愛用の寝間着を着用する。

特徴的な水色の髪の毛を若干乱暴にハンドタオルで拭いて、そのままベッドに仰向けになると、そばの小テーブルの上においてある携帯端末に、電子メールが来ているのを確認した。

ごろごろと転がって携帯端末を手にとり、その内容を確認すると、部下からの報告だった。

何でも自分の祖母の命令で、更識家の実働部隊の８割が、今回ＩＳ学園で起きた襲撃事件と亡国企業の動きを同時に調査しているらしい。

何か亡国企業に関する事でも発見したのかと思い、携帯端末を確認。

そして、絶句する。

「……やっぱり、そうだったのね」

脳がその情報を正確に認識したのを確認し、あえぐような声を出す。

あの日、楯無は裏で行動していた。

突如一学年の試合中に巨人が侵入し、アリーナのシステムをハッキング。この事態に楯無は、まずこの事態を報告し、その後アリーナのハッキングを解除しようと奮闘する一方で、混乱する生徒たちを落ち着かせつつ、全身装甲を送りつけてきた連中が学園付近にいないかどうか捜索していた。

送りつけてきた連中が亡国企業だという事は、更識家の独自ネットワークを駆使した結果すぐに判明したが、その全身装甲を一撃で沈めた熱線の正体は、ある程度の推測が出来ていたものの判明はしなかった。

そして今、その正体が判明。正体は、楯無が予想したとおりのものだった。

…まさかとは思っていたが、本当にそうだったとは。

本当に、驚くほか無い。

――――あのような、大胆な真似をするなんて。

「まあいいわ、それはそれで。今後学園防衛の際の戦力となればいいけど…何も言わなくても動くでしょうね、あの人なら」

適当にそう呟き、携帯端末を小テーブルに置く。

何はともあれ、対抗する準備は整いそうだ。

どんな手段を用いようとも、この学園だけは守りきる。

生徒会長として、更識家の人間として。

一人の、ＩＳ学園の生徒として。

2. 更識楯無（後書き）

感想、そしてアンケート（前々話参照）の投票、是非お願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3531y/

IS インフィニット・ストラトス　黒き聖騎士の物語(ブラック・パラディンス

2011年11月26日01時47分発行